

(堆積土) 木根等による攪乱が多い。堆積土は1・2・6層の三層が主体をなし、1・2層は黒褐色土で、前者はシルトを混入し、6層は土器片を含む黒色土である。隣接する31号竪穴住居跡の堆積土にくらべ砂もしくは礫の混入が少ない。

(壁) やや外傾する立ち上がりで、検出面まで20cm～30cmの高さをもつ。北壁東端で段状を呈するが崩壊または木根攪乱によると推察される。南壁No2カマド寄りに段状の張り出し部分が認められる。

(床) 小礫混りの砂質地山土を床面としているが、生活面は黒色土や焼土が散在し汚れている。

(柱穴) P₁～P₇の柱穴状ピットがある。それぞれの規模はP₁の径18cm×18cm、深さ10cm、P₂ 16cm×19cm、深さ19cm P₃ 24cm×27cm、深さ21cm P₄ 17cm×20cm、深さ10cm P₅ 21cm×25cm、深さ8cm P₆ 27cm×19cm、深さ10cm P₇ 20cm×24cm、深さ16cmあり、P₁・P₄は方形、他は円もしくは楕円形のプランとみられる。堆積土は何れも黒色か黒褐色土で柱痕は確認できない。配置的には、P₁～P₄は対角線上に対になり、P₁—P₂、P₃—P₄間は1.3mと1.1m、P₁—P₃、P₂—P₄間は1.5m、1.8mある。また、P₂・P₄・P₆は東壁および西壁のほぼ中点を結ぶ線上にあり、1.8m×0.9mの間をもち、P₃・P₄・P₇は北壁と南壁の中点よりやや西寄りをつなぐ線上にあり、1.1m×1.2mの間をもつ、以上の配列を基本に、更にその組合せも考えられるが明確にし得ない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 西壁の南端にNo1カマド 南壁西端にNo2カマドが位置する。No1カマドは、燃焼部を若干掘りくぼめて構築した様相であるが明確ではない。左袖は遺存せず、右袖は、No2カマドに類似し壁を利用したものかと考えられるが確証はない。煙道は約60cm西にのびる幅35cm、深さ15cmの溝状を呈し検出面から15cmの深さをもつ。

No2カマド 南壁西端壁外に燃焼部があり床面より約10cmの段差をもち高くなる。間口45cm、奥行85cmが推定され、中央に須恵器環をふせてあり支脚に転用した可能性もある。左袖は壁に続け地山を削り出しその先端に黒褐色土とシルトによる構築部分を含み、右は地山壁である。煙道は燃焼部から緩傾斜で上がり長さ約50cm、幅30cm～50cm、深さ8cmほどで、先端にすばみ煙出し部の変化はない。その遺存状況からNo2カマドが新しいかと推察される。

(その他の施設) P₈・P₉のピットがある。P₈は48cm×53cm、深さ5cmの規模で焼土を堆積土の主体とする。P₉は35cm×45cm、深さ10cmの黒褐色土と上に焼土を堆積土とするピットである。位置とNo2カマドとの重複状況から、No1カマド期に属するものかとみられる。P₉の所属は明らかでない。両ピットの性格は貯蔵穴の可能性はある。

No2カマド東側の張り出し部は床面と10cm内外の段差をもつ、No2カマド方向や左袖の削り

出し状況から、No 2 カマド構築時の掘りこみと推定するが性格は不明である。

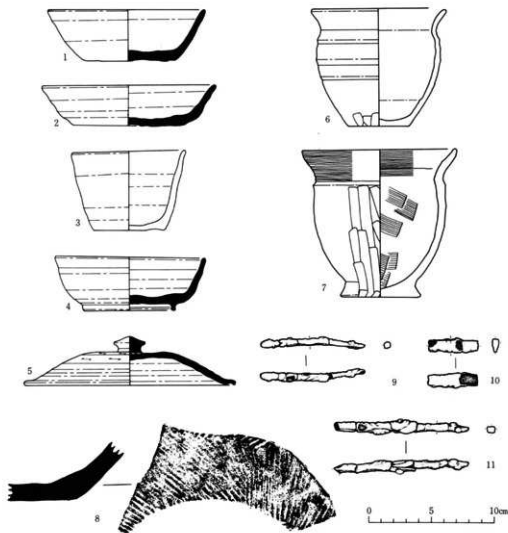
出土遺物 (第41図 第28表)

坏形土器 4点(台付坏1)、須恵器蓋 1点、変形土器 2点、鉄製品 3、須恵器拓影図 1点、計 11点の図示。

坏形土器No 1、2はA類坏。No 3はB類坏である。No 3の器種は本来的には猪口というべきものであるが、分類区分上では坏として取り扱っている。

No 5は須恵器蓋である。16.8cm径、ツمامミを含めた器高は3.9cm。胎土・焼成共良質である。

変形土器No 6・7は、2点共小型を呈する。No 6はロクロ成形。No 7は非ロクロの土師器で



第41図 32号(Lc33-2)竖穴住居跡出土遺物

ある。後者は木葉底。

鉄製品は床面より5片出土している。図示したのは、そのうちの3点である。詳細は下表を参照されたい。

第28-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			h/b	h/d	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	132	A 類	ヘラ切	無調整	/	12.5	7.4	4.1	1.7	3.0	59	
2	133	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.8	8.8	3.4	1.6	4.1	52	
3	134	B 類	調整のため不明	木口利用のナデ	底 部	9.0	5.6	6.4	1.6	1.4	75.5	底部外面に軽いナデ。内面口縁にカーボン付着。(床面上)
4		台付杯	ヘラ切	/	/	11.9	8.4 (口径)	4.4 (器高)	/	/	/	/
5	一	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体 上 部	(16.8)	3.4 (口径)	3.9 (口径)	2.0	1.3	/	(床面上)

第28-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種 別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大傾	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
6	136	土師器	10.8	4.7	9.4	10.0	ロクロナデ	コナコナナデ 子層ヘラナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	(床面出土)
7	137	土師器	(12.4)	6.5	11.9	10.6	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	(西コマド礎土内)
8	一	須恵器	拓形図。体部下端～底部片。平底。白褐色でやや軟質。内面、押圧痕にナデ。(堆積土)								

第28-3表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種 別	残 存 部 位	遺 存 状 態	法 量				断 面 形 状	備 考
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
9	138	角 釘	ほぼ完形品	不 良	84.0	5.0	5.0	4.0	方 形	(床面)
10	一	刀 子	刃 部 片	縁の部に残りよし	39.50	10.50	5.0	3.55	楕 形	(床面)
11	139	角 釘	頭部欠失	やや不良	108.0	—	6.0	12.20	長 方 形	(床面)
—	140	刀 子	刃 部 片	やや不良	49.20	—	—	4.45	楕 形	(床面)
—	一	釘 状	端 部 片	やや不良	56.80	—	—	3.40	長 方 形	(床面)

33号 (Lj21) 竪穴住居跡 (第42図 第29表 写真図版22・65)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西4m、南北3.5m、面積11.78m²で、やや東西に長い方形である。

コマド方向軸はN-84°-Eとなる。

(堆積土) 1層の黒色土、3層の黒褐色土、5層の黒色土が堆積土の主体をなし、1層は混入物がほとんどなく、3層で粒状のシルトと炭を、5層では焼土とシルトの混入と土器片を包

含する。全般に単純な堆積を示すが一部木根等の攪乱がある。

(壁) 比較的良好な遺存であり、やや外傾し立ち上がり検出面までの高さは約30cmである。北壁東半の一部がP₂構築のため若干北に張り出し、東壁南半には壁内にテラス状に張り出す施設がある。

(床) 地山シルト面をそのまま利用したほぼ平坦な床面を呈し、貼り床等は認められない。

(柱穴) P₉・P₁₀・P₁₁が柱穴と推察される。P₉は床面中央のやや西寄りに位置し、30cm×40cmの長方形の平面で深さ約40cmあり、径10cmほどの柱痕が認められる。P₁₀は東壁中央に接し、20cm×25cmの楕円状平面形で深さ約35cm、P₁₁は西壁中央に接し、径約25cmの円形で深さ25cmほどである。これらのピットは、東壁と西壁のほぼ中点を結ぶ線上にあり、P₁₀とP₉の間は2.4m、P₉とP₁₁間は1.2mとなる。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半の中央に位置し、燃焼部は若干の落ちこみがある程度で、右袖はほとんど遺存せず、シルトと黒褐色土で構築した左袖のみ認められる。煙道は燃焼部からゆるやかに立ち上がり煙出し部まで含め約80cmの長さで、幅35cm、深さ15cmほどの溝状で煙出し部でやや落ちこむ。検出時に、煙道部にはかなり多量の焼土が露呈していた。

(その他の施設) 多くのピットが床面で検出された。およその規模は、P₁ 径50cmの隅丸三角形の深さ25cm、P₂ 径80cmの円形で深さ40cm、P₃ 径50cm～60cmの隅丸三角形の深さ15cm、P₄ 径55cm×70cmの楕円形で深さ35cm、P₇ 径55cm×80cm楕円形の深さ10cm、P₈ 径40cm×50cmの楕円形で深さ20cmとなる。大半は床面北東部分のカマド周辺に位置し、貯蔵穴の性格も考えられる。なお、P₂とP₄は重複しP₄が新しい。

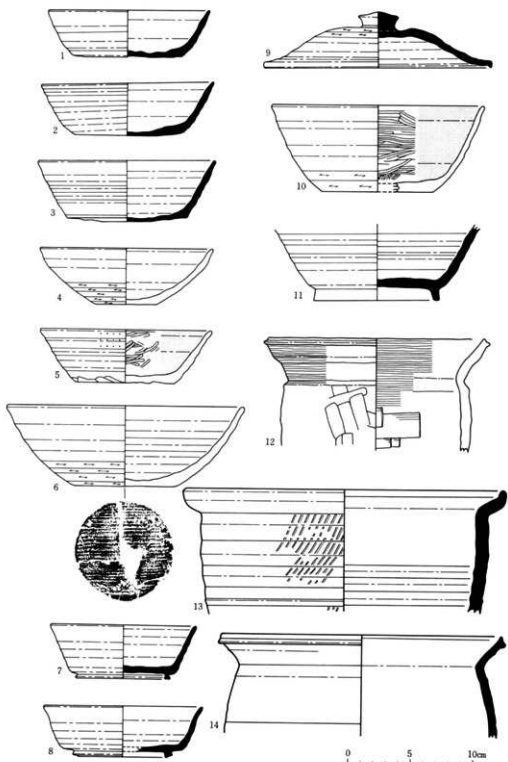
P₈・P₆は、北壁の midpoint から床面中央に向う線上に乗り、南側のP₈は床面のほぼ中央に位置する。深さ9cm～10cmと比較的浅いが間仕切りの施設も考えられる。P₈はP₇と重複し、より新しい。

東壁中央のやや南寄りに、幅50cmで壁内に50cmほどの台形のテラス状部分があり、床面と約10cmの段差をもち上面は平坦である。この平坦部から約10cmの段差で壁の上端となる。構築土は下に固いシルトと上にシルトと黒色土が攪拌状に混る暗褐色土を用いており、出入り口の施設も想定される。

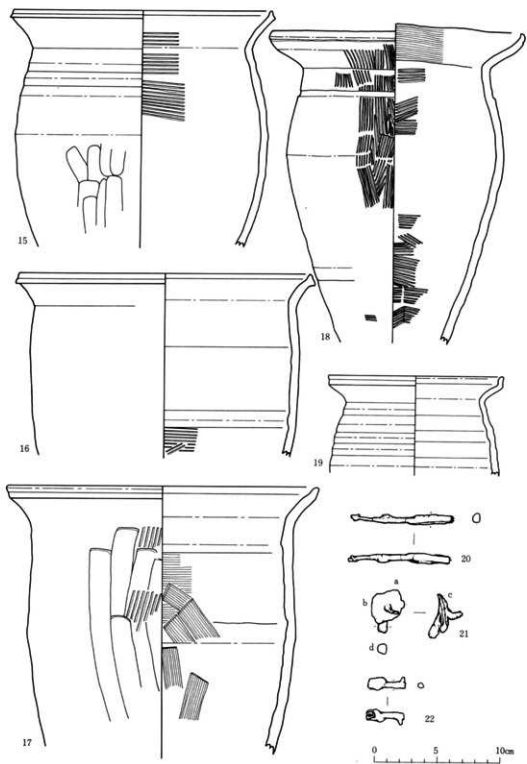
出土遺物 (第42-2・3図 第29表)

環形土器10点(台付坏3点)、壘形土器8点(土師器6・須恵器2)、鉄製品3点、須恵器蓋1点、合計22点の実測である。

台付坏はNo7・8・11の3点であるが、何れも須恵器である。小型のタイプ(No7・8)と大型のタイプ(No11)の二様がある。前者の切離しはヘラ切に依る。No11は不明である。



第42—2图 33号(Lj21)竖穴住居跡出土遺物



第42—3图 33号(Lj21)竖穴住居跡出土遺物

第29-1表 坏形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			h ₁ /b	h ₂ /d	外形角(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	141	A 類	ヘラ切	無調整		12.8	8.6	3.8	1.5	3.4	58	(P ₁ +床面+カマド付近増積土)
2	142	A 類	ヘラ切	無調整		13.7	8.2	4.2	1.7	3.3	55.5	底部外面に軽いナデ。(床面+カマド南脇)
3	—	A 類	ヘラ切	無調整		(14.0)	9.4	4.9	1.5	2.9	63	底部外面に軽いナデ。(P ₁ 上+増積土)
4	—	B 類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	(13.6)	4.8	4.5	2.8	3.0	45	(カマド増積土)
5	—	C 類	ヘラ切	手替ヘラ削り	体部下端 ~底部	(13.6)	7.8	4.3	1.7	3.2	56	(床面)
6	—	B 類	調整のため不明	回転ヘラ削り 本口裏面のナデ	体部下端 ~底部	(18.8)	7.8	6.4	2.4	2.9	49.5	内面に少量のカーボン付着。本口利用のナデは底部のみ。(増積土)
7	—	台付杯	ヘラ切			(11.6)	(8.2) 7.4	(4.2) 4.4				(増積土)
8	—	台付杯	ヘラ切			(12.6)	(9.4) (8.0)	4.1 0.5				(床面+P ₁)
9	143	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体 上 部	18.0	(7.7)削 3.2	4.5 (7.7)削 1.3				(南袖付近+カマド付近増積土)
10	—	C 類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	(16.8)	(9.0)	6.9	1.9	2.4	60	(増積土)
11	—	台付杯	不 明			—	(10.0) (10.0)	— 0.9				(P ₁ 上)

第29-2表 變形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種 別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大傾斜	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
12	—	土師器	(18.0)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	非ロクロ。反転履元。肩部有段。(床面)
13	—	須恵器	(25.9)	—	—	—	ロクロナデ	印目あり	ロクロナデ	ロクロナデ	長柄。(北東隅増積土)
14	—	須恵器	(23.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白・硬質。一部黄褐色。(ビット内)
15	—	土師器	(21.0)	—	—	(20.0)	ロクロナデ	ロクロナデ +ヘラケズリ	ロクロナデ 一部カキ目	カキ目 一部ヘラナデ	浅黄褐色。(ビット内)
16	—	土師器	(24.0)	—	—	(21.5)	ロクロナデ	ロクロナデ +ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ 一部カキ目	輪積痕。(ビット内)
17	—	土師器	(25.0)	—	—	(21.5)	ロクロナデ	印目 +ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	胎土粗。(床面)
18	—	土師器	(20.5)	—	—	17.4	ヨコナデ +刷毛目	刷毛目、下蓋 ヘラケズリ	ヨコナデ	刷毛目	非ロクロ。(床面+カマド+増積土)
19	—	土師器	(14.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	内面一部黒実。(床面)

第29-3表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種 別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
20	—	不 明	端 部	やや不良	80.50	7.0	3.0	3.80	長 方 形	鉄No.21の可能性もありうる。(床面)
21	—	結 晶 華	軸 部 分 一 部 欠 失	やや不良	a→35.0	b→26.0 d→6.80	e→3.0	7.35	d→方 形	板部分は正方形。(3層)成分分析試料
22	—	不 明	端 部	片 比較的良好	29.50	4.50	4.50	1.90	方 形	先端部曲がる。
—	—	釘 状	破 片	不 良	—	—	—	3.75	方 形	木片付着。(床面)

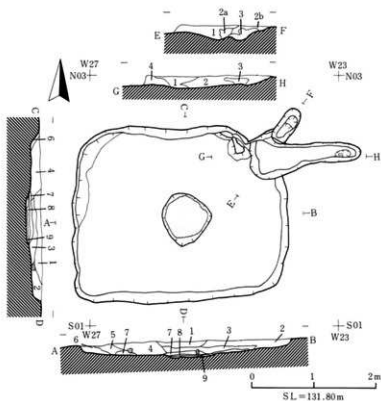
須恵器蓋は図示したNo 9の他に、堆積土中から別個体の破片が出土している。No 9の口径は18cm、ツマミを含めた高さは4.5cm位の大きさである。

他A・B・C類、変形土器、鉄製品等については、第29表を参照されたい。なお、これらの他に堆積土中から球形を呈す土師器片、床面からヘラ切A類坯底部片、焼土ピット内からはロクロと非ロクロ成形の土師器体部片等が出土している。

34号 (Lj27) 竪穴住居跡 (第43図 写真図版22)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.45m、南北2.7m、面積7.96㎡、東西に長い長方形を呈し、カマ方方向軸はN-89°-Eである。



A-B C-D		
1	JjSVR片 黒褐色土	シルト少量
2	JjSVR片 黒褐色土	シルト多量に含み多い
3	JjSVR片 黒褐色土	シルト少量
4	JjSVR片 黒褐色土	シルト多量、固く2層に類似
5	JjSVR片 黒褐色土	シルト 腐植質土混入
6	JjSVR片 *	シルト 5層より腐植土多
7	JjSVR片 黒褐色土	焼土、炭を含む
8	JjSVR片 黒褐色土	焼土
9	JjSVR片 黒褐色土	

●本図等による断面

E-F		
1	JjSVR片 黒褐色土	シルトを多く含む
2a	JjSVR片 *	
2b	*	2a層より固い
3	JjSVR片 *	
G-H		
1	JjSVR片 黒褐色土	E-F、1層と同に似
2	JjSVR片 *	
3	JjSVR片 *	シルト少量含む
4	*	シルト、焼土をプロップ状に含む

第43-1図 34号 (Lj27) 竪穴住居跡

(堆積土) 三大別でさる。1・3層の少量のシルトを含む黒褐色土、2・4層の多量のシルトを全般に含み固くしまりのある極暗褐色土、5・6層の暗褐色シルトである。1層は中央付近に楕円状に広がり周囲に2・4層がある。また、2・4層のほとんど同類の堆積土間に3層が入り、これらは、あまり時間差のない堆積と考えられ、人為的な可能性もある。西壁北半から北壁沿いの一部にみられる5・6層は壁の崩壊土と推察される。

(壁) 西壁の北半は崩壊している。外傾する立ち上がりで検出面までの高さは10cm～15cmほどあり、一般に東側が低い。

(床) 地山シルト面を利用し中央へ向けやや低くなる。中央に80cm×85cm範囲の薄い焼土の堆積があり、その下は約3cmの浅い落ちこみになる。

(柱穴) 認められない。

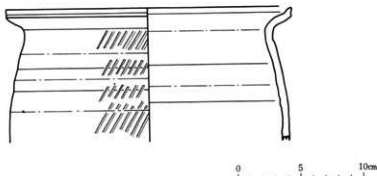
(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北端に約1.75m 東にのびる溝状の掘りこみがあり、壁側のふくらみ部分が焼部相当で他は煙道と煙出しとみられ、カマドと推察されるものがある。しかし、堆積土中には焼土、炭とも検出できず、北東隅にシルトと焼土をブロック状に含む黒褐色土をみるのみで、果してカマドとして機能したのか疑問である。また、北東隅から北東にのびる短い溝状部分があり、調査時にはカマドの一つの考えたが、後の攪乱穴の可能性が高い。

(その他の施設) 床面中央の浅い落ちこみと薄い焼土の堆積が認められ、地床炉の可能性もあるが、落ちこみの底は火熱をうけたか否か明確でなく、断定はできない。

出土遺物 (第43-2図)

出土遺物は少なく、実測点数はロクロ成形の土師器1点だけである。堆積土中からの出土。推定口径22.8cm大。体部外面に斜位の叩目がある。この他には叩目のある体部片1、不明細片若干ある程度。



第43-2図 34号(Lj27)壁穴住居跡出土遺物

35号 (Lj71) 竪穴住居跡 (第44図 第30表 写真図版22・65)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西5.1m、南北5.4m、面積21.6㎡で、やや歪んでいるが正方形に近い形状を呈する。カマド方向軸はN-79°-Eである。

(堆積土) 主体は黒色土と黒褐色土の1・3層で、床面直上に4層の黒褐色シルト質土がある。また、明るいシルト粒を混在する黒褐色シルト質の5層等が壁ぎわにみられ、壁崩壊土の一部かと推察される。総じてレンズ状の堆積を示す。

(壁) 比較的外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは40cm~45cmである。北壁の中央部上半では、半円状に外に張り出したピットまたは棚状の施設があり、東壁南端では壁下半をえぐり掘ったピットが構築され、四壁沿いには周溝を認める。なお、北壁東半には崩壊痕がある。

(床) 掘り方技法による床面構築とみられるが、調査時における湧水がはげしく精査はしなかった。

(柱穴) P₃~P₆の柱穴状ピットがある。P₃は径40cm×38cm、深さ30cmの円形、P₄ 40cm×50cm、深さ30cmの長方形 P₅ 45cm×40cm、深さ21cmの円形 P₆ 35cm×40cm、深さ25cmの円形である。P₄・P₅は南壁東端および西端から、それぞれ1.3mと1.9mにあり、両ピット間は1.7mであるが、P₃~P₆の相互関連は明確にできない。

(周溝) 四壁沿い全体に認められる。ただし南壁沿いは不整である。幅10cm~30cmで深さ10cm~15cmほどを計る。

(カマド) 東壁南半の中央近くに位置する。燃焼部の掘り方埋土上面を火床とし、間口60cm奥行100cmほどであり、中央に伏せた状態で完形の小型甕が検出され支脚に転用したものかと推察され、両袖はシルトで構築されている。煙道はゆるやかに立ち上がり溝状に幅20cm~30cm、深さ7cm~25cmで約80cm東にのび煙出しとなる。煙出しは径45cm×55cmの楕円状で検出面から25cmの深さで、底面は煙道底面より約15cmの段差で低い。

カマド内の堆積土は、両袖の内側に若干の焼土を認めるが、全般に顕著な焼土は認められず黒褐色土とシルトの混合土が支配的である。

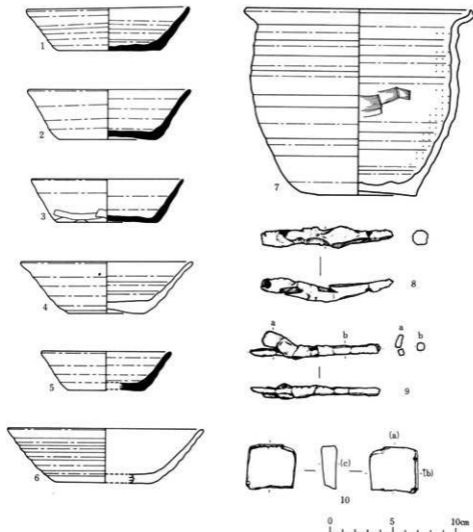
(その他の施設) P₁・P₂がある。P₁はカマドの南に隣接し、東壁の下半をえぐって奥に40cmほど掘りこまれ、径130cm×110cmの長方形状で深さ20cmで坯三个体分を包含し貯蔵穴と推察する。P₂は北壁の中央寄り南半に位置し、壁上半部を100cm×120cm、深さ23cm規模で壁外に掘りこんだ半円状の張り出しであり下端が奥に入る浅い袋状を呈する。堆積土は竪穴住居跡堆積土と共通し住居跡に伴うものと確証できる。棚様の貯蔵穴等の機能が考えられるが断定できない。

出土遺物 (第44-2図 第30表)

坏形土器6点、甕1点、鉄製品2点、砥石1点、計10点の実測。この他に、糸切痕を有す須恵器台付坏片がピット内から、また堆積土中からは糸切底部の小型甕片等があるが、特に図示していない。

坏形土器は、No 1・2・3・5のA類、No 4・6のB類がある。C類は1点もみられない。A・B類中で切離しが判明するのはNo 1・2・4・の3点で、何れもヘラ切に依る。他は調整・剥離等で不明である。

甕形土器No 7はロクロ成形の小型甕。器高の割には口径が開いている。内面はロクロナデ痕(一部ヘラナデ)を残しているが、外面は剥離部分が多い。体部下端から底面にかけてヘラ削



第44-2図 35号(Lj71)竪穴住居跡出土遺物

第30表 鉄 製 品 一 覧

写真 原番号	種 別	現 存 部 位	遺 存 状 態	法 量				断 面 形	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
8	一釘状	掘部欠失	比較的良好	104.0	11.0	11.0	22.40	方形	やや湾曲 (床面)
9	一角釘	ほぼ完成	比較的良好	104.50	b…6.0	b…5.50	11.60	方形	折れた掘部が端部に付着。(床面)

りがみられる。暗赤褐色を呈し、一部にカーボンが付着している。口径18.5cm、底径9.2cm、器高14.9cm、最大胴径16.6cm大。

鉄製品については第30表を参照されたい。

砥石はNa10の1点が出土している。3.5×3.8cm大の方形に近い形をしており、厚さは1cm前後である。携帯用砥石であろう。素材は斜長石流紋岩であり、灰白色を呈す。ただし、部分的にタール状の付着物がみられる。

36号 (Mc18) 竪穴住居跡 (第45図 第31表 写真図版23・66)

(重複 改築) 認められない。ただし、現代の用水路によって北壁部が破壊されている。

(規模 平面形 方向) 東西3.4m、南北3.2m、面積9.44m²のほぼ正方形に近い平面形で、カマド方向軸はN-90°-Eである。

(堆積土) 三層に大別され、1層の黒褐色シルト質粘質土は全域に厚く堆積し、土器片が多く混入し、焼土粒や褐色土ブロックも少量含まれる。2層も黒褐色のシルト質粘質土で、全般的にみると壁ぎわを除く中央部に堆積し、炭、焼土粒、土器片等を多く混入し人為的堆積の可能性もある。3層の黒褐色土は壁ぎわに堆積する。

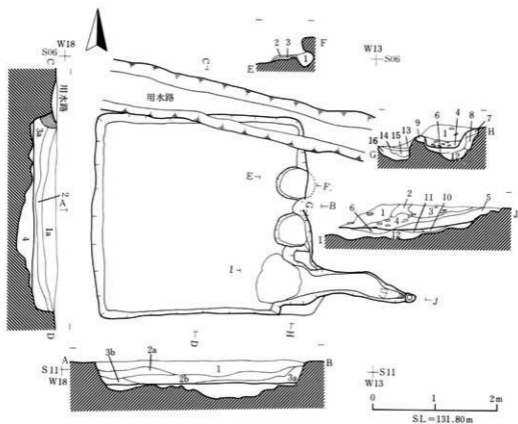
(壁) 垂直に近い立ち上がりで検出面までの高さは約37cmであるが、北壁は現代の溝で上部を破壊されたため約26cmの高さが遺存する。東壁中央寄りの北半で壁内へテラス状に張り出す部分が認められる。

(床) 全般的に平坦で固いが、壁ぎわの部分はあまり固い面ではない。床面構築は掘り方技法によって黒色土とシルトの攪拌土を用いている。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の南端に位置し、燃焼部は掘り方に黒褐色土を埋土し、その上面を火床とする。火床面は約50cm×50cmで火熱で固く赤変焼土化し、竪穴住居跡床面とほぼ同じ高さである。左袖は上部を削平されるが、シルト質土を用い構築したもので、右袖は南壁東端に密着し褐色シルトや暗褐色シルト質土を巻いて構築していて、内壁面は火熱による赤変焼土化が顕著である。燃焼部奥壁から、幅25cm、深さ30cm、長さ150cmの溝状の煙道がのび、先端で急な上がり



A - B C - D		
1	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土 遺物、焼土粒あり
2	10YR5.5 黒褐色土	黒色シルト質土 シルト、焼土粒あり、アロ-ア酸土、大角
3	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土 遺物、焼土粒あり、アロ-ア酸土、大角
3a	10YR5.5 =	焼土シルト質土 灰田土
3b	=	シルト質土
4	10YR5.5 =	黒色シルト質土 シルトアロ-ア酸土、 ア-ア
1	10YR5.5 黒褐色土	焼土シルトアロ-ア酸土あり、 ア-ア
2	10YR5.5 黒褐色土	黒色シルト質土 焼土シルトアロ-ア酸土あり、 ア-ア
3	=	焼土シルトアロ-ア酸土

G - H I - J		
1	10YR5.5 黒褐色土	黒色シルト質土 焼土粒あり、アロ-ア酸土
2	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土 一般焼土あり、焼土大角あり
3	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土 シルト、焼土粒あり、アロ-ア酸土、大角
4	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土 土器あり
5	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土、しまり強い
6	10YR5.5 黒褐色土	焼土、 焼土粒あり、焼土大角
7	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土 焼土粒あり、アロ-ア酸土
8	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土 シルトアロ-ア酸土
9	10YR5.5 =	シルト質土
10	10YR5.5 黒褐色土	焼土
11	10YR5.5 黒褐色土	焼土粒あり、アロ-ア酸土
12	10YR5.5 黒褐色土	焼土粒あり、アロ-ア酸土
13	10YR5.5 黒褐色土	焼土
14	10YR5.5 黒褐色土	しまり強い、小ア-ア酸土あり
15	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土 焼土粒あり、アロ-ア酸土
16	10YR5.5 黒褐色土	シルト質土、焼土粒あり、アロ-ア酸土

第45-1図 36号 (M18) 竪穴住居跡

もち煙出しとなる。

(その他の施設) カマド北に隣接し貯蔵穴があり、径50cm、深さ20cmで底面に土器の細片が数片認められた。

東壁中央寄りの北半で、壁から床面に張り出した半円形のテラス状部分があり、床面から緩傾斜で約10cm上がり50cm四方の黒色土とシルト混土で構築した非常に固い面で、出入口等が推察される。

出土遺物 (第45-2図 第31表)

環形土器 2点、壺形土器 5点、須恵器拓影図 2点、鉄製品 5点を図示している。この他には須

恵器台付坏片、同蓋片、B類片等が床面上に散見する。須恵器台付坏片の脚高は1.7cm、脚径12cmの大型のものである。

坏形土器はA・C類各1点。No 2はNo 1に比して体部の外反度が強く器高が高い。

甕形土器は4点。No 3・9は非ロクロ成形。No 3は肩部分が明瞭で、巻上げ痕が残る。No 9は調整技法不明の小型品。No 4・5・6はロクロ成形。このうちNo 6は底部が丸底風になるのが特徴。また、これらの3点は何れも口唇部の形が異なり、特にNo 5は須恵器甕のそれに酷似している。No 6の口唇は、外面的にはNo 3の非ロクロ甕に類似しており、No 4は短頸のもので、口唇部に特に凹凸をもたない。

須恵器甕は拓影図の2点。No 7はカマド中の堆積土から、No 8は住居跡内堆積土中からの出土。胎土・技法からみて別個体のものである。

鉄製品は7点の出土であり、そのうちの5点を図示している。角釘様のものと、攝子があるが、不明のものが多い。なお、攝子については後掲の別項を参照されたい。

第31-1表 坏形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a _b	a _d	外傾角度(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	A	坏	ヘラ切	無調整		(13.0)	(7.6)	3.6	1.7	3.6	52.5	(堆積土)
2	147	C	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端	14.4	7.2	4.4	1.9	3.0	56.5	(堆積土)

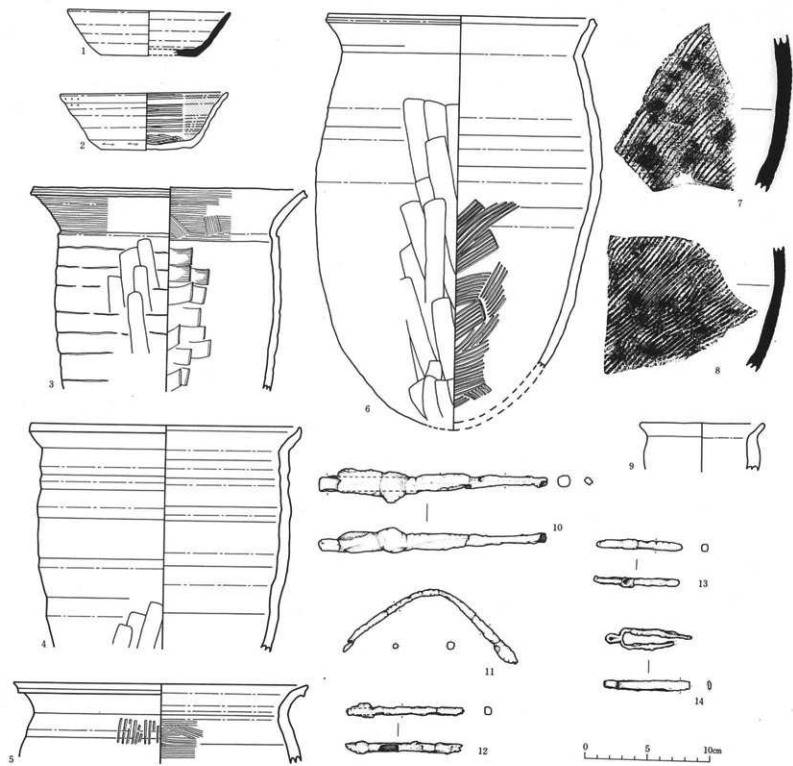
第31-2表 甕形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考	
			口 径	底 径	器 高	最大脚径	口縁部	体部	口縁部	体部		
3	—	土器	(22.3)	—	—	(18.2)	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部有段。巻上げ。(煙道掘り方埋土中)	
4	—	土器	(21.9)	—	—	(20.5)	ロクロナデ	下 ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	短頸。(カマド焼成部)	
5	—	土器	(23.8)	—	—	—	ロクロナデ	甲 目	ロクロナデ	ヘラナデ?	短頸形の壺か?(堆積土中)	
6	148	土器	21.8	—	(33.0)	(22.9)	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	木口利用のナデ (薪毛目)	巻上げ。丸底。(燃焼部堆積土(上部))	
7	—	須恵器	拓影図。外面平行甲目。内面押正頂上にヘラナデ。(カマド中堆積土)									
8	—	須恵器	拓影図。外面平行甲目 (No 7より幅が小さい)。木口利用のナデあり。(住居跡内堆積土中—No 7近辺で出土)									
9	—	土器	10.0	—	—	(9.3)	磨 減	磨 減	磨 減	磨 減	磨 減	反転復元。体部の器内が厚い。(煙道掘り方埋土中)

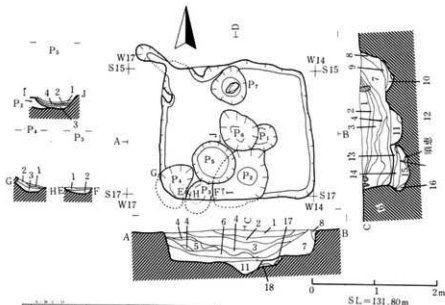
37号 (Me18) 竪穴住居跡 (第46図 第32表 写真図版23・66)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西2.4m、南北2.2m、面積4.5m²で、やや歪んでいるが、ほぼ正方形に近い。カマド方向軸はN-52°-W、南北方向軸はほぼ真北に近い。



第45—2图 36号(Mc18)整穴住居跡出土遺物



層	土質	厚	特徴
1	黒褐色土	10	焼土・シルト
2	黒褐色土	10	焼土・シルト
3	黒褐色土	10	焼土・シルト
4	黒褐色土	10	焼土・シルト
5	黒褐色土	10	焼土・シルト
6	黒褐色土	10	焼土・シルト
7	黒褐色土	10	焼土・シルト
8	黒褐色土	10	焼土・シルト

層	土質	厚	特徴
1	黒褐色土	10	焼土・シルト
2	黒褐色土	10	焼土・シルト
3	黒褐色土	10	焼土・シルト
4	黒褐色土	10	焼土・シルト
5	黒褐色土	10	焼土・シルト
6	黒褐色土	10	焼土・シルト
7	黒褐色土	10	焼土・シルト
8	黒褐色土	10	焼土・シルト

第46-1図 37号 (Mel8) 竪穴住居跡

(堆積土) 含有物の量の差異によって、1層から6層までと7層と8層のグループになる。すなわち、前者は6細分されているが、黒色または黒褐色土にシルト粒や焼土粒が少量含まれるもので大差なく、レンズ状の堆積を示し自然堆積と考えられる。後者の中で、7層は黒褐色土にブロック状のシルトと焼土を多量に混在し、他の層より土器の細片が多量に含まれており、8層はシルト混入の灰褐色土である。7・8層の一部は検出面まで達しており一気に入埋められた人為的埋土の可能性があり、特に7層では強い。

1層から6層が堆積する範囲は、南と西では壁に接し、東では東壁上端から約13cm、北では北壁上端から約30cmそれぞれ内側になり、外側が7層を主体にする面になる。したがって、7層は東および北側から埋め込まれたものと考えられる。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは40cm～50cmと比較的高い。

(床) 北東と北西隅近くに掘り方がみられるが、他は地山シルトを床面としている。中央から南西隅にピットが密集する。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 北西隅に位置する。燃焼部はシルト、黒色土を用いた側壁残痕があり、地山面を火床としかかり焼け赤変しており、煙道は約60cmのくりぬきで天井部が崩落していた。

(その他の施設) 7ピットが床面に検出された。それぞれの径、深さは、P₁ 40cm×40cm、10cm P₂ 80cm×100cm、40cm P₃ 35cm×55cm、10cm P₄ 50cm×70cm、15cm P₅ 70cm×70cm、30cm P₆ 60cm×70cm、20cm P₇ 55cm×60cm、20cmであり、円または楕円形を呈する。P₂・P₃・P₄は壁下まで掘り込まれており、先後関係の明らかなのは、P₁・P₂よりP₆が新、P₂よりP₅が新、P₃よりP₆が新であり、堆積土状況からは、P₂・P₃・P₄・P₅等は上面を貼った状況を呈している。これらのピットは貯蔵穴の性格が考えられる。

出土遺物 (第46-2図 第32表)

環形4点(拓影図1)、壺形土器3点、須恵器壺1点、鉄製品1点、計9点の実測。

環形土器4点はA類のみ。B・C類は堆積土中に細片がある程度である。また、須恵器の蓋と台付環の破片もみられるが、これも堆積土中からの出土。

壺形土器はNo5・6・7の3点。何れもロクロ成形のものである。このうちNo7は完形品であるが、接合前破片の出土状況は出土地点・層位等からみて一様ではない。口縁・体部破片の多くは住居跡内の床面・堆積土に散在するが、底部周辺は煙道内にあり、更に口縁・体部の一部が第39号(Me27)住居跡内ピット中或いはカマド右袖内から出土しており、最終的に接合されたものである。また、No6の体部の一部にもMe27住居跡内の破片が接合されている。

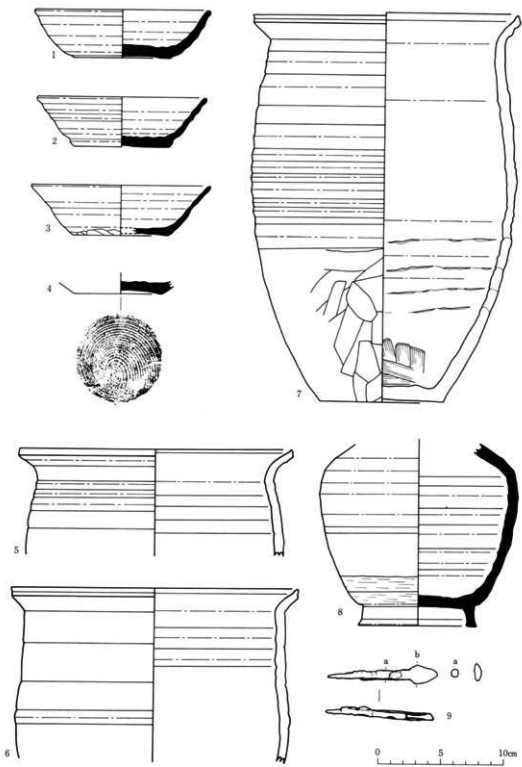
No8は堆積土下層からの出土。全体が灰黒色を呈す硬質の須恵器。頸部の大半を欠失している長頸壺である。体部上方にロクロナデ、中位に叩目、下方に横位の回転ヘラ削りが施される。

第32-1表 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外縁角(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	151	A 類	調整のため不明	手持ヘラ磨り	底 部	(13.8)	7.6	3.9	1.8	3.5	50.5	(堆積土)
2	—	A 類	ヘラ切	手持ヘラ磨り	底 部	(13.4)	7.6	4.0	1.8	3.4	50.0	
3	—	A 類	ヘラ切	手持ヘラ磨り	体部下端 ~底部	(14.2)	(7.6)	4.0	1.9	3.6	54.0	(堆積土)
4	—	A 類	回転糸切	無調整		—	7.0	—	—	—	—	(堆積土) 底部片。

第32-2表 壺形土器一覽

実測図番号	写真番号	種 別	法 量 (cm)			外面調整		内面調整		備 考	
			口 径	底 径	器 高	最大傾斜	口縁部	体 部	口縁部		体 部
5	—	土師器	(22.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。石英粒多い。黒変あり。(床面)
6	—	土師器	(23.0)	—	—	—	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	外面に若干の腐。赤褐色。(床面+堆積土)
7	152	土師器	21.5 壺22.6	10.0	31.2	21.5 壺22.6	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	ナゲツケ	壺上げ痕。口~体部に歪み。壺は最大径。



第46—2图 37号(Mei8)竖穴住居跡出土遺物

内面のナデ痕は木口を利用したものであり、ロクロの回転力を利用して調整しているが、方向の不定な部分もある。

No 9 は鉄製品。最長部8.7cm大の鉄鏝であり、1層からの出土。

38号 (Me21) 竪穴住居跡 (第47図 第33表 写真図版24・66)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3m、南北2.7m、面積7.69m²の若干歪んだ方形であり、カマド方向軸はN-83°-Wである。

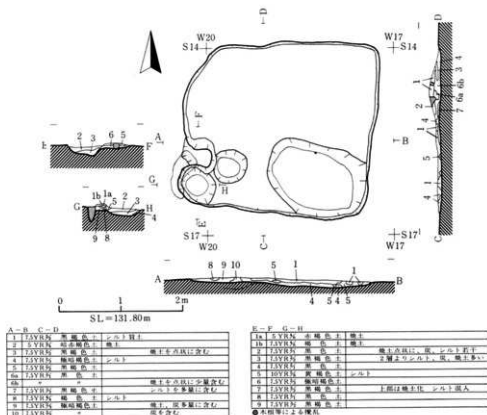
(堆積土) 削平が著しく堆積土の遺存は薄い。黒褐色シルト質土と極暗褐色シルトが入り混る状況で、全体的に炭と焼土およびシルトブロックが多く、堆積土のしまりは非常によい。

(壁) 西壁中央で外へふくらむ。検出面までの高さは2cm~8cmである。

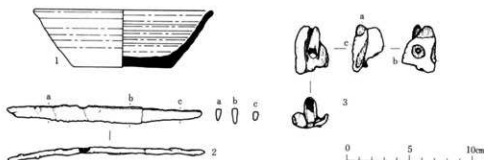
(床) 南東部に掘り方をみるが、全般的には地山シルトを床面としている。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。



第47-1図 38号(Me21)竪穴住居跡



第47-2図 38号(Me21)竪穴住居跡出土遺物

(カマド) 西壁南端に位置し、燃焼部は掘り方をもったものと推察され、右袖はシルトで構築され、左は南壁東端を利用したものと考えられる。煙道、煙出しは認められず、全体的に削平が著しく不明確な点が多い。

(その他の施設) 特に認められない。

出土遺物 (第47-2図 第33表)

出土遺物は少なく、実測点数はA類1点、鉄製品2点のみである。これらの他には、A類の破片が若干、須恵器蓋の破片1点、等が出土する程度。

出土遺物の詳細は下表をもって示す。

第33-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a ₁ /b	a ₂ /d	外傾角度(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	155	A類	ヘラ切	無調整		(14.2)	7.8	4.6	1.8	3.1	54.5	(床面直上)

第33-2表 鉄製品一覽

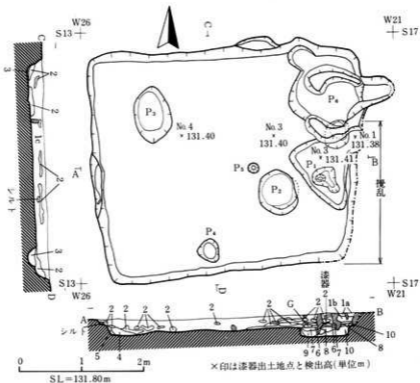
実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
2	156	刀子	完形品	比較的良好	156.0	a...19.0 b...13.30 c...6.8	b...3.70 c...4.0	13355	ab...楕形	刃部ゆるく湾曲。(床面)
3	一不明	破片	やや良好		a...38.0	b...26.70 c...24.50	d...9.0 e...5.20 f...11.0	11.30	e...長方形	有孔(5.0mm径)木質を鉄で包む。刀等の止錠具か?(床面)

39号 (Me27) 竪穴住居跡 (第48図 第34表 写真図版24・25・67)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.5m、南北4.2m、面積12.54m²の東西にやや長い長方形を呈する。カマド方向軸はN-89°-Eである。

(堆積土) 東半で木根等による攪乱が著しく複雑になるが、全般的には黒褐色土の単層であ



A-B C-D

1a	5YR片 黒褐色土	シルト、焼土を含む
1b	5YR片 *	焼土若干含む
1c	7.5YR片 黒色土	部分的にシルト少々、土器片若干含む
2	7.5YR片 黒褐色土	ブロック状をなし、1c層に含まれる
3	10YR片 黒褐色土	シルトを含む
4	7.5YR片 黒色土	
5	7.5YR片 黒色土	

A-B C-D

6	5YR片 黒褐色土	多量のシルト、焼土を含み固くしまっている
7	5YR片 *	焼土、炭を含み土器あり
8	*	焼土、炭を粒状にやや多く含む
9	5YR片 *	焼土、炭を含む
10	10YR片 黒褐色土	黄褐色シルトを含む

● 木根等による攪乱

第48—1図 39号(Me27)竪穴住居跡

る。

(壁) 東壁は攪乱により上端が破壊されており、西壁中央で崩壊部分が見られる。壁はやや外傾して立ち、検出面まで約20cmの高さである。

(床) 地山をそのまま利用したほぼ平坦な床面であるが、カマド付近に多量のシルトと焼土を含んだ固い黒褐色土層があり貼り床とみられる。

(柱穴) 確認できるものは認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半に位置し、カマド構築の振り方上に燃焼部と袖が認められる。燃焼部は間口70cm、奥行80cm規模で支脚石が認められ、両袖は石を芯材に用い黒褐色土とシルトを巻いて構築している。燃焼部奥壁から若干上がって幅30cm~45cm、深さ6cm~13cmで長さ50cmの溝状の煙道があり、先端は攪乱されるが煙出しの区別はないものとみられる。

(その他の施設) カマド南に隣接するP₁は、100cm×100cmの三角形状で深さ33cmあり、焼土、炭を多量と土器片を含む黒褐色土を堆積土にもち、上面に貼り床がある。P₂は径60cm×70cm深さ35cmのほぼ円形、焼土を含む黒褐色土の堆積土をもち遺物を包含する。北西寄りのP₃は、径60cm×90cm、深さ28cmの楕円形で、黒褐色土の堆積土をもち須恵器環が検出された。P₄は径35cm×35cm、深さ20cmの円形で黒褐色土の堆積土、P₅は径17cm×17cm、深さ10cmの円形で黒色土の堆積土、P₆は径40cm×45cm、深さ27cmの円形カマド右袖直下であり、カマド構築以前に掘られたものであり堆積土は黒褐色土である。

以上のピット中、P₁・P₂・P₃は貯蔵穴様を呈するが、P₁は堆積土上に貼り床されており、竪穴住居跡存続中の廃棄と推定されるし、カマド右袖下のP₆の存在と関連してみると、カマドを含め周辺の改造があったことも想定される。P₄・P₅は柱穴状の小ピットであるが性格不明である。

出土遺物 (第48-2・3図 第34表)

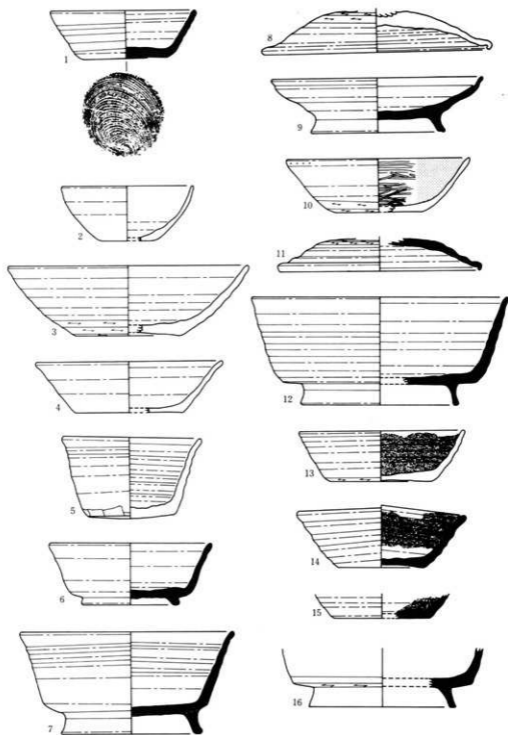
環形土器14点(台付坏5点)、須恵器蓋2点、甕形土器4点、鉄製品6点の実測。

出土遺物は多く、上記の他に外面に叩目のある土器器甕片多数、非ロクロの球脚片若干、須恵器甕体部片等が出土している。何れもカマド近辺に集中している例が多い。

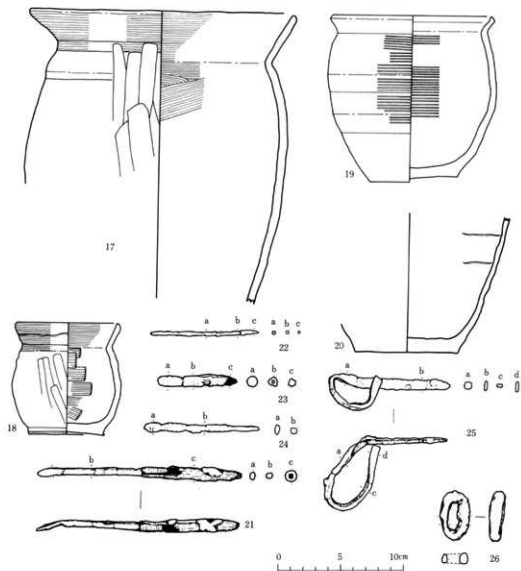
坏はA・B・Cの各類がある。B類が器形的に多様なあり方をみせており、No.8の蓋を含め

第34-1表 環形土器一覽

支 度 区 番 号	写 真 番 号	種 別	切 離 し	調 整 注 法	調 整 部 位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外 傾 角 (度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	157	A 類	回転糸切	無調整		11.5	6.6	3.9	1.7	2.9	58	(南壁際床面上)
2	—	B 類	磨減	顯著	—	(12.4)	(4.0)	4.4	3.1	2.8	53	
3	—	B 類	調整のため不明	水口利用のナデ	体部下端	(19.2)	(8.2)	5.6	2.3	3.4	45.5	体部下端は回転ヘラ削り。(カマド堆積土)
4	158	B 類	磨減	顯著	—	(14.8)	(8.6)	4.1	1.7	3.6	53	(床面上)
5	159	B 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端	11.0	6.8	6.7	1.6	1.6	69.5	磨減顯著。(P ₁ 上) コップ形。
6	—	台付坏	ヘラ切			(12.8)	7.4 (磨減)	5.0 (磨減)				(カマド右)
7	160	台付坏	ヘラ切	回転ヘラ削り	底 部	17.0	11.2	9.2				(床面)
8	161	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体 上 部	18.0	—	—				フタミ欠失。B類的 (カマド堆積土)
9	162	台付蓋	ヘラ切	回転ヘラ削り	底 部	16.8	10.0 (磨減)	4.2				口縁部の形跡より蓋としての可能性もある。(堆積土)
10	—	C 類	回転糸切	回転・手持ヘラ削り	体部下端	(14.4)	(7.0)	4.3	2.1	3.3	48	(P ₁ 内)
11	—	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体 上 部	(16.0)	—	—				フタミ欠失。口縁裏しい込み。(床面+堆積土)
12	—	台付坏	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端	(20.6)	(12.4)	9.7	1.7			内面底部に軽いナデ。(カマド右袖直上+堆積土)
13	—	B 類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端	13.2	8.2	4.1	1.6	3.2	58	完形品。内面全面に漆付着。(カマド右袖前床面)
14	—	A 類	ヘラ切	無調整		13.4	6.8	5.0	2.0	2.7	52	内面全面に漆付着。口縁裏しい込み。(カマド右袖前床面)
15	—	A 類	ヘラ切	無調整		—	(7.6)	—	—	—	—	内面及び断面に漆付着。
16	—	台付坏	底部欠失	回転ヘラ削り	体部下端	—	(11.0) (11.8)	1.6				(堆積土)



第48—2图 39号(Me27)竖穴住居跡出土遺物



第48—3図 39号(Me27)竪穴住居跡出土遺物

て黄橙〜にぶい橙色を呈している。台付坏は須恵器に限られるが、小型・大型・皿型の三様がある。また、Na13・14・15の3点の坏は、内面に漆が付着している。紙質上に塗貼しているものもあるが、赤外線照射した結果に依れば、特に文字等は記されていない。

甕形土器はNa17・18・19・20の4点。遺構内全体をみればロクロ成形の土師器が多いが、図示したうちのNa17・18・20は非ロクロ、Na19はロクロ成形に依るものである。非ロクロの甕はカマド周辺に集中している。

鉄製品は10点の出土。そのうち6点を図示している。鉄鎌・釘・環状製品等があるが、不明のものも多い。図示した6点は何れも床面またはピット内出土である。

第34-2表 変形土器一覽

写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
		口径	底径	器高	最大径	口縁部	体部	口縁部	体部	
17	土師器	21.4	—	—	21.0	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	胴部段不明瞭。(カマド右軸+燃焼部)
18	土師器	8.3	(6.1)	8.9	(8.7)	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	木蓋底。巻上げ。(カマド左軸)
19	土師器	13.2	6.9	13.4	13.5	ロクロナデ	水口利用のきき目	ロクロナデ	水口利用のきき目	回転糸切。(床面+増積土)
20	土師器	—	8.2	—	—	—	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	扉ロクロ。(カマド焚口+焼土内)

第34-3表 鉄製品一覽

写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考		
				長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
21	鉄 鍔	完形品	比較的良好	163.0	a…6.30 b…4.80 c…9.80	a…4.10 b…3.10 c…9.50	11.50	a…鉢形 b…内形	鍔身長(14.0)mm 基部に木質が残る。鍔身が小さい。(床面)		
22	164	針	ほぼ完形品	やや不具合	86.20	a…2.70 b…2.0	a…2.70 c…2.10	1.40	円形に近い	(床面)	
23	—	鉄 鍔	ほぼ完形品	やや不具合	64.70	a…9.0 b…7.8	a…9.20 b…8.0	8.0	a…円形 b…不正形	鍔身以外木質が覆う 鍔身長→(21.0)mm(床面)	
24	165	鉄 鍔	完形品	やや不具合	91.80	a…8.70 b…5.0	a…4.0 b…4.80	4.87	a…鉢形 b…方形	鍔身長→(14.0)mm(床面)	
25	167	—	不明	端部欠失?	比較的良好	直線にして 214.0	a…6.0 b…8.0 c…3.2	a…6.0 b…3.0 c…5.0	12.50	a…方形 bc…長方形	全体が定形的によじれている。(床面)
26	166	鐵杖製品	完形品	比較的良好	長径-39.70 短径-24.20	7.30	4.30	8.47	長方形	(住居内P ₂)	
—	—	角 釘	端 部	やや不具合	49.0	—	—	2.60	方 形	(床面)	
—	—	不明	破 片	不 良	48.0	—	—	3.80		(床面)	
—	—	不明	破 片	？	やや不具合	24.10	6.20	—	偏 平	(床面)	
—	—	不明	破 片	不 良	—	—	—	1.60	方 形	小片。(1層)	

40号 (Me62) 竪穴住居跡 (第49図 第35表 写真図版25・67)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.5m、南北3.5m、面積9.6㎡のほぼ正方形の平面形を呈し、カマド方向軸はN-179°-Eである。

(堆積土) 堆積土の主体は黒褐色土で、混入物やシルトの混入比率によって1層から5層に細分され、シルトの混入比率は下層ほど高くなる。各層ともレンズ状の堆積を示し、壁ぎわに6層・7層の黒色土と黒褐色土が認められる。

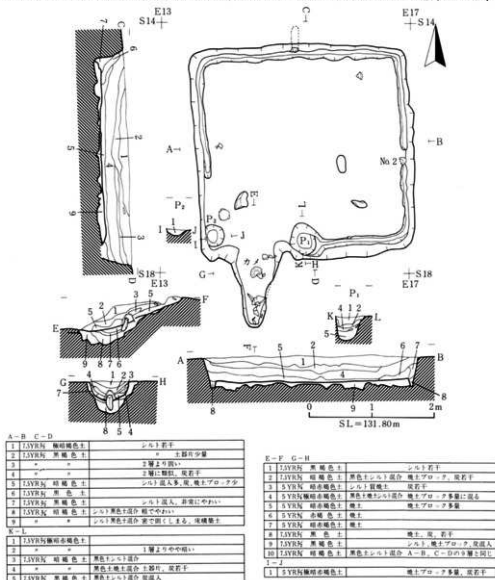
(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは床面から40cm、周溝底面からは50cmである。北壁中央に床面と水平に奥に掘りこまれた細い横穴がある。

(床) 全面掘り方をもち黒褐色土とシルトの混合土で床面を構築しておりほぼ平坦である。床面構築土からの遺物は認められない。

(柱穴) 柱穴と確認できるものは認められない。

(周溝) カマド部分とそれに近接する西壁南半を除く壁沿いに認められ、東壁中央で一部切れるのみである。周溝幅は10cm~20cm、深さは10cm内外を計る。

(カマド) 南壁西端に位置し壁外に張り出して施設されている。燃焼部と煙道の一部も含む掘り方をもち、下はシルトと黒褐色混合土を埋土し、燃焼部火床と両壁はシルトを巻いて構築して、この部分は火熱で赤変焼土化している。燃焼部は焚口から奥へ上がり傾斜した火床面を呈し、中央には縦位に施設した石に礎を伏せた支脚が認められる。煙道は火床面との段差をもたず先端に上がる傾斜で、幅30cm~40cm、深さ10cm~20cmで長さ50cmほどで溝状にのび、先

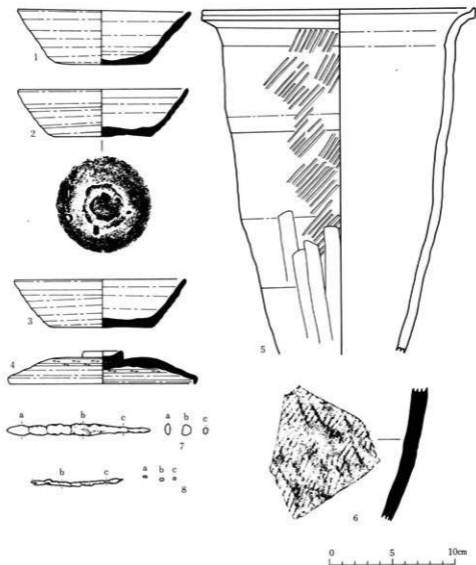


第49-1 図 40号(Me62)竪穴住居跡

端で細まり煙出しとの区別は認められない。

(その他の施設) カマドに東隣するP₁は貯蔵穴とみられ、径40cm×60cm、深さ35cmの規模で、焼土とシルト混りの極暗褐色土が堆積土の主体で土器破片を包含する。西南隅のP₂は径30cm×35cm、深さ10cmあり、焼土ブロックを多量に含む極暗赤褐色の堆積土をもつ、性格は不明。

前述した北壁中央を床面と同レベルで奥に掘りこんだ横穴があり、径10cmで奥行40cmで、奥に若干ふくらむ袋状を呈する、性格は不明である。



第49-2図 40号(Me62)竪穴住居跡出土遺物

出土遺物 (第49-2図 第35表)

環形土器3点、須恵器蓋1点、土師器甕1点、鉄製品2点、須恵器拓影図1、計8点の図示。他に破片として、非ロクロ成形の土師器甕体部、須恵器の長脚片等が出土している。

環形土器はA類のみ出土。B・C類は破片すら見られない。A類は何れも硬質のものでいわゆるくすべ焼成の環である。3点ともヘラ切調整で計測値も大差ない。

須恵器蓋No4は堆積土内からの出土。口径14.8cm、器高2.6cm大である。ツマミ部は中央が凹型を呈し、天井部に相当する部分には回転ヘラ削りが施される。

甕形土器のNo5は反転復元に依るものである。本遺構内のカマド部出土片と9号(Mi68)円形土壇出土の破片とが接合されている。推定口径約22cm、外面体部には印目とヘラ削りが施される。内面はヘラナデがあるかもしれないが、単位不明。No6は堆積土内出土。外面に印目、内面に押圧痕と木口利用のナデがある。

鉄製品は2点。鉄鍔(Na7)と針状(Na8)の製品である。計測値等については35-2表を参照されたい。

第35-1表 環形土器一覽

表面図番号	写真番号	種別	切磨し	調整技法	調整部位	法 量 (mm)			a ₁ /b	a ₂ /d	外壁角度(度)	備 考	
						口径(a)	底径(b)	器高(d)					
1	A	類	ヘラ切	無調整	/	13.8	7.6	4.4	1.8	3.1	50	(床面上)	
2	168	A	類	ヘラ切	無調整	/	13.4	7.6	3.8	1.8	3.5	51.5	完形品。磨滅欠味。(床面)
3	A	類	ヘラ切	無調整	/	13.6	7.8	3.8	1.7	3.6	55	(床面)	
4	一	蓋	調整のため	回転ヘラ削り	体上部と内面の一部	(14.8)	(7.7)底径3.0	(2.6)器高0.7	/	/	/	/	(堆積土)

第35-2表 鉄製品一覽

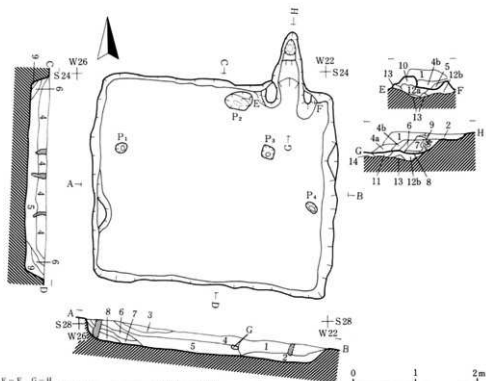
表面図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考	
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
7	169	鉄	鍔	完形品	鍔の割に残りよし	114.30	a…9.10 e…5.30	a…4.30 e…3.50	8.28	a…特殊形 b…長方形	鍔身長…13.5(18.0)(床面)
8	170	針	ほぼ完形品	鍔の割に残りよし		73.20	b…2.20	b…2.20	1.0	円形に近い	鍔部有孔と恐われる。縫針か?

41号(Mi27) 竪立住居跡 (第50図 第36表 写真図版25・67)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.9m、南北3.3m、面積11.16m²で若干東西に長い方形である。カマド方向軸はN-7°-Eである。

(堆積土) 4層・5層の黒色土および黒褐色土を主体とし、壁ぎわに、6層～9層の細砂やシルトを混入する流れこみの黒褐色土または暗褐色土がみられる。以上の堆積土に対し、1層



E-F G-H		
1	10YR均 黒褐色土	赤砂大シルト若干
2	7.5YR均 黒褐色土	シルト焼土粒、炭若干
3	10YR均 褐色土	シルト
4a	5YR均 黒褐色土	全体に焼土あり、4b層より多
4b	10YR均 黒褐色土	全体に焼土混る
5	5YR均 赤褐色土	焼土
6	5YR均 赤褐色土	シルト質焼土
7	5YR均 *	焼けている
8	1.5YR均 黒褐色土	
9	10YR均 暗褐色土	黒色土シルト混合 シルト粒、焼土粒多、上面欠熱
10	10YR均 黒褐色土	黒色土シルト混合 焼土若干
11	5YR均 暗赤褐色土	シルト 上面欠熱
12a	1.5YR均 暗褐色土	黒色土シルト混合 外面欠熱
12b	*	黒色土シルト混合 12a層よりシルト多
13	1.5YR均 暗褐色土	シルト
14	10YR均 黒褐色土	粒状焼土多量

A-B C-D		
1	10YR均 黒褐色土	ボツボツの部分あり、攪乱著しい
2	*	径5mm大シルト多量を含む
3	1.5YR均 *	細砂多量
4	10YR均 黒褐色土	
5	10YR均 褐色土	シルト粒若干
6	*	細砂多量、シルト粒若干
7	10YR均 黒褐色土	6層と類似するもシルト粒多
8	*	径2cm大のシルト粒多
9	10YR均 暗褐色土	細砂若干

※6層等による攪乱

第50-1図 41号(Mi27)竪穴住居跡

の黒褐色土は竪穴住居跡埋没後に攪乱されたボツボツしたもので、2層としたものはシルト粒を多量に含む黒褐色土で、当初、本来の堆積土後で1層と関連するものとみだが、むしろ、6層～8層等に相当するとみる方が妥当と推察する。

(壁) 東壁は外傾が強く、他は比較的直に近い立ち上がりを示す。検出面までの壁高は25cm～30cmである。

(床) 全体に掘り方をもち、シルトと黒褐色土の混合土を用い床面構築をしており、固くしまったほぼ平坦な床面である。カマド前方には焼土の広がりがみられた。

(柱穴) P₁・P₂・P₃の柱穴状小ピットを認めるが、対状になるP₁とP₃に柱穴の可能性もある。P₁は径15cmの円形で深さ15cm黒褐色の堆積土、P₃は一辺15cmの方形で深さ15cm黒褐色の堆積土をもつ、いずれも柱痕は認められず、両ピット間は2.35mである。

(周溝) 認められない。

(カマド) 北壁の東端に位置し、カマド構築部分を一旦掘りこんで黒褐色土とシルトを埋め、燃焼部と袖をつくっている。火床面は平坦で間口35cm、奥行50cmほどで、煙道は火床面から先端に向けて約30cmの長さで上がり、先端で若干の落ちこみをもち煙出しとなる。平面的には煙道と煙出しの区別は判然とせず、全長70cm、幅20cm～30cmの溝状で先細りの平面形を呈し、深さは10cm～30cmを計る。

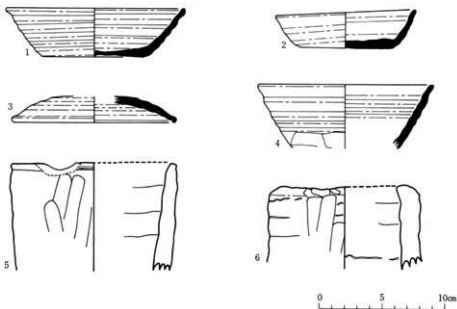
(その他の施設) カマド左袖に隣接するP₂は、貯蔵穴かと推察される。径30cm×40cm、深さ18cmの楕円形のピットで、堆積土は黒褐色土に焼土粒を含み、遺物の出土はない。

出土遺物 (第50-2図 第36表)

環形土器3点、須臾器蓋1点、筒形土器2点、計6点の実測。他に破片としては堆積土中から非クロロ土器器球胴片、回転糸切痕を残すB類底部片等が出土している。球胴片は外面に刷

第36表 坏形土器一覽

実測区番号	写真番号	種類	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a ₁ /b	a ₂ /d	外傾角度(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	171	A 類	へう切	無調整	/	14.2	7.8	3.9	1.8	3.6	50	(堆積土)
2	—	A 類	へう切	無調整	/	11.1	7.2	3.2	1.5	3.5	58.5	(床面直上)
3	—	蓋	不明	/	/	(13.0)	—	—	/	/	/	口縁～体部片。(床面直上+堆積土)
4	—	A 類	底部欠失	手持へう削り	体部 下端	(14.0)	—	—	—	—	/	(床面直上)



第50-2図 41号(Mi27)竈穴住居跡出土遺物

毛目とヘラ削り調整がみられる。

No 3 の蓋は、堆積土と床面近くの破片が接合されたものである。

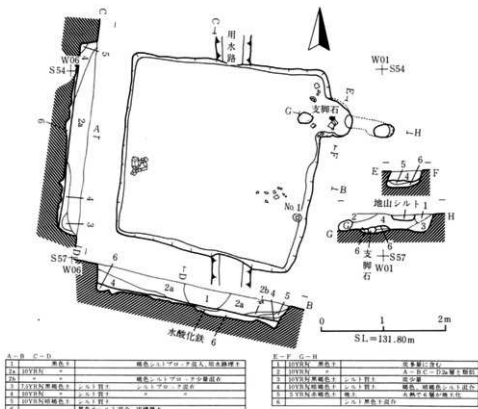
特異な遺物としてはNo 5・6の2点がある。反転復元に依る実測であるが、器種としては他例をみないため、便宜上“筒形土器”と仮称した。何れも酸化焙焼成に依るもので、カマド近辺の床面付近からの出土である。No 5は二次火熱を受けたと思われる痕跡がある。口唇の一部に剝離した部分がある。輪積みに依るもので外面に縦方向のヘラ削り、内面にはヘラナデが加えられる。No 6は口唇部が内側に入る器形であるが、成形技法・胎土・色調についてはNo 5とほぼ同様である。下端は接着面の欠落部分に相当し、人工的な割れ口を呈す。

42号 (Nh06) 竪穴住居跡 (第51図 第37表 写真図版26・68)

(重複 改築) 竪穴住居跡中央部が南北に走る現代の溝によって切られる。

(規模 平面形 方向) 東西3.1m、南北3.1m、面積8.41㎡あり、ややゆがんでいるがほぼ正方形に近い。カマド方向軸はN-100°30'-Eである。

(堆積土) 基本的には二大別される。すなわち、2層の黒色土で壁ぎわ床面近くを除き全体



第51-1図 42号(Nh06)竪穴住居跡

に広がり、4層の黒褐色粘質シルト質土で床面周囲の壁ぎわに認められる。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは30cmである。

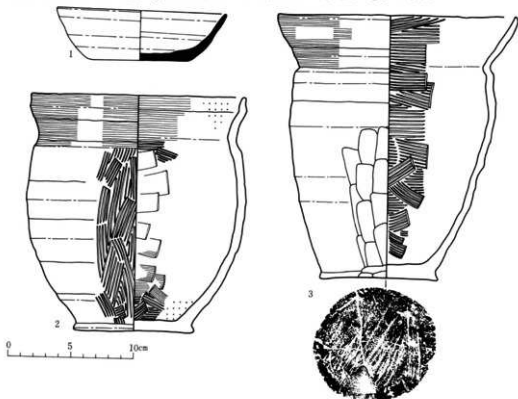
(床) 全体に掘り方をもつ、床面は多少の凹凸はあるがほぼ平坦で固い。床面中央には火熱によって赤変した部分を認めたが、地床炉か否かは断定できない。

(柱穴) 認められない。

(カマド) 東壁の北端寄りであり、燃烧部は半円状に壁外に張り出し、約50cm×50cmの掘り方埋土上を火床とし、中央に支脚石が認められた。燃烧部焚口付近にいく分焼けた部分を認めたが、側壁はほとんど焼けていない。煙道は燃烧部奥壁からくりぬき、わずかに下がり煙出しへ続く。煙出し底面は煙道より若干落ちこむ。なお、煙道は長さ35cm、径20cm、煙出しは20cm×30cmの楕円形で深さ30cmを計る。

出土遺物 (第51—2図 第37表)

A類環1点、甕形土器2点の実測。何れも床面からの出土である。出土遺物は少なく、これらの他に床面から非ロクロの土師器甕体部片若干、黄橙色軟質のB類片が1点みられる程度。また、堆積土上層からは、推定口径7cm大、脚径3cmほどの猪口が出土している。これは有田系統の産と思われる磁器で、明治時代のもものと推測される。(図は○Pにあり)



第51—2図 42号(Nh06)壺穴住居跡出土遺物

第37-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)					備考	
						口 径 (cm)			$\frac{a}{b}$	$\frac{a}{d}$		外傾角度(°)
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	172	A 類	ヘラ切	無調整		13.5	8.0	4.2	1.7	3.2	50.5	実形品。内外面に少量のカーボン付着。(床面)

第36-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
			口径	底径	器高	最大傾	口縁部	体部	口縁部	体部	
2	173	土師器	(17.4)	9.7	18.8	(17.6)	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	ヘラナデ	木葉底、黒斑あり、頸部に沈線入る。(床面)
3	174	土師器	19.3	9.5	21.2	16.4	ヨコナデ	ヘラケズリ	刷毛目	刷毛目	底部外溢水口利用のナデ、口縁やや内湾。(床面)

43号 (Nj21) 竪穴住居跡 (第52図 写真図版27)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西4.3m、南北3.0m、面積12.47㎡の東西に長い長方形である。カマド方向軸はN-197-Eである。

(堆積土) 全面もしくは壁ぎわを除いた面には、1層の暗褐色土、2層の黒褐色土、3層の暗褐色土が主体に堆積し、1層・3層は黒褐色土にシルトが混在する。壁ぎわには流れこみ状の4層があり、黒褐色土とシルトが混合した暗褐色土である。全般に比較的単純なレンズ状の堆積を示す。

(壁) 垂直に近く立ち上がるが、南壁中央近くでP₁に関連する張り出し部分があり、この部分の壁は大きく外傾する。床面から検出面までの高さは40cm~50cmを計る。

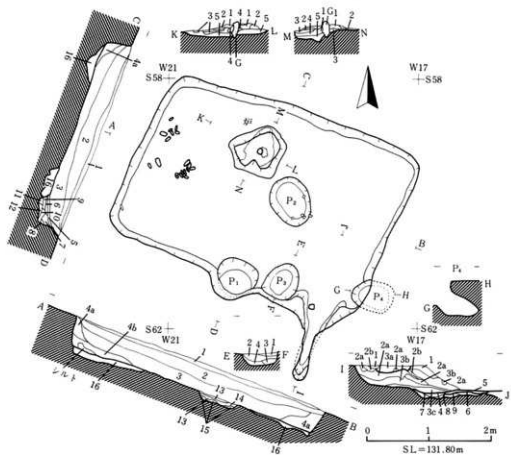
(床) 壁沿いに床面構築の掘り方を認めたが、他は地山シルト面をそのまま利用した固くてほぼ平坦な床面である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 南壁東端に位置し、袖の一部かとみられる地山の削り出しが壁内に入る様相もあるが、むしろ、燃焼部は壁外に掘りこまれたとみたい。燃焼部は間口50cm、奥行60cmで火床面は約10cmほど掘りこんだ上で埋土した上面でかなり焼けた様相を示し、床面とほぼ同レベルである。燃焼部奥壁から若干立ち上がってくりぬきの煙道が認められ、煙出し部も含め約90cmの長さ、20cmの径を計る。

(その他の施設) 貯蔵穴様ピットとしてP₁~P₄がある。各ピットの径と深さは、P₁ 50cm×60cmの20cm P₂ 60cm×80cmの8cm P₃ 50cm×70cmの20cm P₄ 60cm×70cmの20cmでP₁はほぼ中央に、P₁とP₃は南壁沿いに位置し、P₁の南半が壁外に張り出し、P₄が壁下半の奥へ



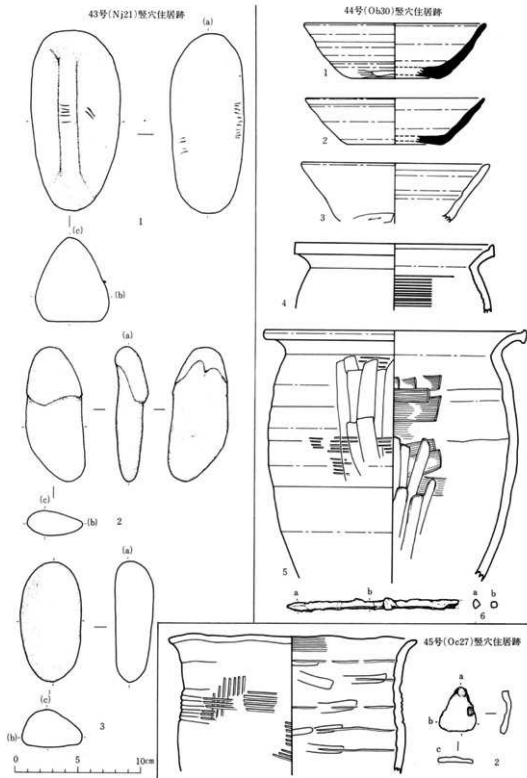
A-B, C-D	調査方法	調査結果	備考
1	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
2	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
3	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
4	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
5	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
6	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
7	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
8	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
9	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
10	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
11	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
12	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
13	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
14	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
15	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
16	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
17	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
18	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
19	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
20	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
21	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
22	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
23	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
24	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
25	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
26	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
27	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
28	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
29	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
30	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
31	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
32	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
33	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
34	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
35	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
36	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
37	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
38	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
39	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
40	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
41	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
42	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
43	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
44	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
45	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
46	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
47	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
48	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
49	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
50	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
51	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
52	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
53	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
54	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
55	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
56	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
57	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
58	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
59	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
60	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
61	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
62	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
63	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
64	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
65	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
66	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
67	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
68	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
69	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
70	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
71	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
72	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
73	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
74	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
75	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
76	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
77	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
78	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
79	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
80	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
81	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
82	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
83	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
84	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
85	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
86	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
87	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
88	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
89	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
90	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
91	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
92	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
93	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
94	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
95	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
96	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
97	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
98	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
99	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土
100	13YVN	黒褐色土	黒褐色土の埋土

調査方法	調査結果	備考
1	13YVN	黒褐色土
2	13YVN	黒褐色土
3	13YVN	黒褐色土
4	13YVN	黒褐色土
5	13YVN	黒褐色土
6	13YVN	黒褐色土
7	13YVN	黒褐色土
8	13YVN	黒褐色土
9	13YVN	黒褐色土
10	13YVN	黒褐色土
11	13YVN	黒褐色土
12	13YVN	黒褐色土
13	13YVN	黒褐色土
14	13YVN	黒褐色土
15	13YVN	黒褐色土
16	13YVN	黒褐色土
17	13YVN	黒褐色土
18	13YVN	黒褐色土
19	13YVN	黒褐色土
20	13YVN	黒褐色土
21	13YVN	黒褐色土
22	13YVN	黒褐色土
23	13YVN	黒褐色土
24	13YVN	黒褐色土
25	13YVN	黒褐色土
26	13YVN	黒褐色土
27	13YVN	黒褐色土
28	13YVN	黒褐色土
29	13YVN	黒褐色土
30	13YVN	黒褐色土
31	13YVN	黒褐色土
32	13YVN	黒褐色土
33	13YVN	黒褐色土
34	13YVN	黒褐色土
35	13YVN	黒褐色土
36	13YVN	黒褐色土
37	13YVN	黒褐色土
38	13YVN	黒褐色土
39	13YVN	黒褐色土
40	13YVN	黒褐色土
41	13YVN	黒褐色土
42	13YVN	黒褐色土
43	13YVN	黒褐色土
44	13YVN	黒褐色土
45	13YVN	黒褐色土
46	13YVN	黒褐色土
47	13YVN	黒褐色土
48	13YVN	黒褐色土
49	13YVN	黒褐色土
50	13YVN	黒褐色土
51	13YVN	黒褐色土
52	13YVN	黒褐色土
53	13YVN	黒褐色土
54	13YVN	黒褐色土
55	13YVN	黒褐色土
56	13YVN	黒褐色土
57	13YVN	黒褐色土
58	13YVN	黒褐色土
59	13YVN	黒褐色土
60	13YVN	黒褐色土
61	13YVN	黒褐色土
62	13YVN	黒褐色土
63	13YVN	黒褐色土
64	13YVN	黒褐色土
65	13YVN	黒褐色土
66	13YVN	黒褐色土
67	13YVN	黒褐色土
68	13YVN	黒褐色土
69	13YVN	黒褐色土
70	13YVN	黒褐色土
71	13YVN	黒褐色土
72	13YVN	黒褐色土
73	13YVN	黒褐色土
74	13YVN	黒褐色土
75	13YVN	黒褐色土
76	13YVN	黒褐色土
77	13YVN	黒褐色土
78	13YVN	黒褐色土
79	13YVN	黒褐色土
80	13YVN	黒褐色土
81	13YVN	黒褐色土
82	13YVN	黒褐色土
83	13YVN	黒褐色土
84	13YVN	黒褐色土
85	13YVN	黒褐色土
86	13YVN	黒褐色土
87	13YVN	黒褐色土
88	13YVN	黒褐色土
89	13YVN	黒褐色土
90	13YVN	黒褐色土
91	13YVN	黒褐色土
92	13YVN	黒褐色土
93	13YVN	黒褐色土
94	13YVN	黒褐色土
95	13YVN	黒褐色土
96	13YVN	黒褐色土
97	13YVN	黒褐色土
98	13YVN	黒褐色土
99	13YVN	黒褐色土
100	13YVN	黒褐色土

第52-1図 43号(Nj21)竪穴住居跡

掘りこんでいる。P₁とP₂では廃棄後埋土し、上面を貼って床面としている。

出入り口的施設と想定されるものにP₃がある。すなわち、P₃の埋土は、シルトまたは黒褐色土とシルトの混土を主体に互層状に埋められ、非常に固くしまっており上面が貼られており、壁の上端から床面にゆるやかなスロープ状を呈することなど、貯蔵穴を出入り口に転用したか、当初からそのような用途をもつ施設であった可能性も想定されるが現状では断定はできない。



第52—2圖 43号(Nj21)・44号(Ob30)・45号(Oc27)竪穴住居跡出土遺物

炉様施設として、床面北半の中央よりやや西寄りに位置し、焼土の中央に立石をもつ施設がある。径100cm×130cmほどの範囲で床面を若干掘りくぼめ、10cm～15cmほどの埋土をし立石を施設しており、立石の周囲に50cm×60cmの範囲で5cmほどの厚さの焼土が広がる。焼土上面は床面より10cmほど高い。なお、石囲い等は認められない。

出土遺物 (第52-2 図)

土器類は、叩目を有す土師器甕片が若干ある程度。図示したのは両輝石安山岩を素材とする石製品3点である。No 1は3面に使用痕のある砥石である。三角形を呈す断面の各角には、鋭利な鉄製品の刃部を研磨したと思われる痕跡が残る。No 3はNo 1の小型品とも思えるが、平坦面を使用した形跡は特に観察されない。単なる自然石かもしれないが、No 1と同じ材質でしかも断面が三角形を呈すことから、類似の遺物として掲示したものである。No 2は、陽物石製品の類いと思われる。

44号 (Ob30) 竪穴住居跡 (第52-2・53図 写真図版27・68)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西1.8m、南北4.4m、面積6.72m²で、南北に細長い長方形を呈する。カマド方向軸はN-80°-Wである。

(堆積土) 二層に大別される。すなわち、1層の黒褐色土と2層の黒色土であり、後者に炭を多量に含む。堆積状況は東壁と西壁側から中央に流れこむ様相をもつ。南半は擾乱のため本来の堆積土は不明であるとともに、南端では現代の水路の影響でグライ化層がみられる。

(壁) 東壁の南半と南壁は擾乱でほとんど破壊されており、床面でその範囲を確認できた。遺存部分の壁は、やや外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは約20cmである。

(床) 南半が若干低くなるが、面的には著しい凹凸はない地山を利用した床面である。北半東壁沿いに細い材の炭化物の広がりが認められたが、火熱による赤変面はない。

(柱穴) 認められない。

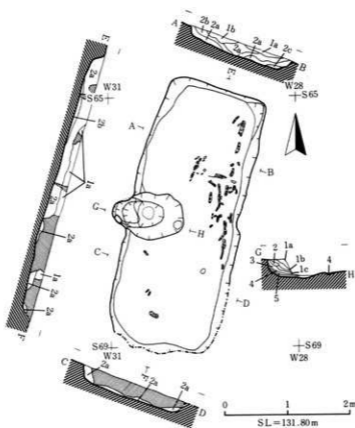
(周溝) 認められない。

(カマド) 西壁中央に位置し、燃焼部の奥壁が壁外に張り出しているが、煙道、煙出しは認められなく、遺存状況が悪く全体構造は明瞭でない。

(その他の施設) 認められない。

出土遺物 (第52-2 図)

環形土器3点、甕形土器2点、鉄製品1点、計6点の実測である。ただし、No 2は遺構検出段階にあって本竪穴住居跡のやや北側から発見されたもので、本来的な共伴を意味するものではない。



	A-B	C-D	E-F
1a	10YR5/1	黒褐色土	焼土、炭若干
1b	"	"	炭含む
2a	10YR5/1	黒色土	炭多量、焼土若干含む
2b	10YR5/1	"	焼土、炭若干、シルト混入
2c	10YR5/1	"	炭多量、焼土ブロック含む

② 本断面による層状

	G-H	
1a	10YR5/1 黒色土	炭、焼土含む
1b	10YR5/1	"
2c	"	"
2	5YR5/1 黒褐色土	焼土黒色土混合 炭含む
3	1.5YR5/1 暗赤褐色土	シルト黒色土混合 炭多量、焼土含む
4	1.5YR5/1 暗赤褐色土	焼土
5	1.5YR5/1 暗赤褐色土	炭含む、腐植土混入

第53図 44号 (Ob30) 竪穴住居跡

窠のNo 4はロクロ成形。推定口径16.1cm。内面にはカキ目痕が残る。外面の凹凸はあまり目立たず、僅かにロクロナデ痕がみられる。No 5は堆積土中からの出土。ロクロ成形であるが内面の作りはかなり雑であり、輪積痕上にヘラに依るナデツケがあるが、凹凸を消しきれないでいる。外面の体部には横位の印目があり、その上にヘラ削りに加えられる。反転復元に依る計測では口径が21.0cm位に推測される。

鉄製品はNo 6の1点。全長13.7cm。錆の付着は比較的少ないが一方の端部が欠失している。角釘と推察される。床面出土である。

他に破片として、堆積土中から土師器木葉底部片、ロクロと非ロクロの土師器体部片等が出土している。非ロクロ片は、外面に刷毛目かヘラ削りのものが大半である。また、最上層には近世の陶磁器細片がみられる。

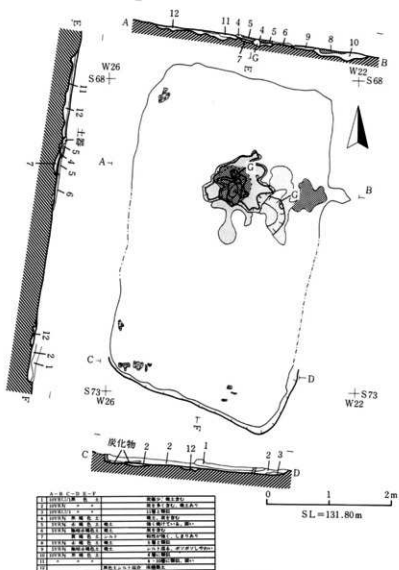
45号 (Oc27) 竪穴住居跡 (第52-2、54図 写真図版28)

(重複 改築) カマド廃棄後に炉が構築されたものとみられる。

(規模 平面形 方向) 東西3.1m、南北5.3m、面積15.60㎡の南北に長くややゆがんだ長方形である。カマド方向軸はN-97°-Eである。

(堆積土) 削平が著しく、わずかに遺存する堆積土は黒色土に炭極少と焼土を含む1層と黒色土に多量の炭を含む2層を主体とする。

(壁) 削平のためほとんど遺存せず南壁で痕跡を残すのみで、検出面まで10cmほどの高さである。



第54図 45号 (Oc27) 竪穴住居跡

(床) 削平のため遺構検出面が床面という状況である。北半で掘り方をみるが、南半は地平面利用の床で、全般に平坦である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半の中央に位置する。削平のため全貌は明瞭でないが、燃焼部掘り方と煙道の痕跡が認められた。なお、焼土の堆積状況から、後述する炉様の施設より古いと推察される。

(その他の施設) 北半の中央でカマドの西側に、炉様の施設が認められる。径約50cmで南開きの馬蹄形の掘りこみの中央に立石が認められ、馬蹄形面は黄褐色シルト質土を貼って構築したもので、立石を中心に焼土の広がりをもつが、石周辺は強く焼けた焼土である。カマド使用時の焼土が、本施設使用時の焼土下で認められることからカマドより新しく構築されたものと推察できる。

出土遺物 (第52-2図)

出土遺物は少なく、図示したのはNo1の土師器甕とNo2の鉄製品のみである。No1は中央焼土内からの出土で、反転復元に依る実測である。叩目を有する非クロ成形の甕である。口縁部は歪み、内面には巻上げの痕跡をそのまま残している。部分的にはヘラ先で巻き上げの接着面を横方向にナデツケしているが、かなり雑で器内の厚さが一定しない。外面の頸部近くにあつては縦位の叩目があり、更に横位のそれが重なる。従つて部分的に格子目を呈している。下方は、ヘラ削りで器面調整をしたと思われるが、単位は確定しない。

No2の鉄製品は住居跡内ビットからの出土。最大幅3.7×3.0cm大の板状三角形を呈すが、器種は不明。

その他破片としては、床面中央焼土内より、刷毛目調整を主とした土師器甕片、横位の叩目を有す土師器片等が散見される。なお、坏形土器類は、各類共出土していない。

46号-1 (Oi33-1)・46号-2 (Oi33-2) 竪穴住居跡

(第55図 第38表 写真図版28・29・68)

(重複 改築) 46号-1 竪穴住居跡としたものを拡張し46号-2 竪穴住居跡としており、本来同一住居跡となすべきものであり一括して記述する。

(規模 平面形 方向) 46号-1 住は、東西4.7m、南北5.7m、面積24.3m²、南北に長い長方形を呈し、カマド方向軸はN-190°-Eである。ただし、後述するように拡張以前にカマドを移築した可能性もあり、その場合の新規カマド方向軸は、46号-2 住と同じになる。

46号-2 住は、東西6.3m、南北7.1m、面積41.89m²、東壁がやや外にふくらむ歪んだ長方形であり、カマド方向軸はN-107°-Eである。

(堆積土) 黒褐色土を主体とする堆積土で、混入物による差異は認められないがほぼ類似する。その中で、南東寄りに堆積する4層は全般に焼土粒を含み、カマド周辺の堆積土の特徴をもつ、壁ぎわに流入する6層は黄褐色シルトブロックを混在する。1層～6層は人為性はみられず自然堆積土であるが、8層～11層は、拡張の46号-2住期の貼り床土の可能性がある。8層はシルトが混り若干固さをもつものの顕著な人為性を認めないが、9層のシルトと10層、11層を包括し、46号-1住の床面と拡張面との段差を埋めた貼り土と推察される。

多量に検出した炉壁片の分布は、東壁南端寄りに位置するNa2カマド本体付近に最も密集し、そこから北西方向に3.5m～4m、幅0.8m～1.5mの帯状の範囲に分布するが、これを包含する層は、詳細な記録がなく明らかにできないが、炉壁片分布範囲の一部が1層の焼土ブロックと炉壁片を含む黒褐色土が相当すると推察されるし、この分布範囲には焼土と灰の散在が確認されている。炉壁片の検出はレベル的にみて、一部は検出面上で確認でき、検出面下約10cmの幅の中に大半の上面レベルが包括され、深いもので20cm下が若干あり、それがカマド本体付近密集部分の北および南側に分布する炉壁片である。

(壁) 垂直に近い立上がりで、検出面までの壁高は高い部分で30cm内外、46号-2住拡張部では10cm～20cmを計る。拡張部の壁は46号-2住の北壁および西壁と平行せず、東壁の大半は共通するが拡張部は西に屈折する。すなわち、46号-1住プランの南北方向に対し、46号-2住プランの南北方向はやや西に傾く状況を呈する。

(床) 46号-1住では全体に掘り方をもち、黒色土とシルトの混合土を用いほぼ平坦な床面を構築しているが、46号-2住は、拡張部の大半は地山シルトをそのまま床面とし、北東隅および北西隅に浅い掘り方を認めた。46号-1住床面と拡張床面とは約10cmの段差を認めるが、北壁東半部では小さくなりほとんど感じられない。段差の大きな部分、つまり、46号-1住プランの西半相当には、東に低くなる状況に斜めに貼り土をし段差を埋めたと推察され、したがって、46号-2住の床は、拡張部の大半は地山シルト、46号-1住と共通する部分西半では貼り床、東半は旧住居跡の床面と一部に後述する粘土の貼り土を用い、西側から東側に低く傾斜するが面的には凹凸のない床であったものと推察する。

しかし、貼り土とした断面A-B・C-Dの9層～11層はともかく、8層は人為性が顕著でなく、調査時に面的に観察しなかった不備もあって、貼り土として断定する積極的要素を若干欠くが、層の入り方と他の堆積土よりシルトを混入し固さを認めることから、前述のような状況を推察したが、本来段差が存在したものであったことも完全に否定し得ない。

一方、46号-1住の東半床面に部分的に焼土混りの固い灰白色粘土が認められ、塊状ではなく5cm内外の厚さで広がりをもつもので、46号-2住の貼り土の可能性もあるが断定できない。

(柱穴) P₁～P₂₂の柱穴状ピットを検出した。46号-1住に伴うものは、位置と状況から



第55-1図 46号-2(0133-2)竪穴住居跡 炉片分布平面図

次の各ピットと推察される。すなわち、 $P_{10} \cdot P_{12} \cdot P_{19} \cdot P_{20} \cdot P_{14} \cdot P_{15} \cdot P_{16} \cdot P_{22} \cdot P_{17} \cdot P_{21}$ で、 $P_{10} \cdot P_{12} \cdot P_{19} \cdot P_{20}$ は、それぞれ北壁と南壁の中点近くに位置し、 P_{10} と $P_{12} \cdot P_{19}$ と P_{20} が隣接しその間0.7mと0.8mを計り、 P_{10} と $P_{19} \cdot P_{12}$ と P_{20} が対になって、5.7mと5.9mの間を計り住居跡北壁中点から南壁中点へと南北軸に平行する。この4本の柱穴は内側に傾き P_{12} と P_{20} は特に顕著である。

$P_{14} \sim P_{16} \cdot P_{22}$ の相関も考えられるが明確でない。すなわち、 P_{14} と P_{22} は後述する間仕切り様の溝と関連した囲いの施設等である。なお、 P_{14} と P_{22} は3m、 $P_{14} - P_{15} - P_{16}$ は0.8m-0.85m、 P_{16} から間仕切り様溝上端まで0.85mの間を計り、4点を結ぶとほぼ正方形に近い。 P_{17} と P_{21} はカマド施設張り出し部の両隅に位置し対状をなし、カマド施設部と関連するものと推察される。

46号-2住に伴う柱穴は $P_1 \sim P_9$ 、 P_{11} が明瞭である。 $P_1 \cdot P_3$ は住居跡平面の対角線上に乗り、 $P_3 \cdot P_4$ は若干東にずれる。各壁上端からの測定値は、 P_1 で南壁から2m 西壁から1.8m、 P_2 西壁から1.5m 北壁から1.6m、 P_3 北壁から1.65m 東壁から1.8m、 P_4 東壁から1.45m 南壁から2.8mを計り、 $P_1 - P_2 - P_3 - P_4 - P_1$ 間は、3.3m-2.9m-3.3m-3.05mを計る。

$P_7 \cdot P_8$ は北壁に接し相互の間は2m、これにほぼ平行し46号-1住北壁上端に $P_9 - P_{11}$ があり、1.8mの間を計る。 $P_7 \cdot P_9 \cdot P_8 \cdot P_{11}$ は対状になり、それぞれ1m、1.2mの間をもつ。

これら4本の東西方向は、 $P_1 \sim P_4$ の東西方向とほぼ平行になる。また、検出柱穴の中では最も柱痕を明瞭に残している。

P_{18} は、いずれの住居跡に伴うか不明であるが、 P_{17} と P_{19} と相関させたとき、 $P_{17} - P_{18} - P_{19}$ の間が、各1.45mとなり柱穴を結ぶ延長線が拡張南壁線上にほぼ乗ってくることから、拡張時の南壁関連も推察され、とするなら $P_{17} \cdot P_{19}$ は重複した使用も考えられるが確証なく断定できない。

(周溝) 46号-2住の拡張部分北半にのみ認められ、幅、深さとも15cm内外である。

(カマド) No1カマドは南壁東端を若干外へ角状に張り出させ施設したものと推察されるが、現状は煙道と煙出しのみ遺存する。煙道は幅25cm、深さ10cm内外の溝状で長さ80cmあり先端に楕円状の煙出しをもつ、煙出し底面は煙道より15cm落ちる。このカマドは、遺存状況からNo2カマドより古く46号-1住に伴うものである。

No2カマドは東壁南端に位置し、二枚の火床面を認めるものである。すなわち、断面D-D'の15層はカマド構築掘り方埋土で、その上に敷かれたシルトの焼土化が14層の瓦礫状および14層の焼土層で1次の火床面であり、1次火床面上に白灰粘土とシルトを敷き2次火床面としており、火熱のため赤褐色化した白灰粘土が13層、シルトは12層、12層で特に12層は瓦礫状を呈する。

2次火床面構築に当って全面改築したのか否かは明瞭に把握できない。現存の袖は粘土とシルトを主体に用い内から外へ貼りつけており、右側壁には石を、左側壁には炉壁片の転用と石を使用している。2次火床面は間口60cm、奥行100cm内外あり、右側壁寄りに支脚使用の伏せた臺がある。煙道は火床から緩傾斜で先端に高くなる幅25cm、深さ15cm~20cmで110cmの長さをもつ溝状で先端での煙出しとの区別はない。

なお、側壁転用の炉壁は燃焼部にも破片を多量に検出し、カマドを基点に北西方向に何らかの作用で押し流された様相を呈することから、燃焼部の上部にも転用した可能性もある。

No2カマドはNo1カマドより新規で、46号-2住に伴うものとみるが、1次火床期については拡張前の46号-1住期にNo1カマドから移築されたとする可能性は否定できない。

(その他の施設) 46号-1住に伴ない間仕切り様の溝を検出。北壁に平行し幅15cm~20cm、深さ5cm内外で長さ3mあり、北壁から溝南側の上端まで約1.2mある。明確な性格は不明であるが、前述の $P_{14} \cdot P_{22}$ 柱穴等との相関があり得るならば間仕切りとも推察できる。

$P_{23} \sim P_{32}$ のピットは、拡張床面に所在する $P_{31} \cdot P_{32}$ と施設順において柱穴 P_4 より新しい P_{24} は、46号-2住に属するが、他のピットについては、検出面の把握が不備であったこと、共通の床面の可能性とから、いずれの住居跡に属するか判然とし得なく遺憾である。

ただ、拡張部分のピットを除き、堆積土に焼土をもつものが多く、特に $P_{24} \cdot P_{27} \cdot P_{28}$ は量

的に多い。P₂₇は上面を貼っておりP₂₃とP₂₆も可能性が強く人為的埋土の可能性があり、他にP₂₄も一気に焼土を埋めたものとみられる。また、P₂₉は底をシルトで貼っており特徴的である。

形態的には、隣接するP₂₇とP₂₈が口径に対し底径が広く袋状を呈し、P₂₃は円筒状に近い。他は半円もしくは皿状である。これらピットの性格は特定できないが貯蔵穴他の用途が想定され、炉壁と直接関連づけられるピットはない。

出土遺物・46-2号住 (第55-3・5図No1・12・32)

出土遺物は、第46号-1(Oi33-1)住の方に集中しており、本遺構からの出土はA類(No1)、須恵器蓋(No12)、砥石(No32)の3点を図示しているだけである。他に破片として、刷毛目とヘラ削りを中心とする土師器器体部片とロクロ成形細片が若干みられる程度である。

No1は床面出土。口径13.8cm、底径6.8cm、器高4.4cm、ヘラ切無調整の坏。No12は堆積土中からの出土。暗灰黄色を呈す硬質な蓋である。口径11.2cm。No1・12共第46-1号住の壁近くに存在していた。No32は床面出土の砥石。素材は石質細粒凝灰岩。4面に使用痕があるが、多く使われたのは1面である。

出土遺物・46-1号住 (第55-3・4・5図 第38表)

出土遺物は多く、その大半が新期のカマド近くに集中している。住居跡内堆積土上面は46号-2(Oi33-2)住の床面レベルと同位であるが、以下の各層にも遺物は混入する。特に新期カマド周辺にあつては、少なくとも3段に渡る分布が確認される。

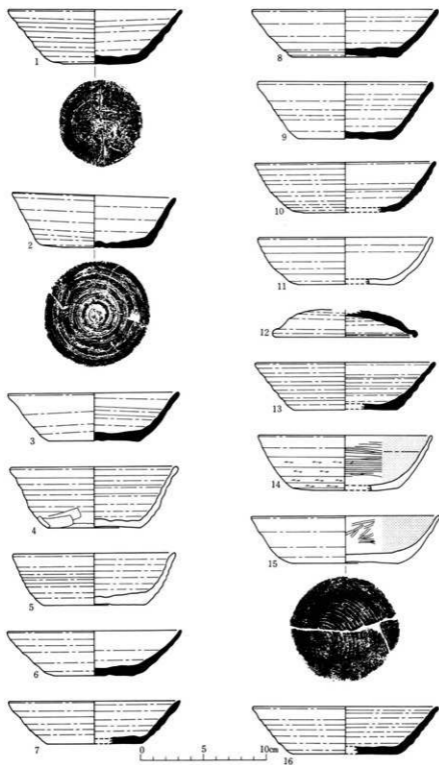
第50-2・4図中のNo2・12・32は既述の46号-2住のものであるが、他は本遺構出土である。環形土器14点、甕形土器10点、須恵器拓影図1点、土錘1点、鉄製品2点、砥石2点の他、第50-4図に示した遺物がある。

環形土器はA・B・C各類がセットして出土する。A類9点、B類3点、C類2点の内訳であり、A類は概して体部が直線的に起る例が多い。一方のB・C類は体部或るいは底部付近でやや膨らみを持つのが普通であるが、口縁付近は外反乃至は外傾と一定しない。

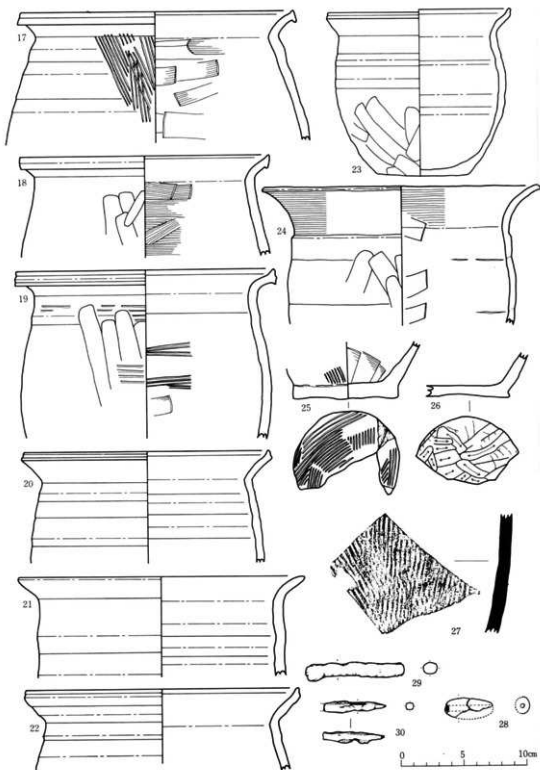
甕形土器は土師器10点と須恵器拓影図1点を図示している。No17・20・23・25・26は新期カマド周辺からの出土であるが、この他には体部に×印を有す土師器片も1点みられる。また、底部外面仕上げの特異な例としては、No25・26の2点が挙げられよう。No25は刷毛目、No26は木葉痕上にヘラ削りが加えられる。

鉄製品は4点の出土であるが図示したのは2点、何れも器種不明である。各々についての法量等は38-3表の通りである。

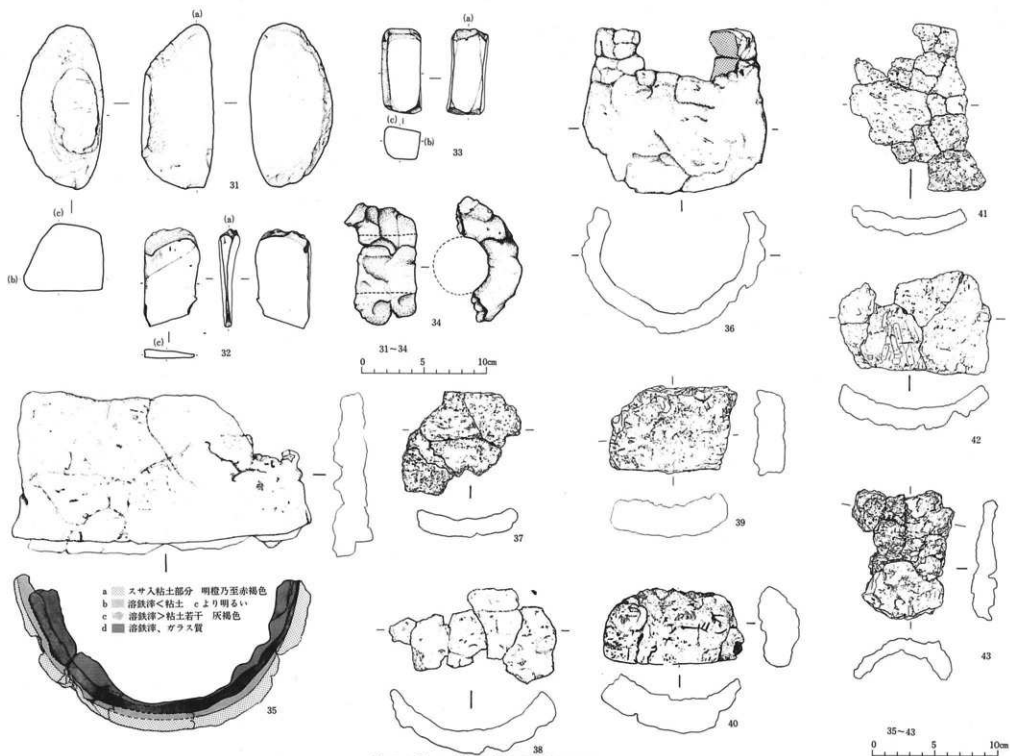
砥石は、31・33の2点である。No31は緑色凝灰岩、No33は斜長石流紋岩を素材とする。前者は側面が台形状を呈し3面が使用されている。また後者は歪みのある四角柱で、4面が使用されている。何れも床面出土である。



第55—3圖 46号(O:33)竪穴住居跡出土遺物



第55—4图 46号(O33)竖穴住居跡出土遺物



第55—5図 46号(033)竪穴住居跡出土遺物

No.34は鞠の羽口片である。推定内径4.5cm以上の大型であり、一方の端部表面に溶鉄滓が少量に附着している。住居跡内の堆積土上面からの出土であるが、46号-2住の床面レベルにほぼ

第38-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切磨し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			$\frac{a}{b}$	$\frac{a}{d}$	外傾角度(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
2	176	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.0	8.2	4.4	1.6	3.0	58.5	日期的色調 (7.5YR ₅ /1-1) (床面)
3	177	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.6	7.2	3.9	1.9	3.5	50.5	(増積土)
4	178	B 類	ヘラ切	手掛ヘラ削り	体部下端 ~底部	13.2	7.4	4.9	1.8	2.7	58.5	硬質。(増積土)
5	—	B 類	ヘラ切	無調整	/	(12.8)	8.0	4.2	1.6	3.0	59	磨減。(増積土)
6	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	6.4	3.6	2.2	3.8	44	底部に軽いナデ。(増積土)
7	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	(7.6)	3.4	1.8	4.1	48	(新カマド左袖左+新カマド付近増積土)
8	179	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.8)	8.4	3.8	1.8	3.9	50	(新カマド)
9	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	7.6	4.6	1.8	3.0	55.5	(増積土)
10	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.4)	(8.6)	4.0	1.7	3.6	52.5	(増積土)
11	—	B 類	磨 減	—	—	(13.8)	(7.6)	3.8	1.8	3.6	50	(新カマド左袖内)
13	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.2)	(8.2)	3.8	1.7	3.7	52	(増積土)
14	—	C 類	磨 減	回転ヘラ削り	体部下端	(13.8)	(8.4)	4.4	1.6	3.1	57.5	(増積土)
15	—	C 類	回転糸切	回転ヘラ削り	底部外周	(15.0)	8.4	3.8	1.8	3.9	51.5	磨減のため体部調整不明。(増積土)
16	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.8)	(8.2)	3.8	1.8	3.9	50	(増積土)

第38-2表 変形土器一覽

実測図番号	写真番号	種 別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大傾斜	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
17	—	土師器	(22.3)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラケズリ	非ロクロ。肩部有段。反転復元。(カマドNo.2+床面)
18	—	土師器	(22.3)	—	—	—	ロクロナデ	木口利用 のナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	反転復元。外面刷毛目録。(掘り方埋土中)
19	—	土師器	(20.1)	—	—	—	ロクロナデ	磨定の甲目 +ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	反転復元。(増積土)
20	—	土師器	(20.1)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。未定あるか?(カマドNo.2+床面)
21	—	土師器	(22.9)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。一部黒変あり。(掘出し時出土)
22	—	土師器	(22.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。(ビットNo.4増積土)
23	180	土師器	14.8	7.3	13.3	13.7	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	底面ヘラケズリ。体部下端ケズリ部分器内 薄い。(カマドNo.2埋土中)
24	—	土師器	21.0	—	—	—	ロクロナデ	叩 目 + ヘラケズリ	ロクロナデ	84目+ナデ	(増積土)
25	—	土師器	—	8.4	—	—	—	刷 毛 目	—	ヘラ のナデツケ	非ロクロ。輪積み。底部外面にも刷毛目。 (カマドNo.2)
26	—	土師器	—	8.5	—	—	—	ヘラケズリ	—	水 口 利 用の ナデ	非ロクロ。底部外面水裏上にヘラケズリ。 (カマドNo.2)
27	—	須恵器	拓影図。外面平行叩目。内面押し痕あり。								

第38-3表 鉄 製 品 一 覧

本遺構番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形	備 考
					長さ(mm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
29	—	不明	破片?	不 良	77.50	9.50	11.0	11.90	桃 円 形	棒状。
30	—	釘 状	端 部 片	やや不良	48.50	6.0	5.80	4.60	方 形	(増積土)
—	—	不明	破 片	やや不良	28.70	—	—	0.90	方 形	細い棒状片。(増積土)
—	—	不明	破 片	不 良	—	—	—	計 21.0	—	詳細不明。(増積土)

同位である。

No35以下は、炉壁の一部と思われる。個体数は確定しないが、図示したものの他にも多量の破片が出土している。カマドの袖部に比較的大き目の破片が備えつけられたようにあったり、カマド燃焼部を中心とした範囲に散在していたものである。層位的には本遺構の増積土上面に当たるが、この場合も46号—2住の床面レベルにほぼ近い。また、量的には少ないが鉄滓も同位に存在する。「製鉄遺構」に関する遺物であろうが、ここでは特に触れない。各々についての様子は、No35の断面図に示した様に、内側ガラス質の溶鉄滓が付着しており、外側に向かって漸移的に粘土質部分が多くなる。外壁部分は明橙色或いは赤褐色を呈し、スサが入っている。この部分は火熱の影響をあまり受けない部分である。また溶鉄滓部分の表面には、部分的に突き刺さったような感じで木炭らしき痕跡がみられる場合もある。なお、No35は上方に行くに従って狭くなるようであり、No36が炉の先端部となる可能性が考えられる。

また、No43は溶鉄滓の付着する面が他の遺物と異なり、反り方向が逆になっている。従って、円形のプランを呈す部分とハート形を呈す部分とがあったことを示唆する。

47号 (Pd15) 竪穴住居跡 (第56図 第39表 写真図版29・30・68・69)

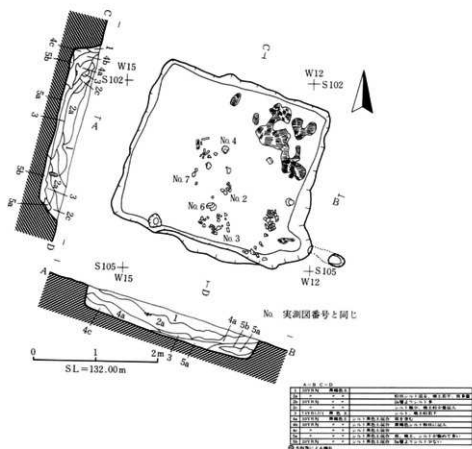
(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西2.9m、南北2.8m、面積3.4㎡のほぼ正方形の平面形をもち、カマド方向軸はN-109°-Eである。

(増積土) 二大別できる。すなわち、1層から3層は黒褐色土からなり、4層・5層は黒色土とシルトの混合する黒褐色土となる。前者では1層を除き、シルト、焼土、炭が混入し、特に、2a層では多量の炭が認められた。後者も前者同様の混入物を見るが、竪穴住居跡東半に東壁から流れこむ様に堆積する5層では、焼土、炭、シルトの混入が極めて多量である。

(壁) 南壁でやや外傾するが、他は垂直に近い立ち上がりを呈し、検出面までの壁高は35cm～40cmである。

(床) 地山をそのまま利用するほぼ平坦な床面である。床面には炭が非常に多く検出されて



第56-1図 47号 (Pd15) 竪穴住居跡

おり、北東隅では茅状植物の炭化物が床面より若干浮いて認められ、状況から推測して床面敷設用の材より、上部材の落下したものと考えられる。なお、床面上での焼土は認められない。

(柱穴) 南壁の西半中央近くに柱穴状ピットがある。上端から一部を削りこんで壁に密着し、径20cmの円形で深さ17cmである。他にピットは確認されず柱穴としての確証はない。

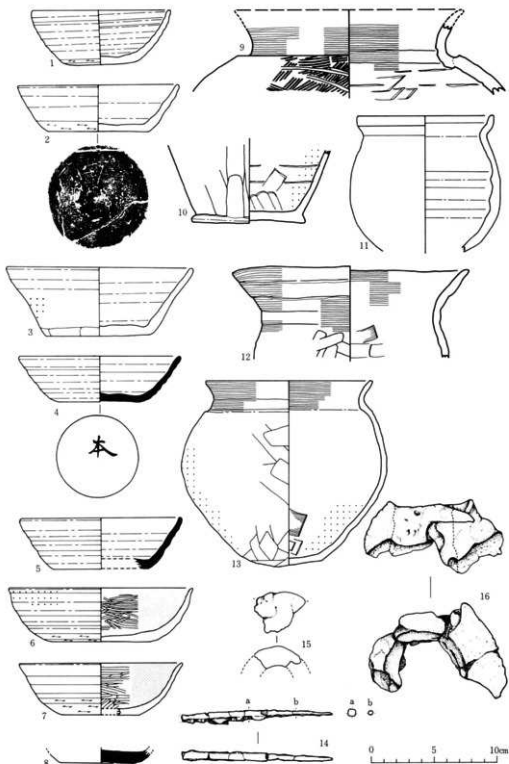
(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の南端に位置し、カマド構築の掘り方等は認められず、燃焼部は壁外に半円状に張り出し火床面は間口35cm、奥行30cmである。煙道は火床面から約20cm上がった燃焼部奥壁から、径10cm~20cmのくりぬきで約60cmのび先端が楕円状の煙出しとなる。

燃焼部、煙道部とも火熱の痕跡がみられず、遺物も検出されない。ただ、煙道の堆積土には若干の炭と焼土粒が混入している。

(その他の施設) 認められない。

(小結) 床面に炭化物が多量に検出されたことが顕著な特徴で、北東隅の茅状の炭化物の状況、堆積土中に炭と焼土を含み、特に、5層に多いこと等を総合するとき、焼失家屋である可



第56—2图 47号(Pd15)竖穴住居跡出土遺物

能性も推察される。

出土遺物 (第56-2図 第39表)

環形土器 8点、甕形土器 5点、鉄製品 1点、羽口片 2点の計16点の実測。他に堆積土内より、ロクロ・非ロクロ成形土師器甕片、A・B・C各類片等が出土している。甕は大・小の両様が見られ、非ロクロ片は刷毛目+ヘラ削り調整が多く、ロクロ成形片の多くは外面にヘラ刷りが施される。A類片中にはヘラ切片が2点あり、体部片と共に硬質のもので占められる。

図示した環形土器中で回転糸切痕を有するのはA類に限られており、しかも再調整はみられない。また、特にNo4については、底部外面に「本」の墨書が記されている。他のB・C類とされた5点は外面に何らかの再調整を有しており、切離しはヘラ切または不明である。No2の底部外面には、刻字らしきものがみられ、「甲」と読める。

甕形土器は相対的に非ロクロ成形のものが多く、また、球胴を呈する器形が目立つようである。No10・13を除き、他は反転復元に依る実測である。

鉄製品No14は、最長部12cm残存の鉄銚。堆積土内からの出土で、断面は方形に近い。

第39-1表 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)				a/b	a/d	外傾角度(°)	備 考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)	最大径				
1	181	B 類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端-底部	11.1	6.0	4.5	1.9	2.5	55	底部調整は外面のみ。(増積土)	
2	182	B 類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端-底部	12.8	8.0	3.8	1.6	3.4	58	底部調整外面のみ。底部外面に刻字(?)「甲」有。(底面上)	
3	-	B 類	調整のため不明	手揉ヘラ削り	体部下端-底部	14.7	8.6	5.6	1.7	2.6	58.5	外面に多量のカーデン付着。(底面)	
4	-	A 類	回転糸切	無調整	/	(12.8)	6.6	3.7	1.9	3.5	50.5	底部外面に墨書「本」。(底面)	
5	-	A 類	回転糸切	無調整	/	(12.6)	(7.6)	4.1	1.7	3.1	58	(増積土)	
6	183	C 類	ヘラ切	手揉ヘラ削り	体部下端-底部	(14.6)	7.8	4.3	1.9	3.4	51	(増積土)	
7	-	C 類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端-底部	(13.0)	(6.2)	4.1	2.1	3.2	50		
8	-	A 類	回転糸切	無調整	/	-	6.4	-	-	-	-	底部片。切離しを2度試みた痕跡あり。	

第39-2表 変形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口径	底径	器高	最大径	口縁部	体部	口縁部	体部	
9	-	土師器	-	-	-	-	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	ヘラナデ	反転復元。球胴形。口縁部欠失。(増積土)
10	-	土師器	-	9.0	-	-	-	ヘラケズリ	-	ヘラナデ	体下端-底部片。底部外面へラ先に歌るナデ。
11	-	土師器	(11.0)	-	-	(12.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。(増積土)
12	-	土師器	(19.0)	-	-	-	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	非ロクロ。輪積み。(増積土)
13	184	土師器	13.4	5.8	14.9	16.5	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	底部外面ヘラケズリ。器内薄手。(底面)

これらの他に、床面から羽口の破片が出土している。№15は一方の端に溶鉄滓が付着している小片である。№16は、約 $\frac{1}{2}$ が49号(Pf18) 竪穴住居跡出土の破片であり、残る部分は本遺構内出土片である。一方の端部外面には溶鉄滓が付着しており、内径が4cm以上もある。

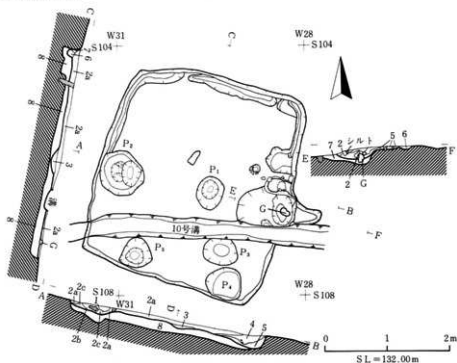
また、植物遺体としては、東壁付近より茅が出土している。一定の方向性を持って堆積しており、屋根材に関わるものかもしれないが、断定はできない。

48号 (Pe33) 竪穴住居跡 (第57図 第40表 写真図版30)

(重複 改築) 10号(Pf33) 溝が竪穴住居跡南半を東西に切っているが床面までは達していない。

(規模 平面形 方向) 東西3.1m、南北3.4m、面積9.28m²の若干南北に長い方形を呈している。カマド方向軸はN-107°-Eである。

(堆積土) 削平が著しく堆積土は比較的薄い遺存であり、焼土、炭、シルト等を含んだ黒褐色土を主体とする。



調査年度	調査者	調査内容
1971	藤田 隆	発掘調査
1972	藤田 隆	発掘調査
1973	藤田 隆	発掘調査
1974	藤田 隆	発掘調査
1975	藤田 隆	発掘調査
1976	藤田 隆	発掘調査
1977	藤田 隆	発掘調査
1978	藤田 隆	発掘調査
1979	藤田 隆	発掘調査
1980	藤田 隆	発掘調査

調査年度	調査者	調査内容
1971	藤田 隆	発掘調査
1972	藤田 隆	発掘調査
1973	藤田 隆	発掘調査
1974	藤田 隆	発掘調査
1975	藤田 隆	発掘調査
1976	藤田 隆	発掘調査
1977	藤田 隆	発掘調査
1978	藤田 隆	発掘調査
1979	藤田 隆	発掘調査
1980	藤田 隆	発掘調査

第57-1図 48号 (Pe33) 竪穴住居跡

(壁) 削平のため遺存は良好ではない。床面から検出面までの高さは5cm~10cmである。

(床) 全面掘り方があり、その掘り方底面は壁沿いで凹凸を認めるが、他は著しい凹凸がなく、他例に比較して特徴的である。床構築土はシルトと黒色土の混土を用い、床面はほぼ平坦である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 北半壁沿いに認められ、北壁東端寄りと西端寄りに一部切れる部分がある。幅10cm、深さ10cm内外を計る。

(カマド) 東壁中央に位置する。掘り方をもつ構築法で、燃焼部は間口50cm、奥行50cmほどで火床面は若干のくぼみもち、中央には支脚石が認められた。左袖と10号溝に破壊され一部のみ遺存する右袖があり、シルトと黒色土の混土を用い構築している。煙道は燃焼部火床から若干上がり、幅20cm~40cmの深さ5cmで長さ40cmの先細りの溝状を呈す。煙出し部との区別は明瞭でない。

(その他の施設) P₁~P₅の貯蔵穴様ビットを認めるが、用途は必ずしも明確ではない。それぞれの径と深さは、P₁ 43cm×53cm、25cm P₂ 70cm×72cm、30cm P₃ 50cm×52cm、14cm P₄ 50cm×55cm、13cm P₅ 47cm×50cm、20cmを計る。堆積土の主体は、P₁・P₂・P₃は黒褐色土で、P₄とP₅は暗赤褐色または極暗褐色の焼土で炭と礫片を少量含む。

出土遺物 (第57-2図 第40表)

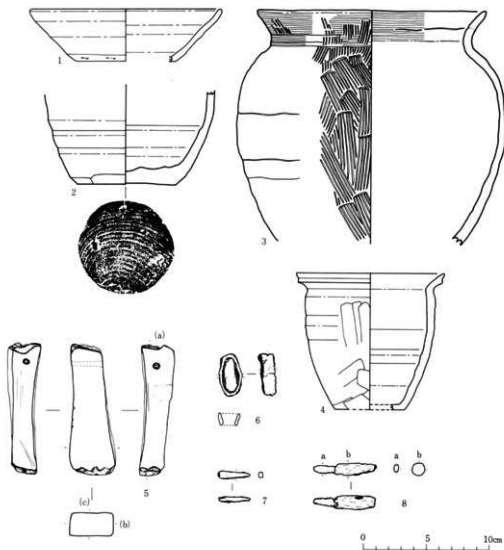
環形土器1点、甕形土器3点、砥石1点、鉄製品3点、計8点の実測。他に破片としては、

第40-1表 変形土器一覽

実測区番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口径	底径	器高	最大口径	口縁部	体部	口縁部	体部	
2	—	土器	—	7.8	—	—	—	—	—	—	回転糸切、手持ヘラ削り。(床面)
3	—	土器	(18.4)	—	—	(21.4)	ヨコナデ +刷毛目	刷毛目	ヨコナデ	ヘラナデ?	非ワコノ。反転復元。球胴形。(床面)
4	—	土器	(11.9)	(5.5)	10.9	—	—	—	—	—	反転復元。内面黒変。(増殖土+ビット)

第40-2表 鉄製品一覽

実測区番号	写真番号	種別	現存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
6	—	環状製品	完形品	比較的良好	長径=32.70 短径=18.30	10.90	4.50	3.85	長方形	楕円形。(床面)
7	—	角釘	完形品	比較的良好	25.50	4.50	3.70	0.90	長方形	小型。(床面)
8	—	鉄 槌	槌部片?	比較的良好	49.0	a=7.0 b=10.0	a=4.80 b=10.20	4.10	a=長方形 b=円形	方位を木質が覆う。(床面)
—	—	刀子	刃の先端部	やや不良	29.80	7.90	7.90	1.10	薄い楕形	(床面)
—	—	不明	破片?	不良	—	—	—	1.90	—	棒状。(床面)



第57-2図 48号(Pe33)竈穴住居跡出土遺物

非ロクロの土師器甕片とB類の底部片があるだけである。

No 1は橙色を呈す胎土の悪いB類。反転復元に依る。住居跡内ピットからの出土であり、体部下端にヘラ削りが施される。底部は欠失しているため切離しは不明である。

甕形土器と鉄製品については40表を参照されたい。なお、鉄製品は床面から5点出土しているが、図示したのはそのうちの3点 (No6・7・8) だけである。

No 5は砥石。素材は斜長石流紋岩。カマド袖部北側からの出土。有孔のもので4面が使用されている。携帯用であろう。使用面上の一部に黒褐色の付着物が観察される。

49号 (Pf18) 竪穴住居跡 (第58図 第41表 写真図版30)

(重複 改築) 竪穴住居跡のほぼ中央を10号 (Pf33) 溝に東西方向に切られている。

(規模 平面形 方向) 東西2.8m、南北3.6m、面積8.5㎡の非常に歪んだ南北に長い長方形である。カマド方向軸はN-19°-Eである。

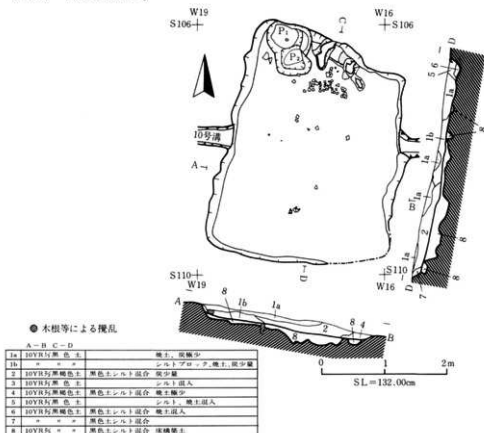
(堆積土) 二大別できる。黒色土に炭、焼土、シルトブロック等を含む1層、黒色土シルトの混合土の2層とで、堆積土のほぼ全体をしめる。堆積状況は必ずしも整ったものではなく10号溝等との関連で攪乱もある。

(壁) 竪穴住居跡上面がかなり削平されており壁の遺存状況は悪く、南壁東半はほとんど遺存しない。現況での立ち上がりは大きく外傾していて、特に東壁南半で著しく、本来のものではなく崩壊によるものと推察される。遺存部での検出面までの壁高は10cm~15cmである。

(床) 主に南半で顕著な掘り方をもち、シルトと黒色土の混合土で床面を構築し、北側では地山をそのまま利用していて、一般的にほぼ平坦である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。



第58-1図 49号 (Pf18) 竪穴住居跡

(カマド) 北壁のほぼ中央に位置し、カマド構築の掘り方は認められず、左袖は黒色土とシルトの攪拌土を用い構築し、中に2ヶの石を芯材として認めた。右袖はわずかに残痕がみられるのみで、燃烧部の一部に焼土をみるが、破壊が著しく全貌は明瞭でない。煙道と煙出しは認められない。

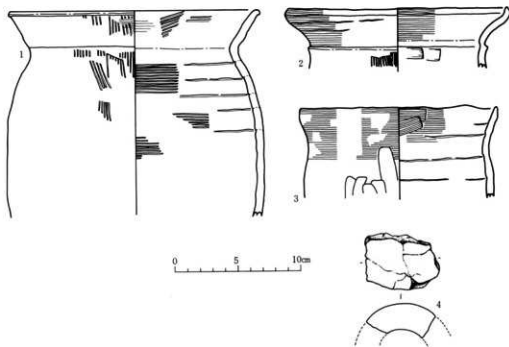
(その他の施設) カマド西隣りにP₁とP₂を検出した。P₁は径55cm×67cm、深さ18cm、P₂は40cm×53cm、深さ21cmで、堆積土はいずれも黒褐色土を主体に土器片を包含する。両者は重複し、P₂が新しい。どちらも、貯蔵穴と推察される。

出土遺物 (第58—2図 第41表)

図示した遺物は甕形土器3点と輪の羽口1点である。坏形土器は、C類の底部片とA類の口縁部細片が各々1点だけ床面から出土している。他に破片としては、カマド付近に非ロクロの球胴片(土師器)、床面から木葉底部片・ロクロ成形土師器甕片が若干出土している。

甕形土器の3点は何れも床面出土の非ロクロ土師器。完形品は無く、反転復元に依る実測である。3点共口縁部と頸部～肩部の様相が異なるものである。

No4は床面出土の羽口片。外面と端部に溶鉄滓が付着する。推定外径は7cm強位と思われる。内側はやや赤熱化した粘土であり、磨滅している。なお、同様の羽口片がもう1点出土しているが、47号(Pd15)住出土の羽口片と接合したため、図版は47号住で載示している。やはり端



第58—2図 49号(P118)竪穴住居跡出土遺物

第41表 変形土器一覽

写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
		口径	底径	器高	最大脚径	口縁部	体部	口縁部	体部	
1	土師器	(22.0)	—	—	—	刷毛目+ヨコナデ	刷毛目+ヘラケズリ	ヨコナデ+刷毛目	幅広い刷毛目	ヘラケズリの単位不明。(床面)
2	土師器	(18.0)	—	—	—	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部有段。(床面+カマド左側軸)
3	土師器	(16.0)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ?	肩部無段。輪縁み。(床面)

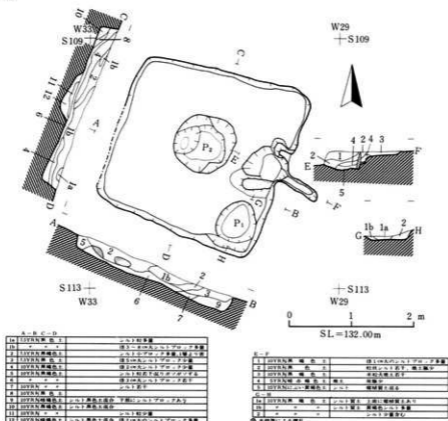
部外面に溶鉄滓が付着したものである。

50号 (Pg33) 竪穴住居跡 (第59図 第42表 写真図版31・69)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西2.7m、南北2.7m、面積6.25m²で、正方形に近いがやや歪んでいる。カマド方向軸はN-115°30'-Eである。

(堆積土) 比較的大きなシルトブロックを全般に含む黒色土および黒褐色土が堆積土の主体であり、シルトの混入量の多少によって細分され、混入するブロックは径2cm~8cm大のものである。



第59-1図 50号 (Pg33) 竪穴住居跡

(壁) 垂直に近い立ち上がりであるが、西壁上端の一部は攪乱で破壊されている。検出面までの高さは25cm～30cmを計る。

(床) 全面掘り方をもち、黒色土とシルトの混土で床面を構築し、ほぼ平坦である。

(柱穴) 認められない。

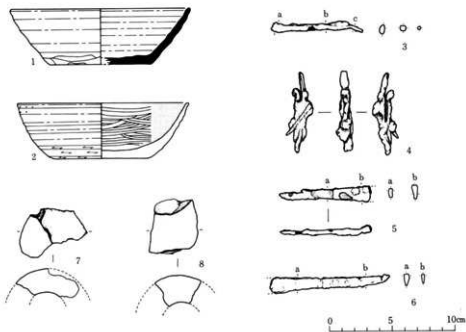
(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁のほぼ中央に位置し、燃焼部は掘り方をもち黒色土混りのシルトを埋土して上面を火床面として、間口は40cm、奥行5cmを計り、両袖はシルトと黒褐色土で構築する。煙道は燃焼部から若干の立ち上がりで約60cmの長さでほぼ水平にのびる溝状で、幅15cm、深さ5cmであり、煙出し部の区別はない。

(その他の施設) 貯蔵穴と推察される P_1 ・ P_2 があり、南東隅の P_1 は径60cm×70cm、深さ5cmでシルトを若干含む黒褐色の堆積土をもつ、遺物の出土はない。中央に検出された P_2 は、径90cm×90cm、深さ15cm、ブロック状のシルトが多量に混入する黒褐色土を堆積土とする。

出土遺物 (第59-2図 第42表)

環形土器2点、鉄製品4点、籾の羽口2点、計8点の実測。他にカマド部を中心として非ロクロの土師器甕片が少数出土している。明らかにロクロ成形と思われる例はみられない。甕片は球胴と長胴の二様があるようである。また、やはりカマド近くで炉壁の破片が数点出土して



第59-2図 50号(Pg33)竪穴住居跡出土遺物

いる。これは第46号-2 (Oi33-2) 住出土のそれと全く同類のものであり、内側に溶鉄滓が付着している。ただし、同一の個体であるか否かは判断出来ない。

坏形土器・鉄製品については下表を以て説明に替える。なお、鉄製品は9点出土しているが図示したのはそのうちの4点 (No 3・4・5・6) である。

No 7・8 は鞠の羽口片である。No 7 は堆積土中からの出土。推定内径3 cm弱、厚さ1.8cm。No 8 は床面出土。推定内径3 cm弱、厚さ2.1cm。既述の炉壁片と共に、本遺構が「鉄」に関わる生産遺構として何らかの役割を果たしていたであろう可能性を示唆するものである。なお、鞠の羽口片はもう1点出土しているが、54号 (Qe18) 竪穴住居跡出土の羽口片と接合したため、図版及び詳細は54号住居跡の項を参照されたい。

第42-1表 坏形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	切断し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	- A	類	調整のため不明	手磨へう磨り	体部下端一部	14.2	8.0	4.5	1.8	3.2	54.5	(カマド左軸)
2	- C	類	調整のため不明	回転へう磨り	体部下端一部	13.6	7.4	4.5	1.8	3.0	54.5	(床面直上)

第42-2表 鉄 製 品 一 覧

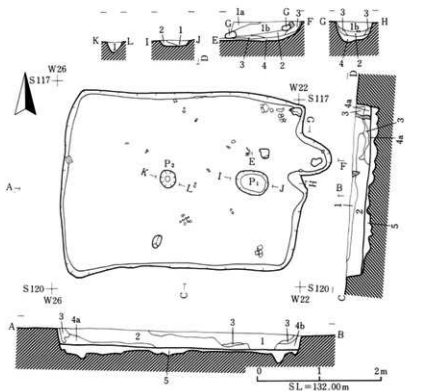
実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
3	186	鉄 鉢	一部欠失	やや不良	75.20	a --- 8.0 b --- 2.80	a --- 4.20 b --- 2.80	4.90	a --- 扁 b --- 方	平形 末端部曲がる。(地山直上)
4	187	不 明	3破片が合体	やや不良	64.0	—	—	計 7.90	—	詳細実測図参照。(軸直上)
5	188	刀 子 塞 部	跡の割に残りよし	やや不良	73.0	a --- 8.0 b --- 11.2	a --- 3.10 b --- 3.0	5.40	—	長方形 茎元やや湾曲。(増積土)
6	189	刀 子 刃 部	跡の割に残りよし	やや不良	95.60	a --- 9.80 b --- 7.20	a --- 4.0 b --- 2.80	6.60	—	楔形 (増積土)
-	-	刀 子 刃部2破片	やや不良	—	—	12.50	—	計 0.90	—	薄い楔形 同一個体。(地山直上)
-	-	不 明 破 片	やや不良	—	23.50	—	—	0.65	—	方形 (地山直上)
-	-	釘 状 破 片	不 良	—	80.0	—	—	6.70	—	方形 (増積土)
-	-	刀 子 刃 部 片	やや不良	—	26.0	12.90	—	1.75	—	薄い楔形 (地山直上)
-	-	不 明 破 片	やや不良	—	14.70	—	—	0.15	—	方形 小破片。(増積土)

51号 (Pi27) 竪穴住居跡 (第60図 第43表 写真図版31・69)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北2.8m、面積9.62m²の、東西に長い長方形を呈する。カマド方向軸はN-94°-Eである。

(堆積土) 主体は黒色土および黒色土とシルトの混土である。すなわち、1層の黒色土であ



A-B C-D

1	TSVRH	黒色土	遺物混入
2	TSVRH	黒褐色土	黒色土シルト混入 部分的にシルトドロップ・遺物混入
3	TSVRH/2	黒色土	
4a	TSVRH	黒褐色土	シルト混入
4b	*	*	礫土、炭灰土
5	TSVRH	*	シルト黒色土混入 部分的にシルトドロップ、炭積物土
1	TSVRH	黒色土	炭混入
2	SVRH	暗赤褐色土	礫土

●木根等による変色

E-F G-H

1a	TSVRH	黒色土	遺物混入、部分的に礫土
1b	TSVRH/2	*	礫土混入、炭混入
2	SVRH	暗赤褐色土	シルト混入 礫土小ドロップあり
3	SVRH	*	礫土 炭混入
4	TSVRH	黒褐色土	礫土、炭灰土
5	*	*	
1	TSVRH	黒色土	粒状シルト土

第60—1図 51号(P127)竪穴住居跡

り、東半に広がり一部床面まで達し、2層は黒色土とシルトの混土で部分的に黄褐色シルトのブロックを含み西半検出面から東へ斜めに入り床面まで達する。壁ぎわにシルト混入の黒褐色土の4層がある。2層に対する1層の入り方に垂直に近い部分があり、しかも堆積土中から出土した約95片の土器片中、約70片が1層からの出土であることも含め、2層堆積後に何らかの目的で掘りこんだ可能性と、1層・2層とも人為的な可能性も考えられる。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは25cmである。

(床) 全面に掘り方をもち、黒色土とシルトの混土を用いて構築した平坦な床面であり、貼り床等は認められない。

(柱穴) 床面の中央から若干西寄りに柱穴状のP₂が検出された。径25cmの円形で深さ17cmのビットで、粒状のシルトを若干含む黒色土の堆積土で柱痕は認められない。柱穴としての確証はない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の北寄りに位置する。燃焼部は壁外に張り出し、掘り方をもち、底および側壁と奥壁に黒褐色土を貼って構築しており、間口50cm、奥行50cmで、煙道、煙出しは認められない。

(その他の施設) カマドの右前にP₁が検出された。径35cm×50cmで7cmの深さを計り、黒色土と焼土を堆積土にもつ、確証はないが貯蔵穴的な性格も考えられる。

出土遺物 (第60-2図 第42表)

坏形土器(C類) 1点、壺形土器2点、鉄製品3点、砥石3点、計9点の実測。他に土師器壺の破片が多く出土しているが、総じて非ロクロ成形のものが目立つ。坏形土器はNo.1の他にB・C類の細片が各1点ずつある程度で、A類は出土していない。須恵器の壺も見当らない。また、鉄製品は床面を中心として5点出土しているが、図示したのは3点だけである。なお、鉄製品・砥石については下表を参照して頂くこととし、ここではNo.1・2・3の土器についてのみ詳細を記す。

No.1はカマド内出土のC類坏。反転復元に依る実測である。推定口径16cm位で底部が欠失している。数片の接合による遺物であり、内黒部分と非内黒部分とがある。この範囲は各々の破片に依って区別されるが、より燃焼部に近い出土をみせる破片が非内黒である。外面のロクロナデ痕は明瞭であり、内面のヘラミガキは丁寧である。

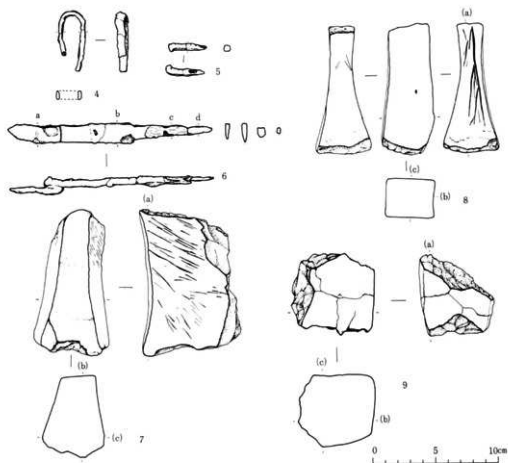
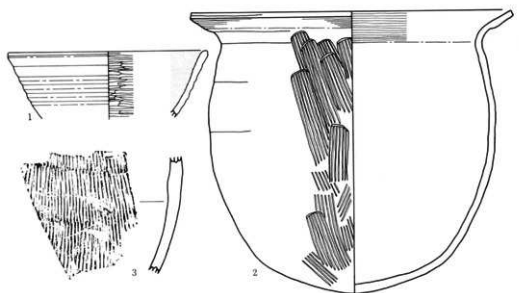
No.2は丸底の球胴壺。口径26cm、器高22.5cm、頸径21cm、最大胴径22.9cm大である。内外面

第43-1表 鉄 製 品 一 覧

実測区番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
4	一	鐮状製品	一部欠失	比較的良好	48.50	6.50	3.30	4.30	長方形	(1層)
5	一	角釘	完形品	比較的良好	30.50	5.50	5.90	1.25	方形	小型。(掘り方埋土)
6	190	刀子	ほぼ完形品	比較的良好	162.70	b→15.50 d→3.10	b→4.90 d→3.20	16.40	b→楔形 d→長方形	刃部が折れて重なっている。基部に本質残存。(深)
一	一	釘状破片	破片	不良	49.0	—	—	2.40	方形	(床面)
一	一	不明破片	破片	不良	30.30	—	—	0.75	長方形	小破片(床面)

第43-2表 砥 石 一 覧

実測区番号	写真番号	法 量 (mm・g)				使用面の数	色 調	材 質	産地・地質年代	備 考
		(a)長さ	(b)幅	(c)厚さ	重さ					
7	16	112.0	68.20	50.70	360.80	4	灰黄褐色(10YR・5)	函南石安山岩 燧岩塊	岩手火山群起源。葛根田付近。第四系	一見軽石様。(床面)
8	17	101.0	39.0	29.50	198.0	5	灰白(10YR・5)	斜長石流紋岩	雫石盆地西南部。中新統	(付着物あり。(堆積土)
9	18	65.0	65.50	54.50	299.30	3	明褐色(7.5YR・5)	輝石安山岩	岩手火山群起源。第四系	一破片



第60—2图 51号(Pi27)竖穴住居跡出土遺物

の口縁部をヨコナデシ、外面体部には縦位の刷毛目が施される。内面の調整は磨滅のため不明である。また外面の底部周辺には煤が付着しており、赤褐色化した火熱痕がある。

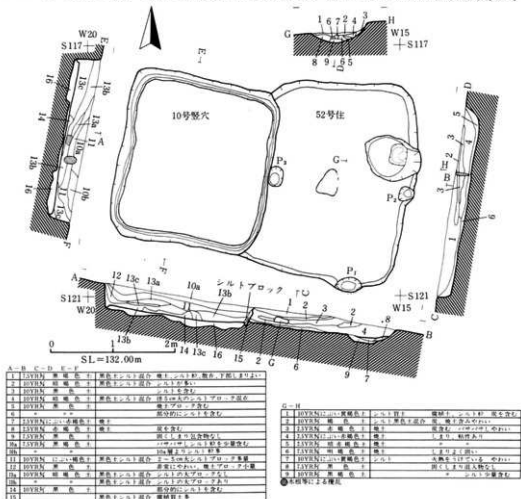
No.3は、土師器壺体部片の拓影図である。外面に縦位の叩目を施している。

52号 (Pj18) 竪穴住居跡 (第61図 写真図版31)

(重複 改築) 10号 (Pj21) 竪穴によって本竪穴住居跡の西壁が切られている。

(規模 平面形 方向) 東西2.3mの×3.1m、面積は約6.2m²を計り、やや歪んだ南北に長い長方形が推察される。カマド方向軸はN-100°-Eである。

(堆積土) 大別すると、黒褐色土、黒色土からなる。黒褐色土と暗褐色土は、黒色土とシルトの混合土で、更に、シルトのブロックを全般に含んでいる。堆積状況は各層が交互に入りこんでおり、東側と西側から流れこんだ様相を呈しており、5層・6層を除く各層は人為的な可



第61図 10号(Pj21)・52号(Pj18) 竪穴住居跡

能性がある。

(壁) 北壁と東壁は外傾し、南壁は直に近い立ち上がりを示す。検出面までの壁高は20cm～25cmを計る。

(床) 北西部分を除き掘り方が認められ、黒色土とシルトの混合土で構築したほぼ平坦な床面を呈する。床面中央には、30cm×40cmの範囲で焼土があり床面も火熱によって赤変している。

(柱穴) P₂とP₃は東西中軸線上に乗り、それぞれ東壁と西壁に近接する。P₂は径25cmの円形で深さ23cm、堆積土は黒色土とシルトである。P₃は径25cm×30cmの楕円形で深さ10cm、堆積土はP₂と類似する。いずれも柱痕は認められない。その位置と、対応して2.15mの間をもつ状況から柱穴と推察する。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の中央やや北寄りに位置し、壁内に径60cm×90cmの掘り方をもって燃焼部を構築しているが、袖は遺存せず、煙道、煙出しは認められない。

(その他の施設) 南東隅近くにP₁が検出され、径25cm×40cm、深さ20cmの規模で、暗褐色土を堆積土とし、瓦片を包含するが、性格は不明である。

床面中央に焼土と火熱痕を認めるが、地床炉としての施設か否かは明確ではない。

出土遺物

何れも破片のみの出土であり、図示出来るものはない。破片は土師器の瓦片でほぼ占められ、環形土器は僅かに回転糸切痕を有すB類底部片が1点みられる程度。また、他の器種や須恵器・鉄製品等は出土していない。

土師器瓦は底部に回転糸切痕(底径7.4cm)を残すロクロ成形片と、外面にヘラ削りや刷毛目を有する非ロクロ成形片に大別される。またロクロ使用の有無は判別されない例もあるが、長胴形と小型の瓦の二様があるようである。

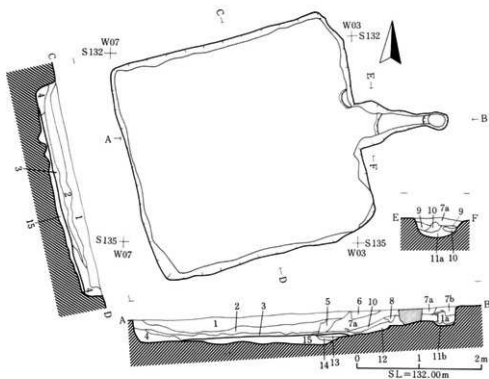
53号(Qe09) 竪穴住居跡 (第62図 第44表 写真図版32・69)

(重複 改築) 認められず。

(規模 平面形 方向) 東西3.7m、南北3.5m、面積11.54㎡のほぼ正方形に近い平面形を呈しており、カマド方向軸はN-85°-Eである。

(堆積土) 1層から3層の黒色土および黒褐色土は、ほぼ全域に近い広がりをもち堆積土の主体をなし、それぞれシルトを含むが、下層になるにしたがって量が多くなるとともに、炭、焼土も含まれる。遺物はカマド前のみで他はほとんどみられない。四壁ぎわでは黒色土とシルト混土の極暗褐色土4層がある。

(壁) ほぼ垂直に近い立ち上がりをもち、検出面までの高さは40cmほどを計る。



A-B	C-D	E-F	
1	15VR片	黒色土	面でしよりあり
2	"	"	シルト・灰若干、粗でゆわい
3	15VR片	黒褐色土	シルト多量、灰、焼土若干
4	15VR片	焼褐色土	黒色シルト混入
5	15VR片	黒褐色土	黒色シルト混入 遺物少量
6	10VR片	黒色土	シルト、灰若干混でしよりあり
7a	15VR片	黒褐色土	シルト黒色土混入 灰、焼土、遺物少量、ゆわい
7b	"	"	シルト黒色土混入 7a層よりシルト量少
8	15VR片	焼褐色土	シルト黒色土混入 シルト量多
9	15VR片	黒褐色土	シルト混入、灰、焼土若干
10	15VR片	焼褐色土	焼土、灰混入

A-B	C-D	E-F	
10a	5VR片	焼褐色土	灰多量、焼土、シルト若干混でゆわい
10b	"	"	11a層より灰少量
12	5VR片	"	焼土 灰混入、灰くしまる
13	15VR片	黒褐色土	黒色シルト混入 灰多量、灰くしまる
14	5VR片	焼褐色土	シルト焼土混入 灰若干
15	15VR片	黒褐色土	黒色シルト混入 焼褐色土

● 不明等に2層挿入

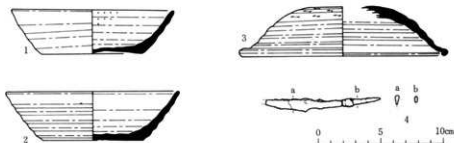
第62—1図 53号(Oe09)竪穴住居跡

(床) 全面の約3分の1ほどに相当する西壁寄り部分では地山シルトをそのまま床面とし、他は掘り方をもち黒色土とシルトの混土を用いて床面を構築している。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁のほぼ中央に位置する。燃燒部は壁外に掘り込み施設しており、間口60cm、奥行40cm程度で地山面が火床となっている。煙道は、火床から若干の段差で高くなり、ゆるやかな傾斜で煙出し方向に上がる様相を呈し、幅15cm～35cm、深さ20cm～25cmで長さ75cmほどの溝状である。煙出しの径は25cm×35cmで楕円状で、検出面からの深さ30cmほどで、底面は煙道底面より低くなる。なお、カマド前面には若干の掘りくぼみがありその上面に焼土の広がりか認められた。



第62—2図 53号(Qe09)竈穴住居跡出土遺物

(その他の施設) 認められない。

出土遺物 (第62—2図 第44表)

出土遺物の総量は少ないが、環形土器2点(A類)、須恵器蓋1点、鉄製品1点、計4点の実測。他に床面から土師器球胴片、カマド内から刷毛目を有す土師器片等が出土しているが、環形土器で明らかにロクロ成形と思われる例は無い。

環形土器については下表の通りである。No3は須恵器蓋でカマド内からの出土。反転復元に依るもので、推定径16.2cm位である。回転ヘラ削りに依って器面を整えている。

No4は堆積土内出土の鉄製品。刀子と思われる。刃部が欠損しており、残存長は9.1cm位しかない。刃部の断面は楔形、基部のそれは一回り小さい長方形を呈している。

第44表 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種類	切断し	調整柱法	調整部位	法 量 (cm)				$\frac{a}{b}$	$\frac{a}{d}$	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)					
1	191	A 類	ヘラ切	無調整	/	12.9	8.0	3.6	1.6	3.6	52.5	完形品。内外面カーボン付着。(カマド付近床面)	
2	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	8.0	3.9	1.7	3.5	53	(南壁際床面)	
3	—	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	16.2	—	—	/	/	/	体~口縁部片。(カマド内)	

54号 (Qe18) 竈穴住居跡 (第63図 第45表 写真図版32・33・69)

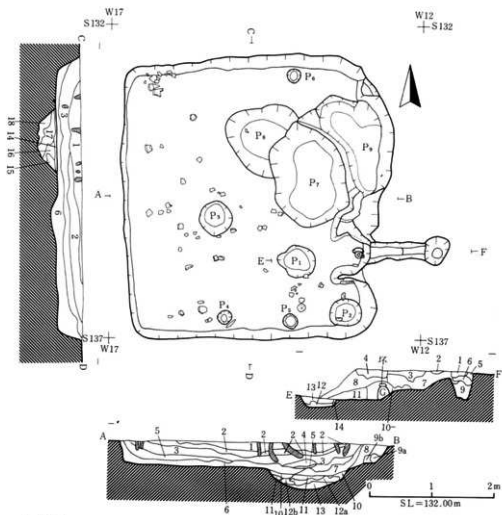
(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西4m、南北4.5m、面積15.17㎡のやや南北に長い長方形を呈する。カマド方向軸はN-88°-Eとなる。

(堆積土) 東半部分に木根等による攪乱が多い。全般に黒色土および黒褐色土を主体とする堆積土にシルト粒を含む。中で6層はシルト多量と小礫、焼土等を含む極暗褐色土である。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と推察される。

(壁) カマド以北の東壁が若干に張り出す。立ち上がりは垂直に近く、検出面までの高さは40cm～50cmを計る。

(床) 全面に掘り方をもち、シルトと黒色土の混合土を用いて床面構築をしており、凹凸を



A-C		D-E	
1	1AYRN 黒色土		シルト粘土層
2	1AYRN 黒褐色土		"
3	1AYRN 黒色土		シルト粘土層
4	"		黒土粘土層
5	"		"
6	1AYRN 粘結褐色土		シルト多量 中層 粘土層
7	1AYRN 黒褐色土		シルト粘土層
8	"		粘土、シルト少量
9a	1AYRN 粘結褐色土		シルト黒色土層
9b	"		シルト黒色土層
10	1AYRN 黒褐色土		シルト粘土層
11	1AYRN 粘結褐色土		シルト多量 粘土層
12a	1AYRN 黒色土		粘土粘土層
12b	"		粘土粘土層
13	1AYRN 粘結褐色土		粘土粘土層
14	1AYRN 黒褐色土		粘土粘土層
15	1AYRN 粘結褐色土		粘土粘土層
16	1AYRN 黒褐色土		粘土粘土層
17	"		粘土粘土層
18	1AYRN 粘結褐色土		粘土粘土層

E-F	
1	1AYRN 粘結褐色土
2	1AYRN 粘結褐色土
3	1AYRN 粘結褐色土
4	1AYRN 粘結褐色土
5	1AYRN 粘結褐色土
6	1AYRN 粘結褐色土
7	1AYRN 粘結褐色土
8	1AYRN 粘結褐色土
9	1AYRN 粘結褐色土
10	1AYRN 粘結褐色土
11	1AYRN 粘結褐色土
12	1AYRN 粘結褐色土
13	1AYRN 粘結褐色土
14	1AYRN 粘結褐色土

●粘土層による埋戻

第63-1図 54号(Qe18)竪穴住居跡

みるが顕著なものではなく、貼り床等は認められない。

(柱穴) 柱穴状ピットとして、南壁沿いに $P_4 \cdot P_5$ が北壁沿いに P_6 がある。それぞれの径と深さは、 P_4 25cm×20cm、16cm、 P_5 25cm×25cm、10cm P_6 20cm×25cm、8cmを計る。位置的には $P_4 \cdot P_5$ は南壁中央をはさんで1m間に対に壁に接してあり、 $P_5 \cdot P_6$ は、それぞれ南壁と北壁の東半中央に相対してある。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の南半中央に位置する。カマド構築の掘り方は認められず、燃焼部火床はほぼ平坦で奥壁近くに支脚石があり坏が伏せた状況で検出された。袖はシルトを主体にした構築土を用いている。火床から約15cmの段差で上がり煙道となり、幅25cm、長さ85cmほどの溝状で東にのびる。深さは燃焼部奥壁から50cm地点までは約30cm、以東は煙出しに向け高くなる傾斜をもつ。煙出しは径35cm×45cmの楕円形で検出面から40cm、煙道底面から30cmを計る。

(その他の施設) ほぼ同規模の $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ がある。それぞれの径と深さは、 P_1 50cm×60cm、10cm P_2 50cm×45cm、12cm P_3 55cm×55cm、15cm、堆積土はいずれも、黒褐色土に焼土と炭を含んでいる。性格は明確でないが貯蔵穴の可能性もある。

$P_7 \cdot P_8 \cdot P_9$ は、前3ピットより大型になり、それぞれの径と深さは、 P_7 120cm×180cm、20cm P_8 115cm× α cm、30cm P_9 140cm× α cm、15cmを計り、シルト混りの黒褐色土を堆積土とする。重複関係にあり、 P_7 が最も新しく、 P_8 と P_9 の先後関係は明瞭でなく、性格等は不明である。

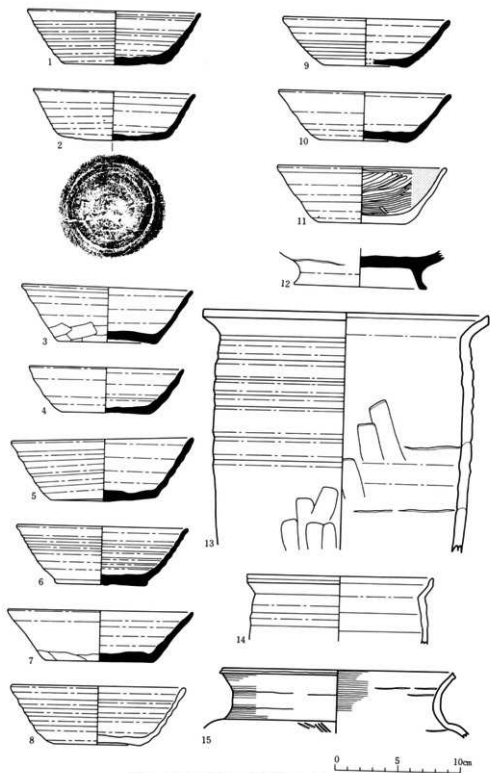
出土遺物 (第63-2・3図 第45表)

出土遺物は多く、組成も多様である。環形土器12点(台付坏1)、甕形土器3点、須恵器壺1点、鉄製品2点、砥石3点、鞠の羽口2点、須恵器拓影図1点、計24点を図示している。他に破片として土師質の蓋片、ヘラ切のA類底部片、須恵器甕体部片多数等がカマドや床面近くから出土している。

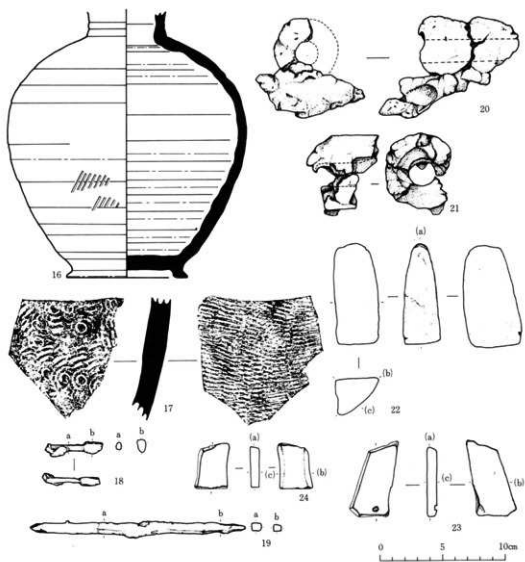
環形土器はA・B・C各類が出土しているが、圧倒的にA類が多い。切離しはNo8のB類とNo10のA類が回転糸切、No7のA類とNo11のC類は不明、他はヘラ切に依る。No12は脚径10.5cm、脚高1.1cm大の須恵器台付坏の破片である。付高台で、脚部と体部との接着面に亀裂が入っている。底部外面には回転ヘラ削りが施され、本来の切離しは不明である。

甕形土器はロクロ成形のNo13・14、非ロクロで球胴を呈すと思われるNo15の3点を図示。No15の下部に相当する破片はカマド内に相当量あるが接合されない。

No16は須恵器長頸壺。肩部の一部と頸部上方から口縁にかけての部分欠失している。頸径6.1cm、最大胴径18.2cm、脚径9.8cm大。体部中央よりやや下位に斜位の叩目が残る。叩目のある部分から底部直近までは、回転ヘラ削りが施される。脚部は付高台に依るもので、端部が外



第63—2图 54号(Qe18)竖穴住居跡出土遺物



第63—3図 54号(Qe18)竪穴住居跡出土遺物

側に向かって突出する。底部には同心円状のナデが入るが、中央部は指或いは布で軽く押し
ている。灰黒色を呈す硬質な焼成であり、断面の胎土は若干赤味がかかる。

No20・21の2点は甕の羽口である。一方の端部外面には溶鉄滓が付着しており、両者とも内
径が2cm以下である。No21は当遺構出土片であるが、No20は約半分が50号(Pg33)竪穴住居跡
出土、残りが当遺構出土の破片を接合したものである。またNo20は、炉壁の下部に取り付けら
れたものと思われ、羽口下に密着する溶鉄滓の下側表面には細かい砂粒が多量に付着している。
これらの他には多量の鉄滓が堆積土の各層から床面にかけて散在しているが、大きいもので

第45—1表 坏形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	切 断 面	調整 技法	調整 部位	法 量 (cm)			$\frac{a}{b}$	$\frac{a}{d}$	備 考		
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)					
												最大径	
1	A	類	ヘラ切	無調整	/	13.7	8.0	4.3	1.7	3.2	56	完整品。(床面)	
2	192	A	類	ヘラ切	無調整	/	12.8	9.0	4.0	1.4	3.2	59.5	底部付近B類の色調(7.5YR5/浅黄橙)(床面)
3	193	A	類	ヘラ切	手持ヘラ磨り	下部下端 ~底部	13.6	7.8	4.5	1.7	3.0	56	内面にカーボン若干付着。(増積土)
4	A	類	ヘラ切	無調整	/	(12.2)	7.0	3.6	1.7	3.4	54	磨減顯著。(増積土)	
5	194	A	類	ヘラ切	無調整	/	14.5	8.4	4.9	1.7	3.0	59.5	底部中央B類の色調(2.5Y5/にぶい黄)(増積土)
6	A	類	ヘラ切	無調整	/	(13.6)	7.0	4.7	1.9	2.9	54.5	(床面直上)	
7	195	A	類	調整のため不明	手持ヘラ磨り	下部下端 ~底部	(14.6)	8.6	4.1	1.7	3.6	53	(床面)
8	B	類	回転糸切	無調整	/	(13.8)	7.0	4.7	2.0	2.9	54	磨減顯著。(増積土)	
9	A	類	ヘラ切	無調整	/	(13.2)	(6.6)	3.8	2.0	3.5	49	内外面にカーボン付着。(床面)	
10	A	類	回転糸切	無調整	/	(13.6)	7.0	3.9	1.9	3.5	49.5	(床面+増積土)	
11	C	類	調整のため不明	手持ヘラ磨り	底 部	13.3	7.0	4.5	1.9	3.0	55.5	磨減。(カマド内)	
12	台付子		調整のため不明	回転ヘラ磨り	底 部	—	(口径) 10.3	(器高) 1.8	/	/	/	/	底部片。(P ₁)

第45—2表 甕形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面 調整		内面 調整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
13	—	土師器	(23.0)	—	—	—	ロクロナゲ	スラックス磨	ロクロナゲ	一部ヘラナゲ	反転産元。浅黄橙色。(カマド+ビット内)
14	—	土師器	(15.0)	—	—	—	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	小型ロクワ。 (東側ビット内出土)
15	—	土師器	(18.9)	—	—	—	ヨコナゲ	刷毛目	ヨコナゲ	不 明	反転産元。球胴形。(Q ₁ 掘り方増積土)
17	—	須恵器	拓影図。体部片。外面積位の印目。内面青海波文を施す。(増積土)								

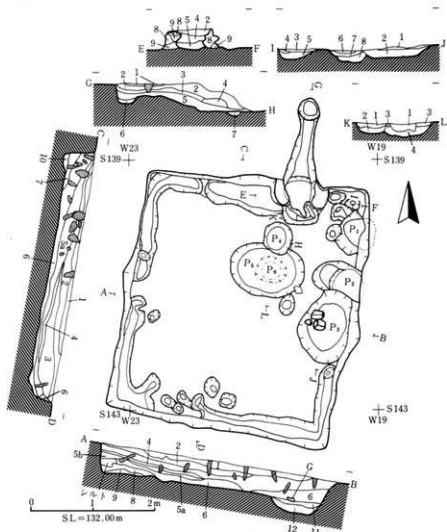
第45—3表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	残 存 部位	遺 存 状態	法 量				断面 形状	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
18	—	不 明	破片?	やや不良	46.0	a---6.10 b---10.20	a---4.0 b---7.0	4.25	a---方形	(増積土)
19	—	釘 状	ほぼ完成品	比較的良好	173.50	a---7.20 b---6.20	a---9.0 b---7.0	26.20	方 形	(増積土)

第45—4表 砥 石 一 覧

実測図番号	写真番号	法 量 (mm・g)				使用面 の 数	色 調	材 質	産地・地質年代	備 考
		(a) 長さ	(b) 幅	(c) 厚さ	重さ					
22	19	81.0	42.20	26.0	55.20	4	灰 白 (2.5Y・5/)	白砂細粒凝灰岩	宇石盆地南部(新所)。上部中新統	三角形。軟質。(床面直上)
23	20	54.90	29.0	7.80	24.50	6	にぶい黄橙(10YR・5/)	石質細粒凝灰岩	宇石盆地西・南部。中新統	孔の作りかけ。
24	21	33.50	23.90	6.20	12.0	4	暗灰黄(2.5Y・5/)	粗粒玄武岩	宇石盆地西・南部。中新統	薄手。

16×11cm位、しかも片面が丸味を持つ皿状を呈するものである。この種の形態を有す鉄滓は、凸状に丸味を持つ側に砂や細石が付着しているのが一般的である。また、炉壁の細片も若干み



A-B C-D

1	10YR/5 黒色土	
2	*	シルト若干と遺物含む
3	10YR/7	*
4	10YR/5	砂状のシルト含む
5a	Y	*
5b	*	ブロンズ片のシルトを含む
6	*	シルト、遺物含む
7	10YR/7	*
8	10YR/5	シルト若干を含む
9	10YR/5	シルト混入
10	10YR/5 暗褐色土	シルト 炭酸土混入
11	5YR/5 黒褐色土	シルト若干を含む
12	5YR/5	焼土、シルト若干、遺物含む

K-L

1	焼土黒色土混合	炭、シルト若干
2	10YR/5 黒褐色土	シルト、砂多量
3	焼土シルト混合	炭末か
4	5YR/5 暗赤褐色土	シルト若干と焼土混入

●本図等による推定

E-F G-H

1	5YR/5 黒褐色土	焼土、シルト若干
2	5YR/5 暗赤褐色土	焼土
3	5YR/5 黒褐色土	部分的に焼土多量に混入
4	5YR/5	焼土、シルト粒状に混入
5	5YR/5 暗赤褐色土	炭混入
6	5YR/5 黒褐色土	焼土若干混入
7	5YR/5 暗赤褐色土	黒色シルト混合 焼土混入
8	10YR/5	シルト
9	10YR/5 黒色土	シルト質土 * 焼土混入

I-J

1	5YR/5 黒褐色土	A-B C-Dの11層と同土
2	5YR/5	* 12層と同土
3	5YR/5 暗赤褐色土	焼土、炭若干、遺物含む
4	10YR/5 黒色土	砂
5	5YR/5 暗赤褐色土	焼土
6	5YR/5 黒褐色土	砂質土多量、炭若干、遺物含む
7	5YR/5	焼土、シルト含む
8	5YR/5	焼土、シルト粒状に含む
9	5YR/5 暗赤褐色土	焼土

第64-1図 55号(Qg24)竪穴住居跡

られる。

砥石は小型のもの3点。No22は床面、他は堆積土からの出土である。

55号 (Qg24) 竪穴住居跡 (第64図 第46表 写真図版33・70)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北4.1m、面積11.55㎡のほぼ正方形の平面形を呈する。カマド方向軸はN-8°-Eである。

(堆積土) ほぼ黒色土による堆積土で、シルトの混入量による若干の差はあるが大きな差異は認められなくレンズ状の堆積である。

(壁) 東壁でやや外傾するが、他はほぼ垂直に近い立ち上がりである。検出面までの高さは40cm~45cmを計る。

(床) 掘り方は認められず、地山シルトをそのまま床面としており、竪穴住居跡の北東部のピット埋土上面等には、シルト混りの黒色土等による貼りがみられる。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 北壁のカマド以東と東壁北半のピット施設部分を除き認められた。幅25cm、深さ10cm内外を計り西壁中央で切れる部分がある。

(カマド) 北壁の東半中央に施設され、カマド構築のための掘り方は特になく、燃焼部火床は若干くぼむ程度で、間口40cm、奥行50cmほどで、袖はシルトを用いている。燃焼部火床から若干上がって煙道となり、幅30cm~50cm、深さ17cm~30cm、長さ100cmの溝状で北にのび煙出しとなる。煙出しは径33cmの円筒状で、底面は煙道より若干の段差で低い。

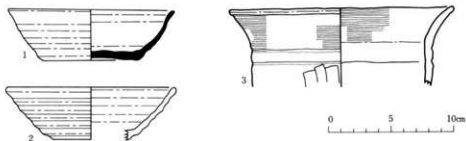
(その他の施設) P₁~P₆が検出された。それぞれの径と深さは以下の通りである。P₁ 70cm×60cm、16cm P₂ 60cm×92cm、23cm P₃ 80cm×113cm、18cm P₄ 45cm×50cm、15cm P₅ 84cm×120cm、20cm P₆ 40cm×50cm、11cmを計り、堆積土は、焼土に黒褐色土や炭を混入する暗赤褐色土を主体に、いずれも土器を包含している。重複はP₂とP₃、P₄とP₅、P₅とP₆とがあり、それぞれで新しいのはP₃・P₄・P₆であり、更にP₁も含めた各ピットは、P₆を除き上面が薄く貼られている。これらのピットは貯蔵穴の可能性があり、特にP₁~P₃は強い。

出土遺物 (第64-2図 第46表)

環形土器2点、壘形土器1点、計3点の実測。他に外面に叩目を有す土器器体部片、非ロクロ片等が多数出土している。非ロクロ成形の体部片は外面をヘラ削り、内面にヘラナデするものが多く、ロクロ成形片よりは相対数が多い。

環形土器A・B類については46表を参照されたい。

No3の土器器壘は堆積土中出土。反転復元図であるが推定口径は23cm位。内外面の口縁部を



第64—2図 55号(Qg24)竪穴住居跡出土遺物

第46表 坏形土器一覽

大塚区番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	197	A 類	回転糸切	無調整		13.2	7.4	4.2	1.8	3.1	53	(床面+P, 増積土)
2	—	B 類	底部残存小		—	(13.4)	(6.0)	4.2	2.2	3.2	48.5	(P, 増積土)

ヨコナデ、外面体部にヘラ削りを加えている。肩部分は明瞭ではないが、沈線様の境界がある。

56号 (Rh06) 竪穴住居跡 (第65図 第47表 写真図版33・34・70・71)

(重複 改築) カマドの移築があり、旧カマドのNo1と新カマドのNo2がいずれも東壁南半にあって、No1の北隣りにNo2カマドが構築されている。

(規模 平面形 方向) 東西6m、南北6.3m、面積33.06m²のほぼ正方形の平面を呈する。カマド方向軸はN-90°-Eである。

(堆積土) 黒褐色シルト質土および黒色土が主体で1層から4層に分けられるが、東西断面ではレンズ状を示し、南北断面では2層の黒色土が1層の黒褐色シルト質土を覆う状況を示しており、1層と2層はあまり時間差のない堆積と推察されるが、攪拌もなく混入物等からも人為的な様相はない。

(壁) ほぼ垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは30cm~35cmを計る。

(床) 全面掘り方をもち、黒色土とシルトをたたきこみ固めて床面を構築しており、厚さは壁近くで約20cm、中央では5cmほどで床下砂質シルト面は凹凸が顕著である。

(柱穴) P₁~P₄が柱穴である。P₁とP₄は竪穴住居跡の北半で平面对角線上に乗り、P₁は西壁および北壁上端から、それぞれ1.5mと1.8mあり、P₄は東壁および北壁上端から、それぞれ1.5mと1.8mを計る位置にある。P₂・P₃は南壁に接し、P₂は西端からP₃は東端から、それぞれ1.5mの位置にあり、P₁とP₄、P₂とP₃間は3mを、P₁とP₂、P₃とP₄間は4.2mを計り対称をなしている。

柱穴規模は、径、深さの順に、P₁ 40cm×50cm、40cm P₂ 35cm×35cm、54cm P₃ 35cm×40cm、54cm P₄ 45cm×60cm、48cmを計り、平均径は42.1cmの円もしくは楕円の平面形で、深さの平均は49cmである。堆積土は、P₁～P₃では黒色土を、P₄は汚れた砂質土が主体で柱痕は不明であった。なお、P₁・P₃は床面で確認し、P₂・P₄は黄褐色砂質シルトに覆われ、その下で確認した。

(周溝) 南東隅を除く壁沿いに認められる。幅15cm～20cm、深さ15cmほどを計る。

(カマド) No 1 カマド 東壁南半の中央に位置し、煙道と煙出しのみ遺存する旧カマドで、煙道は燃焼部から立ち上がり煙出し方向に傾斜し下がる。幅30cm、深さ10cm～35cm、長さ130cmの溝状で、煙出し部との区別はない。

No 2 カマド No 1 カマドの北に隣接し、壁内に本体をもつ。燃焼部は間口60cm、奥行70cmで火床面は住居跡床面とほぼ同レベルであり、下にはNo 1 カマド期の周溝が認められた。袖はシルトを盛り固め構築しており、煙道、煙出しはNo 1 カマドと類似する形態をもつが、煙出し部が楕円状を呈し区別される。幅30cm～40cm、深さ13cm～35cm、長さ145cmを計る。

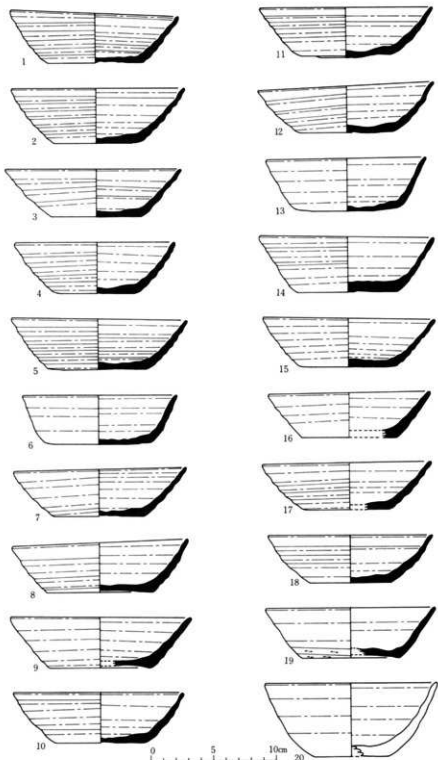
(その他の施設) 間仕切りと推察される溝₁～溝₃がある。溝₁は幅25cm、深さ18cm、長さ100cmあり、溝₂は幅30cm、深さ16cm、長さ120cm、溝₂の東端から直角に北に走る溝₃は、幅20cm、深さ16cm、長さ100cm、溝₄は幅50cm、深さ16cm、長さ180cmを計り、溝₅は幅20cm、深さ20cm、長さ100cmある。

以上のようにほぼ同規模の溝で、配列をみると溝₁と溝₃は柱穴P₁とP₄を結ぶ線上に乗り、北壁の上端から約165cm南で東西方向壁に平行し、溝₁は柱穴P₁と連結し、溝₃も柱穴P₄と連結した可能性がある。したがって、住居跡北半を溝₁と溝₃で区切った一面があり、更に溝₂は南壁上端から165cm北で東西方向壁および溝₁に平行し、溝₂東端から直角に北に走る溝₃は、柱穴P₁とP₄を結ぶ線上に乗り南北方向壁に平行する。すなわち、住居跡西半の中央で溝₁～溝₃によって区画される部分がある。溝₄は南壁上端から約110cm北に東西方向壁に平行し、柱穴P₂とP₃間に位置し、間仕切り溝かと推察するが、他溝との関連は明確でない。

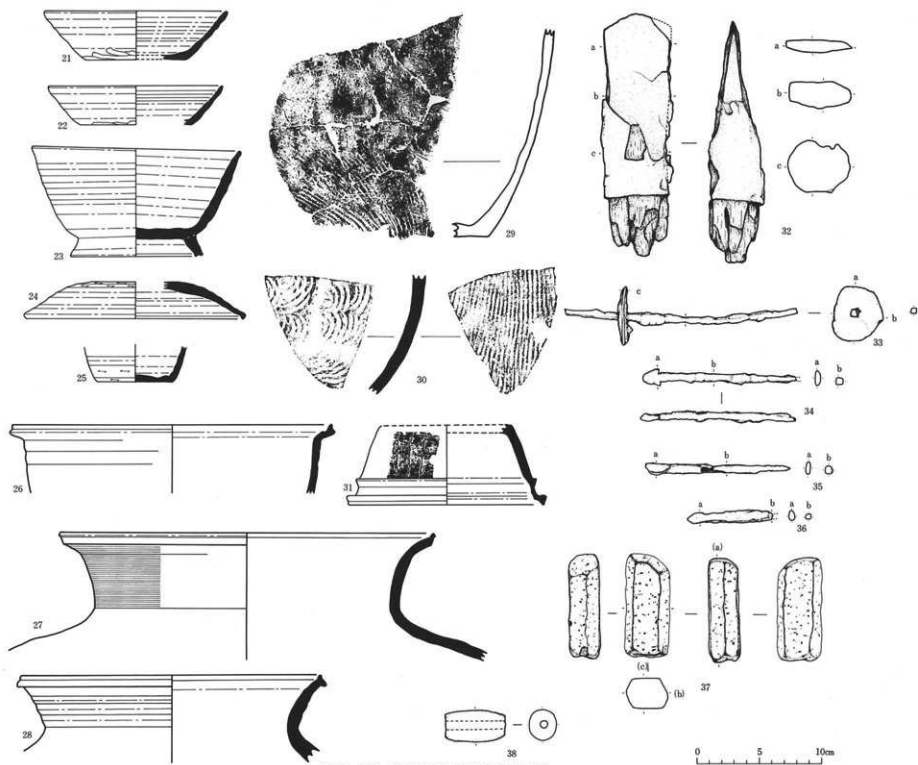
貯蔵穴様ピットとしてP₅～P₇が認められた。P₅は溝₅と東壁の交点となる北東隅に位置し、径50cm×60cm、深さ20cm、堆積土は黒褐色土と褐色シルトである。P₆は南東隅にあり、径70cmの不整形円で深さ10cmあり、黒褐色土と焼土混りの堆積土が主体である。No 2 カマド左袖下にあるP₇は、径55cm×95cmの楕円形で深さ15cm、焼土混りの黒色土と焼土を堆積土にもち土器片を多く含む状況からみて、No 1 カマド期に属するものと断定できるが、P₅とP₆は明確にしない。

出土遺物 (第65-2・3図 第46表)

環形土器24点(台付坏1)、須恵器蓋1点、甕形土器2点、鉢形土器1点、土師器甕・須恵器



第65—2图 56号(Ah06)竖穴住居跡出土遺物



第65—3图 56号(Rh06)竖穴住居跡出土遺物

焼拓影図各1点、土鍾1点、円面硯1点、鉄製品5点、砥石1点、計38点について図示している。

これらの他には、非ロクロ土師器片・木葉底部片等がカマド焚口周辺にみられ、貼床下からはロクロ成形の土師器片が出土している。また、坏形土器はA類が主であるが、焼土ピット内出土の破片はいわゆるくすべ色を呈すものが少なく、白橙色片が多い。

第47-1表 坏形土器 一覧

実測番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			h ₁ /b	h ₂ /d	外傾角度(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	198	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.5	7.6	4.3	1.8	3.1	51	完形品。(床面)
2	199	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.8	6.6	4.4	2.1	3.1	48.5	完形品。底部外面に軽いナデ。(床面)
3	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	14.0	7.2	3.8	1.9	3.7	50	完形品。底部外面に軽いナデ。(面)
4	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	12.7	6.0	4.1	2.1	3.1	52	完形品。底部外面軽いナデ。内面に赤色付着物。(カマド焚口増積土+床面中央積土)
5	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	14.0	8.0	4.2	1.8	3.3	50.5	完形品。底部外面に軽いナデ。(床面)
6	300	A 類	ヘラ切	無調整	/	12.3	8.4	3.9	1.5	3.2	61.5	(P ₁ 内)
7	301	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.8	7.2	3.9	1.9	3.5	49	底部外面軽いナデ。口縁若干の歪み。(床面+カマド焚口増積土)
8	302	A 類	ヘラ切	無調整	/	14.0	8.4	4.3	1.7	3.3	56	底部外面中央凸部のみナデ(床面)
9	303	A 類	ヘラ切	無調整	/	14.4	8.0	4.1	1.8	3.5	50	歪曲。縦位の亀裂をナデで補修。(P ₁ 付近)
10	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.6	7.2	4.1	1.9	3.3	53	(床面)
11	204	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.8	7.2	4.0	1.9	3.5	48	歪みあり。種器作り。(カマド軸+焚口部埋土)
12	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	14.1	7.4	4.0	1.9	3.5	50	歪曲。(カマド焚口増積土)
13	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	12.7	8.4	4.3	1.5	3.0	62	多量のカーボン付着。(床面+増積土)
14	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.9	8.0	4.6	1.7	3.0	55.5	(床面)
15	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.7	7.6	4.0	1.8	3.4	50	(カマド軸+焚口部増積土)
16	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	12.9	7.6	3.7	1.7	3.5	54	(床面+増積土)
17	-	A 類			底部残存小	13.5	6.6	3.8	2.0	3.6	48.5	(増積土)
18	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.2)	6.4	3.9	2.1	3.4	48	底部外面に軽いナデ。(床面)
19	-	A 類	調整のため不明	手付ヘラ削り	体部下端~底部	(13.4)	(7.8)	4.0	1.7	3.4	54.5	(床面+増積土)
20	-	B 類	回転糸切	無調整	/	(13.6)	(6.0)	5.9	2.3	2.3	57	(増積土)
21	-	A 類	調整のため不明	手付ヘラ削り	体部下端~底部	(14.6)	(8.0)	3.9	1.8	3.7	49.5	(P ₁ 付近+増積土)
22	-	A 類	底部残存小	手付ヘラ削り	体部下端	(14.0)	(9.0)	3.1	1.6	4.5	51.5	(床面焼土中)
23	-	台付杯	ヘラ切	回転ヘラ削り	底 部	16.6	$\frac{8.0}{10.4}$	$\frac{8.0}{10.4}$	/	/	/	(床面)
24	205	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体 上 部	(17.4)	-	-	/	/	/	体上~口縁部片。(床面+南カマド焚口部)

甕形土器は須恵器2点と土師器(No29)・須恵器(No30)の拓影図を示した。No27(床面出土)・28(カマド付近堆積土内出土)は胴部が膨らむ球胴の甕である。何れも反転復元に依る。肩部の反り具合はNo28の方が強く、口唇の作りも異なる。No26は鉢形を呈す。薄手で硬質の須恵器である。推定口径26cm前後、煙道内からの出土である。No29は体部下端に叩目を有す土師器甕。上位にはダイナミックなヘラ削りが加えられ、器面の一部に煤状を呈す黒変部がある。No26に近い煙道内出土。No30は床面出土。外面に縦位の平行叩目、内面に青海波文を施す。

No31は円面硯。硯面を欠く台脚部分の破片である。台脚径は推定で16cm。台脚中央よりやや上位には窓の一部が残っているが全容は明らかではない。台脚部には6~11mm間隔で縦方向の沈線が配される。この間隔でいけば、透窓は3箇所にあったと推される。

No38は焼土中床直上出土の土鍾。長さ4.8cm、外径2.2~2.4cm大。中央貫通孔径は0.6cm前後である。

鉄製品は6点出土しているが、そのうちの5点を図示している。木質部も残存する鉄斧、紡錘車、鉄鏝等である。No32・34は出土層位が不明であるが、他については下記一覧表の如くである。

No37は砥石。堆積土中からの出土。やや偏平な六角柱形を呈しており、全面に何らかの使用痕が観察される。石英安山岩を素材とする。使用面の研磨量は少なく、部分的に残る凹部底面に至らない。

第47-2表 鉄 製 品 一 覧

写真(図)番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
32	鉄 斧	ほぼ完形品	比較的良好	193.0	a...54.0 b...51.0 c...51.20	a...10.80 b...24.30 c...49.50	632.0	木質残存。(No1カマド北軸下)	
33	紡 錘 車	ほぼ完形品	比較的良好	188.0	長径a...41.10 短径b...41.80 軸...4.20	c...3.50 軸...5.0	27.45	軸...方形 (軸直上)	
34	209 鉄 鏝	家端のみ欠失	比較的良好	123.0	a...13.10 b...5.70	a...5.0 b...5.50	10.40	a...柄鐮形 b...方形 鏝身長...14.0mm	
35	210 鉄 鏝	ほぼ完形品	やや不良	118.50	a...9.90 b...7.0	a...4.0 b...6.0	10.80	a...長柄円形 b...方形 鏝身部の形状はつきりしない。(床直上)	
36	一 鉄 鏝	家端部欠失	不 良	68.0	a...8.80 b...4.50	a...4.90 b...5.0	9.40	a...指円形 b...方形 鏝身長...14.0	
—	不 明	破 片	やや不良	47.0	27.20	—	7.80	偏 平 不整形な板状。(カマ出土ピット内)	

57号(Sj74) 竪穴住居跡 (第66図 第48表 写真図版34・71)

(重複 改築) 本竪穴住居跡北東隅からNo2カマド間を9号溝が走っていたものとみられるが、平面および住居跡堆積土中の断面も認められない。したがって、溝は住居跡よりも古いものと推定される。一方、住居跡に伴ない旧カマドのNo1、新カマドのNo2があり、カマドの移築と一部に貼りの新床面が認められる。

A-B C-D

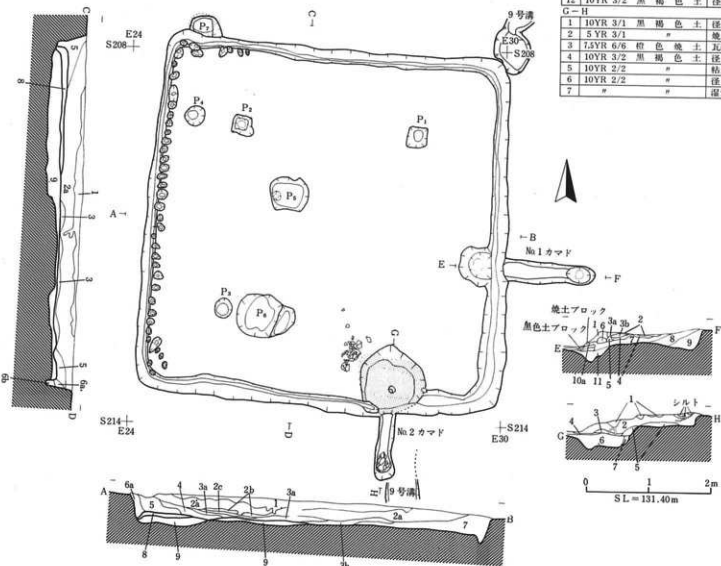
1	10YR 1/1	黒色土	粉状のヒス礫若干含む
2a	10YR 2/1	"	上部に粉状のヒスを含む
2b	"	"	シルト若干含む
3a	"	"	"
3b	10YR 1/1	"	"
3c	10YR 2/1	"	シルトを多く含む
4	10YR 2/1	"	"
5a	10YR 1/1	"	シルト若干含む
6a	10YR 2/1	"	"
7	10YR 1/1	"	多量の礫を含む
8	10YR 3/3	暗褐色土	黒色土とシルト混合 粘り床
9	10YR 2/3	黒褐色土	シルト混合、床礫層土

E-F

1	10YR 3/1	黒褐色土	シルト質土若干含む
2	10YR 1/1	黒色土	焼土若干含む
3a	10YR 4/3	黄褐色粘質土	"
3b	10YR 4/4	褐色シルト質土	"
4	10YR 3/1	黒褐色土	焼土多く含む
5	10YR 3/3	暗褐色土	焼土を含む
6	10YR 4/3	褐色シルト質土	"
7	10YR 3/1	黒褐色土	"
8	5YR 3/1	"	"
9	5YR 3/2	"	焼土、灰を含む
10a	5YR 5/8	明赤褐色焼土	灰を含む
10b	5YR 3/4	暗赤褐色焼土	灰若干含む
11	5YR 3/3	暗赤褐色土	黒色土と焼土混合、灰、礫含む
12	10YR 3/2	黒褐色土	径1cm内外の小礫と焼土を含む(G-H 4層相当)粘り床

G-H

1	10YR 3/1	黒褐色土	径1-2cmの小礫を含む
2	5YR 3/1	"	焼土と灰を含む
3	10YR 6/6	棕色焼土	灰礫状で固い
4	10YR 3/2	黒褐色土	径1cm内外の小礫と焼土を含む(E-F 12層相当)粘り床
5	10YR 2/2	"	粘土質土を含む 固い
6	10YR 2/2	"	径1cm-5cm大の礫を大量に含み上部に焼土、灰あり
7	"	"	湿気が多い



第66-1 図 57号(S74)竪穴住居跡

(規模 平面形 方向) 東西5.8m、南北5.75m、面積28.09m²、正方形の平面を呈し、カマド方向はNo 1カマドでN-90°-E、No 2カマドはN-184°-Eである。

(堆積土) 黒色土を主体にし含有物によって分けられる。中央部から壁ぎわ近くまで広がる1層と2層は、それぞれの下部と上部にブロックまたは塊状に粉状パミスを含み、床面に近い3層に土器片を含む、壁ぎわに流れこむ4層・5層・6層は前出各層より比較的シルトを混入し、東側から中央へ流れこむ7層は多量の礫を含む点で他層と異なる。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは25cm~30cmを計る。

(床) 南東部は検出面も礫混りの黒褐色土であるが、床面もこの黒褐色土をそのまま利用したもので、他は掘り方をもち、シルト混合の黒褐色土を用い床面構築をしたのがNo 1カマドのときと推察され、No 2カマド期では、北壁から西壁沿いに黒色土とシルトの混合土を、南東部では小礫と焼土混りの黒褐色土を貼って床面としたものと推察される。

(柱穴) P₁~P₆が柱穴である。その中でP₁~P₃は、各壁上端から1.3m~1.45m内側にあって住居跡平面の対角線上に乗り、P₁-P₂・P₂-P₃間は2.85m・3.0mを計る。なお、P₄はP₂の西0.8m、また、P₄の北1.5mの壁外に柱穴状ピットP₇がある。

それぞれの径と深さは、P₁ 径30cm×30cm、30cm P₂ 30cm×30cm、36cm P₃ 28cm×30cm、20cm P₄ 30cm×30cm、33cm P₇ 30cm×50cm、39cmを計り、P₁とP₂は方形を呈する。住居跡内の柱穴は貼り床上では明確に検出できなかった。

(周溝) 四壁沿いに幅15cm内外、深さ10cm~15cmで検出、貼床後も認める。西壁周溝沿いに径と深さ10cm内外で円もしくは半円状の壁土留杭跡と推察される小ピットを検出し、床構築土下で明瞭に確認されたが、その上から痕跡があった可能性もある。

(カマド) 東壁中央寄り南半にNo 1カマドがあり、本体は遺存せず巾35cm長さ100cmの溝状煙道と先端に楕円状の煙出しを認めた。一方、南壁東半中央にNo 2カマドが位置し、小形甕を伏せた支脚と瓦礫状の火床面を認めるが袖は遺存せず、幅25cm長さ100cmの溝状煙道があり煙出し部に長胴甕片が斜めに入っていた。No 1カマドの火床がわずかに遺存し、その上の貼り土がNo 2カマド火床下にもぐることからNo 2が新カマドと推察できる。なお、いずれも掘り方をもつ。

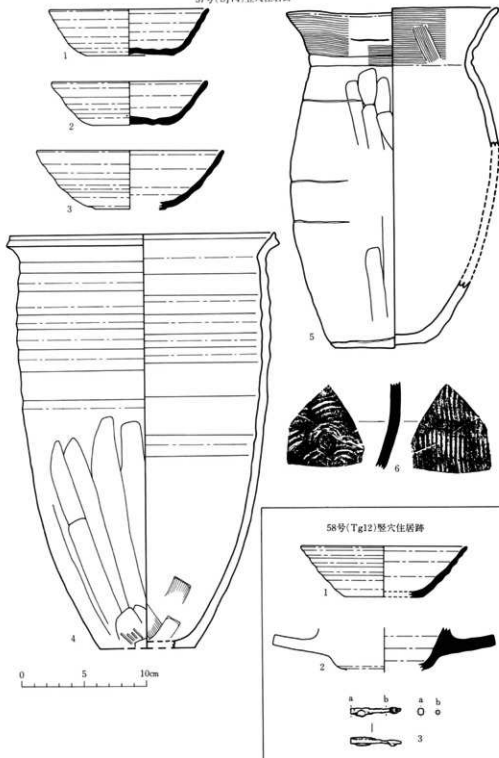
(その他の施設) P₅とP₆のピットを認めるが性格は不明である。

出土遺物 (第66-2図 第48表)

環形土器3点、甕形土器3点の実測。法量・調整技法等については48表の通りである。

なお、本遺構内からはいわゆる粉状パミスと呼ばれる火山灰が採集されている。1層と2層の中間に存在していたものである。当試料に関わる化学的分析や考古学的見地に於ける関連資料は別項を参照されたい。

57号(Sj74)竖穴住居跡



第66—2图 57号(Sj74)·58号(Tg12)竖穴住居跡出土遺物

第48-1表 坏形土器 一覧

写真 図番号	種 別	切 離し	調 整 注 法	調 整 部 位	法 量 (cm)			a ₁ /b	a ₂ /d	外 傾 角 (度)	備 考
					口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	A 類	ヘラ切	無調整		(12.6)	7.0	3.7	1.8	3.4	52.5	(床面下)
2	A 類	ヘラ切	無調整		(12.4)	6.0	3.5	2.1	3.5	47.5	(カマド東側)
3	A 類	底部残存小		—	(14.8)	(5.6)	4.7	2.6	3.1	45.5	

第48-2表 甕形土器 一覧

写真 図番号	種 別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
		口 径	底 径	器 高	最大傾	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
4	土師器	(22.0)	(7.6)	33.4	(20.5)	口縁ナデ	印 ナデ	口縁ナデ	下 ヘラナデ	反転復元。煤付着。(煙道内)
5	212 土師器	17.2	7.3 ~8.4	26.7	16.7	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	非口縁。歪曲。底外面にヘラナデ。頸部二条の洗刷痕。
6	須恵器	拓影図。外面印目、内面青濁文。(床面近く)								

58号 (Tg12) 竪穴住居跡 (第66-2・67図 写真図版34)

(重複 改築) 重複は認められないが、カマドの改築がある。すなわち、西壁南半の中央に旧のNo1カマド、東壁北半の中央に新のNo2カマドが検出された。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北4.2m、面積13.30m²の南北にやや長い長方形を呈する。カマド方向軸は、No1カマドでN-91°-W、No2カマドでN-89°-Eである。

(堆積土) 黒色土と黒褐色土を主体とする堆積土で、当初、南壁方向から主に堆積した様相が2層以下みられ、その上に1層が堆積し、しかも、1層は径1cm~7cm大の円礫を多量に含むことで他の層と大きな差異がある。

(壁) 北半は砂礫、南半は褐色シルトが壁面をなしていて、砂礫とシルト層の接点に竪穴が掘られたものである。壁は比較的垂直に近い立ち上がりで検出面までの高さは45cmを計る。

(床) 北半は地山砂礫面を南半では一部掘り方を認めるが地山シルトをそのまま床面とする部分が多い。南西部分ではNo1カマド焼土の散乱があり踏み固めて床面としている。

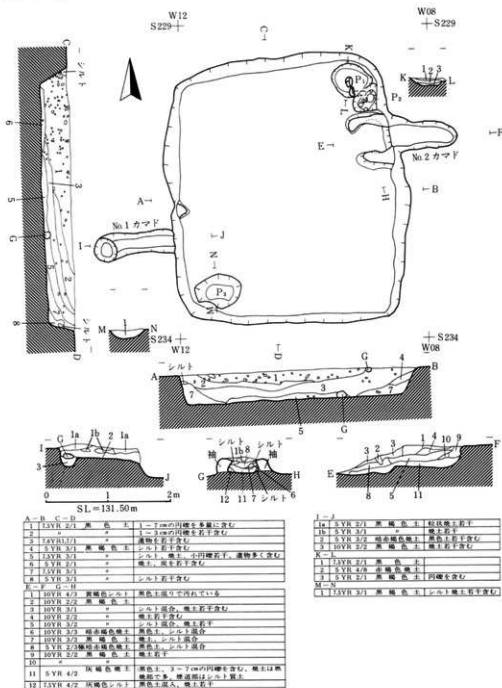
(柱穴) 認められない。

(溝溝) 認められない。

(カマド) No1カマド 西壁南半の中央に施設された旧カマドであり、煙道、煙出しのみで他は痕跡を残さない。煙道底面は床面より約20cm上がり、幅35cm、深さ18cmで溝状に127cm西へほぼ水平にのび煙出しとなる。煙出しは、径35cm×40cm、深さ30cmを計り、底面は煙道底面より13cm低くなる。

No2カマド 東壁の北半中央に施設された新カマドである。カマド構築の掘り方はなく、燃

焼部の火床はほぼ平坦で間口40cm、奥行50cmあり、袖はシルトを主体に用いて構築している。煙道は火床から若干上がり、幅40cm、深さ30cmで長さ106cmの溝状で東にのびるが、煙出しとの区別はない。



第67図 58号 (Tg12) 竪穴住居跡

(その他の施設) $P_1 \sim P_3$ がある。 P_1 は径54cm×64cmの楕円で10cmの深さをもち、赤褐色焼土を主体にその上下層に黒色土の堆積土をもつ。 P_2 は径35cm×50cmの楕円で深さ10cmを計り、焼土を含む黒色土を堆積土とし瓦破片の細片を含む。これらの3ピットは、北東隅の $P_1 \cdot P_2$ がNo 2カマド期の貯蔵穴で、堆積土が互層状の P_1 が先で、 P_2 が後になると推察できる。南西隅の P_3 は、No 1カマド期の貯蔵穴とみられる。

出土遺物 (第66-2図)

A類環1点、双耳環1点、鉄製品1点、計3点の図示。

No 1のA類は南東隅ピット内出土。反転復元に依るもので、推定口径13.4cm、同底径6.2cm、同器高4.1cmの大きさである。

No 2は須恵器の双耳環。取手部分と体部の破片である。残存部下端に稜を呈す部分が僅かながらも有ることから台付の器種になるかもしれない。外面は取手下部より下端まで灰かぶりが見られるが、内面はロクロナダの素地がそのまま残る。灰色を呈すいわゆるA類の環と同様の色調である。断面にみる胎土も器面と同色であり、やや石英細粒の混入が目立つ。

No 3は床面出土の鉄製品である。残存長4cmで方形の断面を呈す。角釘の類と思われる。

59号(Tj21) 竪穴住居跡 (第68図 第49表 写真図版35・71)

(重複 改築) 他遺構との重複はない。カマドの改築があり、北壁に旧のNo 1カマド、南壁に新のNo 2カマドがある。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北3.8m、面積11.22m²の正方形を呈する。カマド方向軸はNo 1カマドでN-6°30'-E、No 2カマドでN-182°-Eである。

(堆積土) 2層・3層の黒色土と黒褐色土が主体となり、前者には小礫を含み後者にはシルトを少量含む、壁ぎわには混りの少ない黒色土の6層があり、概ね以上の三大別の堆積土になる。

(壁) 壁はほぼ垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは20cmである。No 2カマド部分を除く壁沿いに周溝があり、その底部に土留施設の杭跡と推察される小穴が認められる。

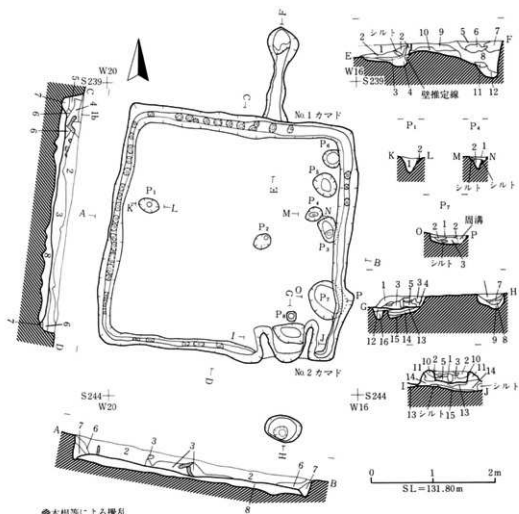
(床) 全面に掘り方をもち、シルトと黒色土の混土を用い構築したほぼ平坦な床面を呈する。

(柱穴) $P_1 \sim P_6$ 、 P_7 の7ピットが柱穴状であるが、位置上から柱穴の可能性をもつのは P_1 と P_4 である。それぞれ、西壁と東壁の中点近くで壁から60cm~65cm内側にあって対となり、2.7mの間をもつ P_1 は径24cm×30cm、深さ24cm P_4 は径22cm×24cm、深さ20cmを計り、柱痕は確認できない。

(周溝) No 2カマド部分を除く各壁沿いにあり、幅15~20cm、深さ10cm内外を計る。底面には土留施設の杭痕とみられる径10cm内外で深さ5cmほどの小穴が検出され、西壁沿いでは特に

密に検出された。

(カマド) No1カマド 北壁の東半中央に位置し、煙道、煙出しのみ残る。煙道底面は煙出しに向って傾斜し下がり幅15cm~35cm、深さ10cm~35cm、長さ100cmの溝状で、煙出しは径45



●木根等による擾乱

A-B C-D

1a	1.0V/R片	黒褐色土	毛根あり、シルト層
1b	"	"	毛根あり
2	1.0V/R片	黒色土	毛根あり、小礫含む
3	1.0V/R片	黒褐色土	シルト小礫含む
4	1.0V/R片	黒褐色土	毛根とシルトを含む
5	1.0V/R片	黒褐色土	黒色土を含む
6	1.0V/R片	黒色土	"
7	1.0V/R片	黒褐色土	シルトを含む
K-L			
1	1.0V/R片	黒色土	シルト小礫含む
2	1.0V/R片	黒褐色土	"
M-N			
1	1.0V/R片	黒色土	焼土粒を含む
2	1.0V/R片	黒褐色土	"

E-F

1	1.0V/R片	黒褐色土	粗粒焼土若干、灰土含む
2	1.0V/R片	黒色土	灰、焼土、シルトを散在に含む
3	1.0V/R片	黒褐色焼土	黒色土と若干、土層の含む
4	1.0V/R片	黒色土	シルト粒面を含む
5	1.0V/R片	黒褐色土	毛根、焼土少量を含む
6	1.0V/R片	黒色土	毛根あり
7	1.0V/R片	黒褐色土	毛根あり、シルトを若干、灰土を含む
8	1.0V/R片	黒褐色焼土	焼土粒面を含む
9	1.0V/R片	黒褐色焼土	灰、粗粒のシルトを含む
10	1.0V/R片	黒褐色シルト	焼土粒面を含む
11	1.0V/R片	黒色土	焼土を含む
12	1.0V/R片	黒褐色土	"
G-H I-J			
1	1.0V/R片	黒色土	焼土、シルト粒面を含む、土層あり
2	1.0V/R片	褐色焼土	焼土とアロー、黒色土を含む
3	1.0V/R片	褐色焼土	焼土とアローを含む、土層あり
4	1.0V/R片	黒褐色焼土	焼土を含む
5	1.0V/R片	黒褐色シルト	焼土、灰を含む
6	1.0V/R片	黒色土	シルト、焼土、炭灰を含む
7	1.0V/R片	"	シルト若干
8	1.0V/R片	"	シルト若干
9	1.0V/R片	褐色シルト	焼土を含む
10	1.0V/R片	黒色土	焼土少量を含む
11	"	"	"
12	1.0V/R片	黒色土	灰、粗粒の焼土、シルトを含む
I-J			
1	1.0V/R片	黒褐色土	焼土粒面に焼土を含む、土層あり
2	1.0V/R片	"	シルト、焼土少量、土層あり
3	1.0V/R片	黒褐色焼土	焼土、灰を含む

第68-1図 59号 (T21) 竪穴住居跡

cm×50cm、深さ55cmを計る。

No 2 カマド 南壁東端に位置し、燃焼部は掘り方をもち、火床は間口45cm、奥行50cmほどであり、袖はシルトを主体に用い構築している。煙道は認められず、燃焼部の南約100cmに径40cm×50cm、深さ20cmのピットがあり、位置的に煙出しの可能性もある。漆紙の出土をみた。

(その他の施設) No 2 カマドの左袖北に、壁に接してP₇がある。径55cm×60cm、深さ14cm、焼土と炭を粒状に含む黒褐色土と極暗褐色土を堆積土とし、甕の破片を含む。貯蔵穴の可能性はある。

出土遺物 (68-2・3図 第49表)

坏形土器4点、須恵器蓋1点、甕形土器5点(拓影図1)、鉢形土器1点、鉄製品2点、砥石1点、計14点の実測。

坏形土器は回転糸切に依る切離しのものが多く、他に同種の底部片が床面に散在する。ただし、C類は1点のみみられない。

甕はロクロ成形のみ図示しているが、破片としては木葉底部片・内外面刷毛目を有す土器片等が少量ながらも床面にみられる。また、底径7.3cm大の土師器でヘラ切痕を有すものもある。

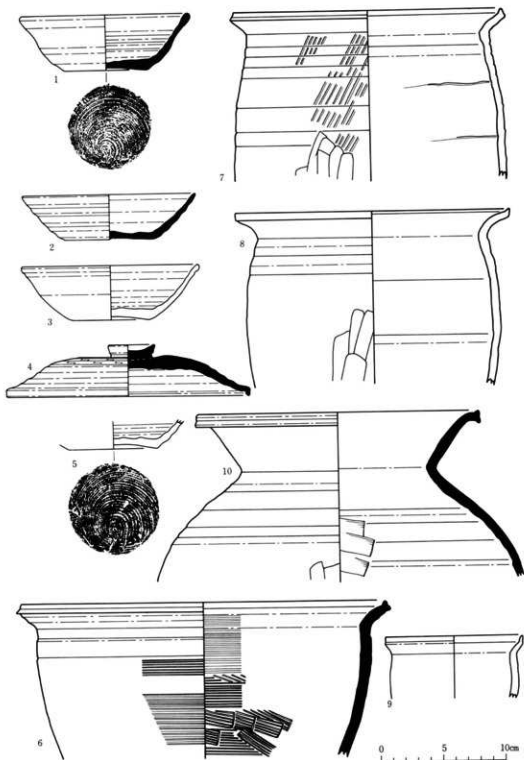
No 6 は須恵器の鉢形土器。推定口径約30cm大。外面のロクロナデは一部に木口も利用されている。内面の体部は横・斜位の調整が交錯する。一見して刷毛目様でもあるが、木口利用のナ

第49-1表 坏形土器一覽

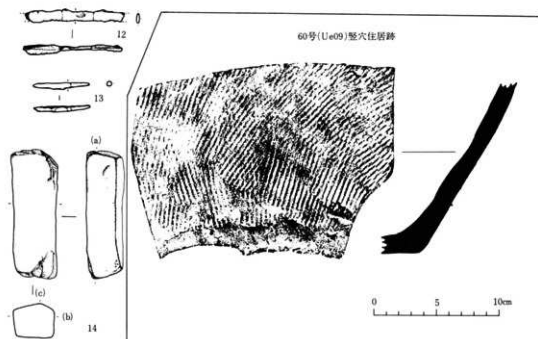
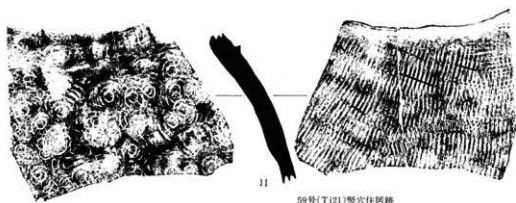
実測区番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角(度)	備 考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	213	A 類	回転糸切	無調整	/	(13.2)	6.6	4.5	2.0	2.9	53	(床面)
2	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	7.0	3.6	2.0	3.8	46.5	内面に付着物あり。(P ₇ 堆積土)
3	-	B 類	回転糸切	無調整	/	(14.0)	6.0	4.3	2.3	3.3	47	一部(底部内面)青灰色でA類的。
4	-	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削	体上部	19.4	(17.7)±0.8	4.7 (17.7)±0.8	/	/	/	B類の色調(10YR5/2黄橙)。(床面)
5	-	B 類	回転糸切	無調整	/	-	7.2	-	-	-	-	(堆積土)

第49-2表 甕形土器一覽

実測区番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口径	底径	器高	最大斜度	口縁部	体部	口縁部	体部	
7	-	土師器	(22.0)	-	-	-	ロクロナデ	印目 + ヘラズリ	ロクロナデ	ヘラナデ?	反転復元。輪積み。(南カマド内)
8	-	土師器	(22.0)	-	-	-	ロクロナデ	ヘラズリ	不明	不明	体部に凹部分あり。煤付着。反転復元。
9	-	土師器	(11.0)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。小型甕。
10	-	須恵器	(23.0)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	一部ヘラナデ	反転復元。(床面)
11	-	須恵器	拓影図。外面平行印目、一部格子目。内面竹管様の押印痕。器部付近は平行印目。(床面)								



第68—2图 59号(Tj21)竖穴住居跡出土遺物



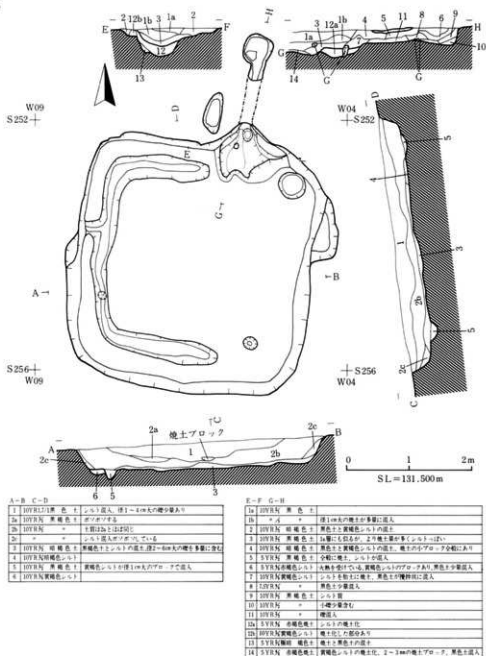
第68—3図 59号(Tj21)・60号(Ue09)整穴住居跡出土遺物

デである。灰色を呈す硬質の仕上がりである。

No14は床面出土の磁石。白色細粒凝灰岩。灰白色を呈す軟質な素材である。5面に使用痕が観察される。10×3.4×2.9cm辺長の直方体に近い形状。

60号 (Ue09) 竪穴住居跡 (第68-3・69図 写真図版35)

(重複 増改築) 増改築の可能性としては、床面西半に検出された凹状溝が、旧平面の壁間連施設である場合の拡張がある。しかし、凹状溝の西壁沿いに中半で西壁方向に走る短い溝があり、壁間連施設と異なる溝とも言えるが、現状では増改築を断定できる積極的要素はない。



第69図 60号 (Ue09) 竪穴住居跡

(規模 平面形 方向) 東西3.9m、南北4 m、面積12.95m²のほぼ正方形の竪穴住居跡であり、カマド方向軸はN-12°-Eである。

(堆積土) 上から1層の黒色土、2層の黒褐色土があって堆積土の主体をなし、床面上に3層のシルトと黒褐色土の混土で多量の礫を含む層がある。

(壁) 直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは30cm~40cmある。北壁の北半部に外への張り出し様部分を認めるが、意図的構築か壁の一部崩壊か明確にできなかった。

(床) 北半は黄褐色シルト、南半は黒褐色土のいずれも礫を多量に含む地山面をそのまま利用した床面である。床面西半には匚状溝を認めたが詳細は後述する。この溝の外側、すなわち、北壁西半から西壁と南壁西半沿いに、幅約30cm、厚さ約10cmの黄褐色シルトが貼りめぐらされている。

(柱穴) 南東隅近くに径20cm、深さ38cmほどの柱穴状ピットを検出したが、柱穴としての確証はない。

(周溝) いわゆる一般的な周溝とは異なる。床面西半に北壁西半から西壁および南壁西半にかけて、各壁から20cm~35cmほど内側に匚状に走る溝で、西壁沿い中央に壁に向う短かい突出部がある。溝幅は18cm~35cm、深さ7cm~15cm程の規模で内部施設はなく、黒褐色土に黄褐色シルトをブロック状に含む堆積土をもつ。

(カマド) 北壁の中央寄り東半にあって、構築は燃焼部の一部を壁外に張り出し、掘り方にシルトを叩き込み火床面としており支脚石も認められ、掘り方埋土は火熱により焼土化していた。側壁は張り出し部分では地山を利用しているが、内側に連続したとみられる袖の遺存は明瞭でない。煙道は燃焼部から若干立ち上がり、ほぼ水平にのびる径20cm、長さ100cmのくり抜きで、先端に径45cmの円形で検出面から28cmの深さをもつ煙出しがある。

(その他の施設) 北東隅に径43cm、深さ8cm規模の皿状のピットが認められ、堆積土は上に黒褐色土、下に焼土を多量に含んだシルトをもつ。位置的に貯蔵穴の可能性はある。

なお、住居跡外、煙道の西側に径28cm×60cmの楕円形で深さ30cmほどの、黒色土と黒褐色土を堆積土にもつピットを検出したが、住居跡との関連や性格は不明である。

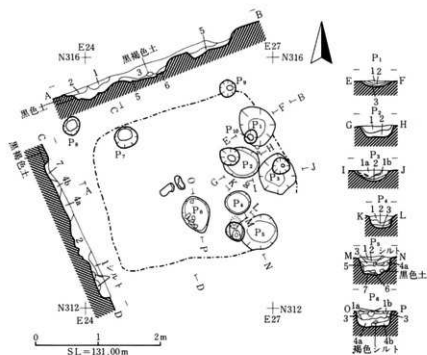
出土遺物 (第68-3図)

出土遺物は少なく、図示したのは須恵器拓影図1点のみである。大甕の体部下端片であり、僅かに残る底部は平底を呈している。外面には平行・格子の叩目があり、下端から底部にかけては不定方向のヘラナデが加えられる。また、内面はやはり不定方向のヘラナデが施されるが、かなり雑なため輪積み痕を残したままである。内面にかけては多量の煤が付着しており、出土地点が煙出し内であることからカマド施設に関わる材として転用されたものと推される。

他に床面から須恵器蓋、大甕の体部下端～底部片、長胴甕体部、土師器甕等の破片が出土している。大甕片は外面ヘラ削り、内面カキ目のもので、図示したそれとは別個体のものである。また、堆積土中からはC類糸切底部片・A類細片が、カマドから非ロクロ土師器片・ロクロ土師器片や支脚に利用した石等がみられる。

61号 (Be71) 竪穴住居跡 (第70図 第50表 写真図版36・71)

(重複 改築) 削平のため、竪穴住居跡の床面と掘り方および付設された貯蔵穴様ピットが遺存したものと推察し、竪穴住居跡としたものである。カマド燃焼部と推察されるP₁、貯蔵穴様のP₂・P₃を、柱穴状のP₁₀・P₁₁・P₁₂が切っており、同類のP₇～P₉を含め、柱穴状の小ピット



A-B C-D	
1	IVRN 黒色土 シルトまがらみ混入
2	" " シルト粒状に混入
3	IVRN 黒色土 シルトが大部分の混入
4a	" " シルトが大部分、ゾラ・テ灰に混入
4b	" " 4a層よりシルトが多い
5	" " シルトが大部分に混入
6	IVRN 黒色土 シルト混入
7	IVRN 黒色土 シルト混入

E-F	
1	IVRN 赤褐色土 焼土の熱により焼土化したシルト
2	IVRN 赤褐色土 焼土混合
3	IVRN 黒色土 焼土を若干含む

G-H	
1	IVRN 黒色土 焼土を若干含む
2	IVRN 赤褐色土 小ゾラ・テ灰と若干まがらみシルトを混入

I-J	
1a	IVRN 黒色土 灰土と若干含む
1b	IVRN 赤褐色土 灰土と若干含む
2	IVRN 黒色土 シルト質粘土と黒色の混入

K-L	
1	IVRN 黒色土 焼土シルトがゾラ・テ灰に混入
2	IVRN 赤褐色土 焼土を若干含む
3	IVRN 黒色土 焼土を若干含む

M-N	
1	IVRN 黒色土 焼土、灰土を若干含む
2	IVRN 赤褐色土 シルトが大部分に混入、灰土を含む
3	IVRN 黒色土 焼土粒全体にみられ、灰土を含む
4a	IVRN 赤褐色土 シルトが大部分に混入
4b	" " 4a層より黒色土が多い
5	IVRN " 穴内シルト
6	IVRN 赤褐色土 穴内シルト
7	IVRN 黒色土 シルト混入

O-P	
1	IVRN 黒色土 灰、焼土を少量含む
1a	" " 1a層より焼土、灰が多い
2	IVRN 赤褐色土 赤褐色の焼土・ゾラ・テ灰を混入、灰土を少量含む
3	IVRN " シルトと黒褐色土の混入
4	IVRN " 小ゾラ・テ灰の焼土混入、灰土を若干含む、シルト混入
4	" " 4a層よりシルトが多い

第70-1図 61号 (Be71) 竪穴住居跡

トは本住居跡より新しいと考えられP₉-P₁₁-P₁₂は1.1m-1.2mの間をもち一線上に乗るが建物等にはならない。

(規模 平面形 方向) 東西3m、南北2.5m、面積7.5㎡ほどと推定され、東西に長い長方形で、P₁をカマド燃焼部としたとき、カマド方向軸はN-76°-Eとみられる。

(堆積土) 削平によって遺存しない。

(壁) 削平のため遺存なし。

(床) 全面掘り方をもつと推察され、北半では黒褐色土、南半ではシルト面を掘り込み、シルト混合の黒褐色土を用い構築した平坦な床面で、南東部に土器片を多く検出した。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半に位置したと推察される。すなわち、P₁は約10cmの掘り込みで2層は現地で火熱をうけた焼土であり、カマド燃焼部の残痕の可能性はある。

(その他の施設) P₂~P₉の貯蔵穴様のピットが検出された。いずれも堆積土には焼土や炭を含み、土器片をもつ。径40cm~50cm、深さ15cm~40cm規模を計る。

出土遺物 (第70-2図 第50表)

土器は土師器のみ6点、他に鉄製品2点、計8点の図示。坏形土器はA・B・D類の体部破片が少量出土している程度。また、住居跡内北側には須恵器台付の破片が1点出土している。なお、本遺構からは球胴を呈する非ロクロ土師器が目立ち、相対的にロクロ成形量が少ない。

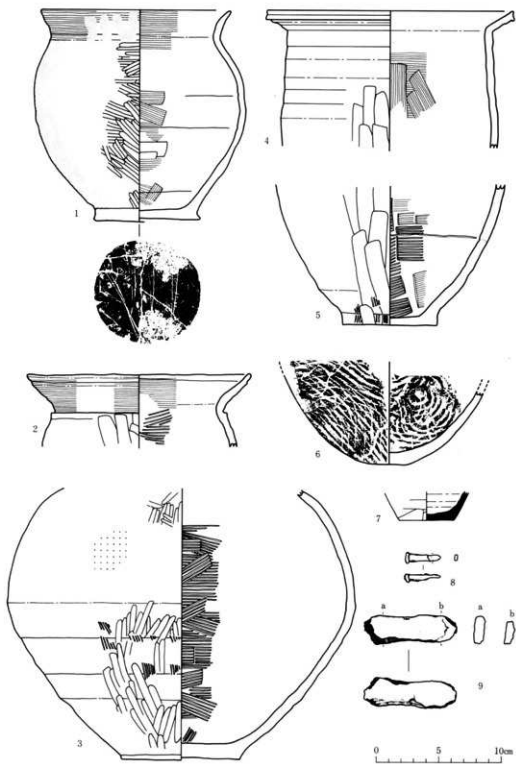
特異な遺物としてNo 6がある。焼土ピットからの出土。須恵器の製作技法を有す酸化焰焼成の土器。外面は叩目、内面には青海波状の押圧痕が残る。丸底を呈す壺形に近い器種が想定される。また、No 1は赤色塗彩が施される甕である。外面の体部と頸部に塗られている。頸部のそれは28本確認されるが、方向は必ずしも一定しない。No 3にも赤色塗彩の痕跡らしきものがあるが、断定はしない。

鉄製品は4点出土している。図示したのはそのうちの2点である。No 7は7.2×2.1×0.8cm大

第50表 変形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口径	底径	器高	最大口径	口縁部	体部	口縁部	体部	
1	214	土師器	15.3	8.6	17.0	17.0	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	木製底。球胴形。赤色塗彩あり。(床面)
2	-	土師器	(18.0)	-	-	-	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	刷毛目	非ロクロ。肩部有段。口唇下に沈線。
3	-	土師器	-	9.5	-	28.0	-	刷毛目+ヘラミガキ	-	刷毛目	多量の煤付着。底外面ミガキ。黒斑あり。
4	-	土師器	(19.9)	-	-	(17.4)	ロクロナデ	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	反転復元。煤付着。(床面)
5	-	土師器	-	7.7	-	-	-	刷毛目+ヘラケズリ	-	ヘラナデ+刷毛目	輪積み。底外面ヘラケズリ。(堆積土)

(No 6は省略)



第70—2图 61号(Be71)竖穴住居跡出土遺物

熱痕が認められ、袖は遺存せず、煙道の一部分が残る。

(その他の施設) 現状では不明である。

62号 (Na68) 竪穴住居跡 (第71図)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 削平のためか極めて遺存状況が悪く、西半はほとんど遺存しない。現存の東西は1.1m、南北2mであり、方形の平面を想定できるが全容は不明である。カマド方向軸はN-85°-Eである。

(堆積土) 若干の焼土ブロックと炭を含む黒褐色土が上を覆い、カマド部分に暗褐色焼土と黒褐色土に焼土、炭の混合土がある。

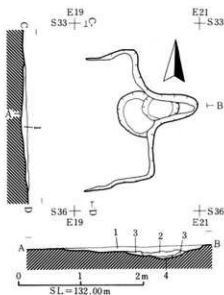
(壁) 東壁で比較的直に近い立ち上がりを見るが、大半は明瞭でない。検出面までの高さは10cm内外を計る。

(床) 全貌は不明であるが、地山シルトをそのまま利用したものと想定される。

(柱穴) 現状では不明である。

(周溝) 現状では不明である。

(カマド) 東壁中央に位置、焼焼部は壁外に出若干の掘りこみをもち、地山面の火床には火



1. 7.5YR 黒褐色土 焼土ブロック炭若干あり。
2. 5YR 暗褐色焼土
3. 5YR 黒褐色土 焼土炭混合
4. 7.5YR 棕褐色シルト 若干の加熱あり。

第71-1図 62号(Na68)竪穴住居跡



第71-2図 62号(Na68)竪穴住居跡出土遺物

熱痕が認められ、袖は遺存せず、煙道の一部分が残る。

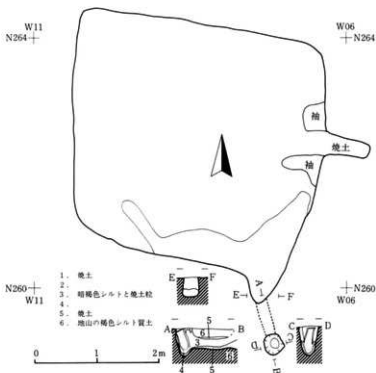
(その他の施設) 現状では不明である。

出土遺物 (第71-2図)

A類1点、鉄製品1点を図示した。No1のA類は反転復元による。計測値は何れも推定によるもので口径13.2cm、底径7.6cm、器高3.8cmである。切離しは回転糸切で、再調整はみられない。No2は、鉄身部がはっきりしない。全長10.6cmで、茎尻部が細くなっている。

67号(Dc12) 竪穴住居跡 (第72図)

破壊される南東隅カマドの煙道、煙出し部のみ精査した。竪穴住居跡は検出面の平面観察で



第72図 67号(Dc12)竪穴住居跡

は重複は認められず、東西4m、南北3.75m規模で、南東隅カマドの他に東カマドがある。

南東隅カマドの煙道は長さ約50cm、径20cmのくりぬきで、先端に径30cm内外の円形平面で深さ45cmの煙出しがあり、長胴甕（第79図）が縦位に設置されていた。煙道の周壁と煙出し底部から側壁の一部は火熱による焼け方が著しい。

なお、出土遺物については、後述する「未精査遺構出土遺物」の項を参照して頂きたい。

(2) 竪穴

1号 (Ka50) 竪穴 (第33-1図…P113 写真図版18)

(重複 改築) 24号竪穴住居跡に西壁を切られる、北西および南西隅は確認でき、西壁の中央部分で重複する。

(規模 平面形 方向) 東西2.4m、南北2.2mで4.5㎡のほぼ正方形の平面形をもち、南北方向軸は真北を向く。

(堆積土) 黄褐色シルトの混入した黒褐色土のみの単層である。

(壁) やや外傾ぎみで、検出面まで10cm～15cmの高さをもつ。

(床) 若干の凹凸をみるが、地山をそのまま利用した床面である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 南壁中央付近にP₁があり、径50cm×45cmの円形で約10cmの深さをもつ、性格は不明である。北壁中央付近に径20cm程度で円形範囲の現地性焼土があり、床面に弱い火熱をうける。

2号 (La06) (第38-1図…P127 写真図版21)

(重複 改築) 東半部を29号竪穴住居跡によって切られる。

(規模 平面形 方向) 東西4.7m、南北3.7m、面積15.13㎡が推定され、東西に長い長方形を呈し、規模と平面形が29号竪穴住居跡と類似する。南北方向軸は真北からやや西に傾く。

(堆積土) シルト混りの黒褐色土の単層でシルトがブロック状に混入し人為的可能性が強く、いわゆる床面構築土となる可能性が高い。

(壁) 外傾する立ちで、検出面まで10cmほどを計る。南壁の3分2以上は擾乱破壊をうける。

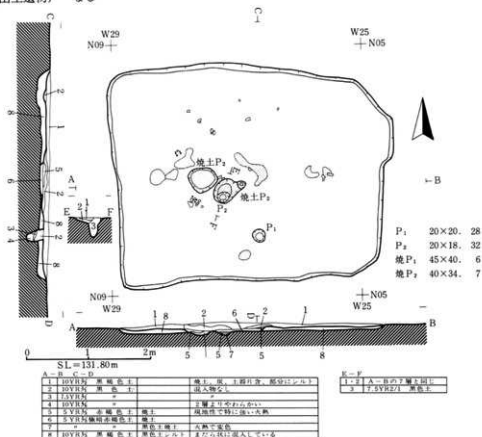
(床) 堆積土の項で述べた黒褐色土下は、凹凸のある黄褐色シルト面であり、生活面を認めず、堆積土上面にも生活面の形成はない。したがって、現状では床面とし得るものは認め難い。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 認められない。

(出土遺物) なし



第73-1図 3号(Lh30) 竪穴

3号(Lh30) 竪穴 (第73図)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西4.2m、南北3.5m、面積13.53㎡の東西に長い長方形を呈する。長軸方向は真北に対してほぼ90°東を向く。

(堆積土) 削平のため現存する堆積土は5cm~10cmと薄い。主体は焼土と炭を含む黒褐色土で、部分的に混入物のない黒色土がある。

(壁) 削平でほとんど遺存しない。床面から大きく外傾する立ち上がりでわずかに痕跡を残すのみで、検出面まで5cm内外を計る。東壁北半の一部に張り出しをみるが特別な施設はない。

(床) 全面に掘り方もち、黒色土とシルトの混合土を用い構築したほぼ平坦な床面である。

(柱穴) P₁とP₂の柱穴状のピットを認めるが、柱穴としての確証はない。P₁は径20cm×20cm、深さ28cm、P₂は径18cm×20cm、深さ32cmを計る。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 床面中央の西寄りに現地性の焼土をもつ焼土P₁と焼土P₂があり、焼土P₁は40cm×45cm、焼土P₂は34cm×40cmの円もしくは楕円状の範囲を、それぞれ6cm～7cm程度掘りくぼめており、火熱による赤変部分が認められることから地床炉の可能性もあり、周辺には焼土の散布が顕著である。

出土遺物 (第73-2 図No 1～5)

A類環2点、変形土器1点、鉄製品2点を図示。他に破片として床面からC類体部片とB類の糸切底部片が出土している。また、堆積土内からは須恵器蓋の破片が2個体分、ロクロ・非ロクロ各様の土師器片若干等が出土している。非ロクロ片の中には球胴形で木葉底のものもある。

No 1のA類環は、床面出土と堆積土上層出土の破片が接合されたものである。口径13.7、底径7.2、器高3.9cm。ヘラ切無調整で胎土・焼成良好の環である。内面は灰オリーブ、外面は灰黄色を呈す。No 2は、口縁部破片の反転復元資料である。床面出土で、口径が11cm強に推定される。胎土は精良で、焼成も良好である。色調は灰色。No 3は床面出土。非ロクロ成形。推定口径は18.3cm大。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面には刷毛目が施される。輪積み成形で凹凸痕がそのまま残る。また外面には黒変部分がある。

鉄製品は盛土中より3点出土しているが、何れも器種は不明。但し、図示したNo 4は紡錘車が変形したものかもしれない。

4号(Mc24) 竪穴 (第73-2・74図)

(重複 改築) 西壁が現代の用水路によって切られる。

(規模 平面形 方向) 東西1.50m、南北2.3m、面積3.45m²、南北に長い良方形を呈し、長軸方向は真北に対しやや東に偏する。

(堆積土) 大概二層になるが、そのうち、南半はほとんど攪乱土の1_a～1_c層となり、北半の2層黒色土は攪乱のない堆積土である。

(壁) 東壁上端の大半は現代の溝により破壊、立ち上がりは外傾し検出面までの高さは10cm～15cmを計る。

(床) 東半に掘り方が認められ、黒色土とシルトの攪拌土を用いて床面を構築している。床面北半に投棄焼土が認められた。

(柱穴) 認められない。

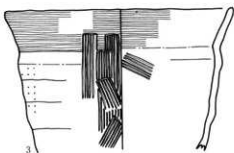
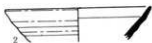
(周溝) 認められない。

(その他の施設) 認められない。

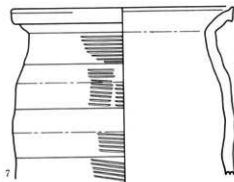
出土遺物 (第73-2 図No 6・7)

台付環(須恵器)片と土師器甕のみの出土。

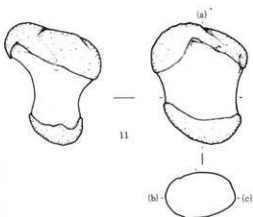
3号(Lh30)竖穴状遺構



4号(Mc24)竖穴状遺構



5号(Mb27)竖穴状遺構



第73—2图 3号(Lh30)·4号(Mc24)·5号(Mb27)竖穴出土遺物

No 6は堆積土中からの出土。脚部は幅の割には低く、付高台によるものである。一部に自然釉がかかる。脚径7.1cmの大きさ。

No 7は出土不明。ロクロ成形による土師器で口径17.7cm、頭部の起上がりがやや不自然である。外面体部には横位方向の叩目に加えらる。

5号 (Mb27) (第73-2・74図)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北3m、東西に長い長方形を呈し東壁南半で若干外に張り出す。長軸方向は真北に対しほぼ90°東を向く。

(堆積土) 単層で、黒色土とシルトの混合した暗褐色土に褐色シルトのブロックを含んでおり、木根による攪乱が大部分に及び黒色土の木根跡が多い。

(壁) 緩やかに外傾する立ち上がりで、検出面までの壁高は約8cmである。

(床) 一部に掘り方が認められ、黒色土とシルトの攪拌土を用い床面を構築しており、他は地山シルト面をそのまま利用している。床面には木根による攪乱が全体にわたっていた。中央に極少の焼土と炭をみたが、火熱による赤変は認められない。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 認められない。

出土遺物 (第73-2 図No 8~11)

No 8は脚部の欠落した高台環。堆積土中からの出土。外面底部の脚部外側に回転ヘラ削りが増えられている。C類の範疇にも係るもので、内黒・ヘラミガキに依る調整で仕上げられる。但し、体部の起上がりは須恵器の高台付環にみられるタイプのものに酷似している。推定口径17cm位。

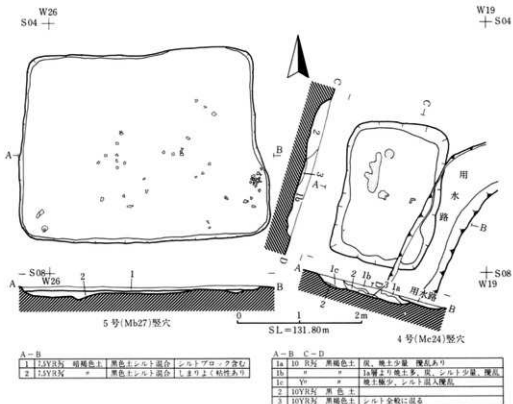
No 9は堆積土内出土の須恵器蓋片。下端に自然釉がかかっている。推定口径17cm。

No 10は堆積土内出土の鉄製品。一部欠失しているが全長9.1cmで、断面は円形を呈す。但し、錆部分が多く本来の形状はこの限りではない。右端部に突出した形で残る部分が本体であるかもしれない。

No 11は両輝石安山岩熔岩塊を素材とする石製品である。中央部を研磨して、両端の自然面をそのまま残している。用途は不明であるが、陽物石製品の類であると思われる。出土層位は不明。

6号 (Na27) 竪穴 (第75図 第51表 写真図版26・72)

(重複 改築) 認められない。



第74図 4号(Mc24)・5号(Mb27)竪穴

(規模 平面形 方向) 東西6.2m、南北4.8m、面積25.20㎡、東西に長くやや歪んだ長方形を呈し、長軸方向は真北に対しほぼ90°東を向く。

(堆積土) ほぼレンズ状の堆積をなし、1層黒褐色土は土器片と焼土小ブロックを含み中央部に皿状に、2層黒色土は全域に、3層の黒褐色シルト質土、4層黒色シルト質土は周囲壁沿いに、それぞれ堆積する。

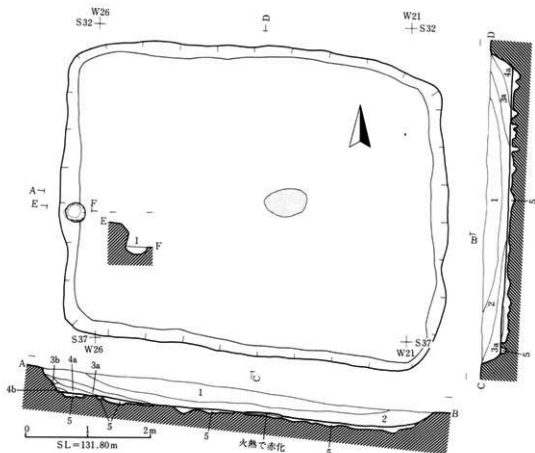
(壁) 外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは30cm～35cmほどを計る。

(床) 全面に掘り方をもち、黒色土とシルトの混土を用いて構築したほぼ平坦な床面で、固くしまっているが、壁沿にやわらかい部分がある。

(柱穴) 西壁中央近くに、径30cm×30cm床面から10cmの深さの柱穴状ビットを検出したが、柱穴としての確証はない。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 床面中央やや東寄りに42cm×66cmの範囲に焼土を認め、床の一部が火熱によって赤褐色の固い面をなし、厚さ2cm～3cmを計り、炭が少量散乱していた。短期間であるが火の使用が認められ、地床炉的なものかと考えられる。



A-B		C-D		
1	10YR 灰 黒褐色土			焼土小アロックス量出る
2	10YR 灰 黒色土			土器片混入
3a	10YR 灰 黒褐色土	シルト質土		褐色シルト小アロックス混在
3b	"	"		3a層よりシルトアロックス少
4a	10YR 灰 黒色土	シルト質土		4a層に褐色アロックス混在
4b	"	"		床構築土
5	10YR 灰 褐色土	黒色土シルト混合		

第75-1 図 6号(Na27)竪穴

出土遺物 (第75-2 図No1~8 第51表)

環形土器3点(台付坏2)、須恵器蓋1点、鉄製品4点、計8点の実測。他に破片としてロクロ・非ロクロ成形の土師器片(ロクロの方が多い)が床面や堆積土中から出土している。また、須恵器蓋は床面からの別個体の破片がもう1点ある。

No1のA類は堆積土中からの出土。灰黄色を呈す。口径13.9cm、底径8.2cm、器高3.9cmの大きさ。底面に軽いナダがあるが有調整の範囲内ではない。口縁部付近には重ね焼と思われる痕跡が残る。

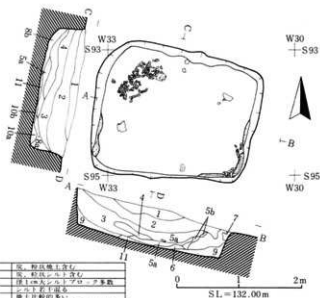
台付坏の2点、鉄製品4点については51表の通りである。尚、攝子が1点出ているが、詳細については別項を参照されたい。

第51-1表 台付坏 一覧

写真番号	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)					備 考
				口 径	底 径	脚 径	器 高	脚 高	
2	216	へう切	—	11.2	7.0	(6.0)	5.9	1.1	B顔の色調(10YR5/1にふい・黄橙)硬質。(増積土)
3	—	不明	—	(17.2)	(10.6)	(9.6)	7.2	1.6	(床面)

第51-2表 鉄 製 品 一 覧

写真番号	種 別	遺存部位	遺存状態	法 量				断面形	備 考	
				長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
5	218	刀子	完形品	比較的良好	204.50	b---11.0 d---7.5	b---2.30 d---4.50	14.60	b---長方形 d---長方形	基部に木質残存。(床面)
6	219	刀子	完形品	比較的良好	135.50	b---13.0 e---8.70	b---5.0 e---4.90	12.50	b---長方形 e---長方形	基部部に木質らしきもの残存。(床面)
7	220	鑊子	一端欠失	やや不良	65.30	4.90	2.80	4.05	長方形	(床面)
8	221	鉄 鍔	基部欠失	比較的良好	65.90	a---8.0 b---5.80	a---4.70 b---3.80	5.10	a---長方形 b---長方形	鍔身長---11.0(14.0)mm



A-B C-D		
1	10YR5	黒色土
2	10YR5	黒色土
3	10YR5	黒色土
4	10YR5	黒色土
5a	10YR5	黒色土
5b	10YR5	黒色土
6	10YR5	黒色土
7	10YR5	黒色土
8a	10YR5	黒色土
8b	10YR5	黒色土
9	10YR5	黒色土
10a	10YR5	黒色土
10b	10YR5	黒色土
11	10YR5	黒色土

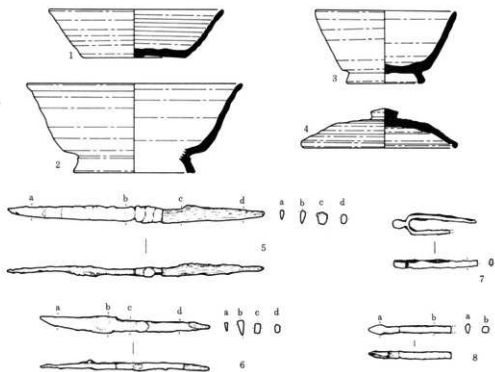
第76図 7号(Pb33)竪穴

7号 (Pb33) 竪穴 (第75-2・76図 第52表 写真図版72)

(重複 増改築) 認められない。

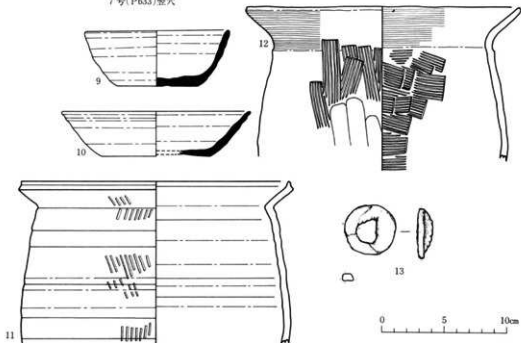
(規模 平面形 方向) 東西2.6m、南北2.1m、面積4.56㎡、西辺に対し東辺が短かくやや歪んだ形の東西に長い長方形を呈し、長軸方向は真北に対し約80°東を向く。

(堆積土) 1層と2層の黒色土; 3層の黒色土とシルトの混合土、4層・5層の黒色土、8



6号(Na27)竖穴

7号(Pb33)竖穴



第75—2图 6号(Na27)·7号(Pb33)竖穴出土遺物

層・9層の黒色土が主体になるが、1層・2層はほぼレンズ状の堆積を示し、8層・9層は床直上から壁へ自然堆積の様相をもつが、3層は多量のシルトブロックを含み、6層とした暗褐色粘質シルトが東壁寄りのみ堆積をみること、3層の中に入り込む4層のあり方等も含め、3層～5層は人為的な埋土の可能性もある。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは50cm～60cmを計る。

(床) 中央から北東にかけて掘り方あり、他は地山シルトをそのまま床面としており、南西部分は非常に固い面をしている。北西隅に木炭が多量に検出された。なお、中央床面構築土下に現地性の焼土をもったピットを認め火の使用が推察できる。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 南東隅および西壁南半の壁沿いに周溝状の溝があり、幅5cm～10cm、深さ3cm～5cmを計る。

出土遺物 (第75-2図No9～13)

坏形土器2点、甕形土器2点、鉄製品1点、計5点の実測。他に床面からB類片が1点出土している。またピット内から外面にヘラ削り、内面に刷毛目調整を施す球脚体部片がある。後者の破片には朱塗り様の痕跡がみられる。

No3は出土層位不明の環状鉄製品。3.9cm径前後のリング状を呈す。膨らんだ部分は錆であり、本来的な形状は断面に示した長方形の規模で構成されるものと思われる。止金具に具されたものであろう。

なお、本遺構からは「ナラ」を原料とした多量の炭化材が出土している。5cm径の円柱形を呈すもの、厚さ2cm弱で幅5cm位の板状を呈すもの等がある。前者については、木炭として生産されたものとみて大過ない。

また、これらの炭化材については分析・鑑定結果の5項を参照されたい。

第52-1表 坏形土器一覽

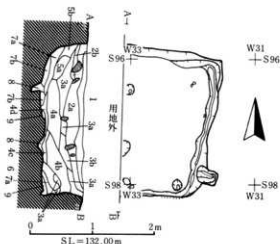
実測図番号	写真番号	種別	切断し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(度)	備 考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
9	A類	ヘラ切	無調整			11.4	6.4	4.5	1.8	2.5	61	実形品。(床面上)
10	A類	ヘラ切		磨減顯著		(15.0)	(8.6)	3.6	1.7	4.2	48.5	

第52-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口径	底径	器高	最大傾斜	口縁部	体部	口縁部	体部	
11		土師器	(22.0)	—	—	—	一部内径ロクロナデ	口縁部ロクロナデ	口縁部ロクロナデ	口縁部ロクロナデ	焼成良。赤褐色。(Q ₂ 床面)
12		土師器	(22.2)	—	—	—	口縁部野毛目	口縁部野毛目	口縁部野毛目	口縁部野毛目	磨毛目。灰黄褐色。(床面)

A-E		
1	IVY内黒色土	炭層少、砂石を含む
2a	IVY内黒褐色土	砂質粘土層
2b	IVY内黒色土	
3a	IVY内黒色土	焼土粒と燻少の炭
3b	IVY内黒色土	3a層より粗い、他は同じ
4a	IVY内黒褐色土	焼土粒あり、灰下部に多
4b	IVY内黒色土	3a層よりやや粗い
4c	IVY内黒色土	4a層より粗く、しまりなし
4d	IVY内黒色土	4a層よりやや粗く、しまりなし
5a	IVY内黒色土	3a層に似る、やや砂質シルトを含む
5b	IVY内黒色土	
6	IVY内黒色土	砂質シルト黒色土混合
7a	IVY内黒褐色土	シルト黒色土混合
7b	IVY内黒褐色土	シルト黒色土混合
8	IVY内黒褐色土	シルト黒色土混合
9	IVY内黒褐色土	砂質シルト

● 8号等による発見



第77図 8号 (Pb36) 竪穴

8号 (Pb36) 竪穴 (第77図)

(重複 増改築) 西側が調査区外のため詳細は不明だが現状では認められない。また、調査区外にカマドがある可能性もあり、竪穴住居跡になり得ることも否定できない。

(規模 平面形 方向) 東西は不明、南北2.4mあり方形と推察される。南北方向は真北に対しやや東偏する。

(堆積土) 五大別される。すなわち、1層、2層、3層、4層・5層、7層で、床面直上の7層が黒色土とシルトの混土で焼土と炭を多く含むが、他は黒色または黒褐色土で類似する土性であるが、混入物等に差異がある。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは60cmを計る。

(床) 一部に掘り方をもつが、大部分は地山シルト面を床とし比較的凹凸がある。

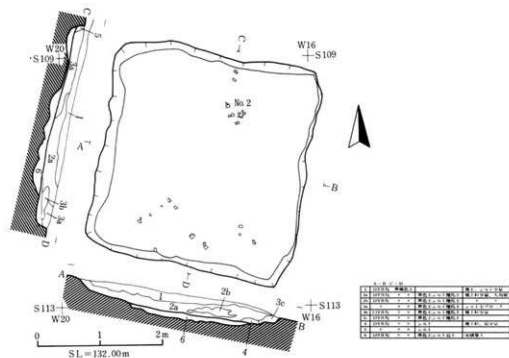
(柱穴) P₁・P₂の柱穴状小ピットがある。P₁は径15cm深さ25cm、P₂は径17cm深さ15cmを計るが、いずれも柱穴としての確証はない。

(周溝) 東壁と南壁沿いに幅10cm内外で深さ5cm~12cmほど認められる。

(その他の施設) 南東隅に方形の張り出しピットがあり、短軸25cm長軸35cmの長方形で深さ40cmを計り、遺物等の出土はなく性格も不明である。

出土遺物

破片のみの出土であり、図示できる個体はない。床面からは外面にヘラ削り痕を有す非クロコ土師器体部片が若干、また堆積土下層から底面にヘラ削り調整を加えるA類底部片が出土している程度である。甕類の破片で明らかにクロコ成形と思われる例はない。



第78-1図 9号 (Pg21) 竪穴

9号 (Pg21) 竪穴 (第78図 第53表 写真図版72)

(重複 増改築) 重複と増改築は認められないが、49号竪穴住居跡の南壁と本竪穴の北壁はほとんど接する状況にある。

(規模 平面形 方向) 東西3.3m、南北3.4m、面積9.60㎡、ほぼ正方形の平面を呈し、南北方向軸は真北に対し若干東に偏する。

(堆積土) 1層および4層・5層は自然堆積とみられるが、2層・3層は黒土とシルトの攪拌土で人為的埋土の様相を呈し、一部壁ぎわを除き1層下から床面まで認められる。

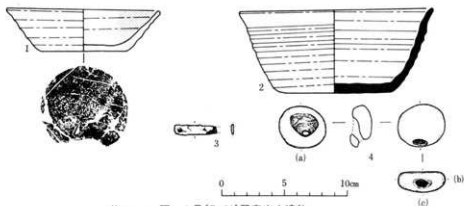
(壁) 南・北壁は比較的垂直に近いが、東・西壁は緩やかに外傾する立ち上がりであり、検出面までの高さは14cm～22cmを計る。

(床) 西壁ぎわは暗黄褐色の地山シルトをそのまま床面とする外は、掘り方を持ちシルトと黒土の混土を用い床面を構築している。南壁寄り中央部に投棄された黒土混りの焼土を多量に認めた。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 認められない。



第78—2図 9号(Pg21)竪穴出土遺物

出土遺物 (第78—2図 第53表)

坏形土器2点、石製品1点の実測。甕形土器は、床面乃至は掘り方埋土中に非ロクロを主とした破片が散在する。図示した以外の坏は、床面にへら切無調整のA類底部片(底径8cm・灰橙色・硬質)、B類の体部細片2点がみられ、C類は無い。

No3は出土層位不明の石製品。偏平部分の中央付近から側面のやや上位方向に穿孔が為される。3.3×3.6cm径、厚さ1.7cmの大きさ。にぶい赤褐色を呈す石質細粒凝灰岩を素材とする。石錐と同様の用途に使用されたものであろう。

第53表 坏形土器一覽

左側 写真 番号	種 別	切 磨 し	調 整 注 法	調 整 部 位	法 量 (cm)			h ₁ /b	h ₂ /d	外 傾 角 度 (°)	備 考
					口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	225 C 類	調整のため平削	手揉へり磨り	底 部	12.2	6.8	3.5	1.8	3.5	50	(床面)
2	226 A 類	へら切	無 調 整		15.3	9.0	6.8	1.7	2.3	60.5	底部外面に少量の赤色付着物。(床面)

10号 (Pi21) 竪穴 (第61図…P205 写真図版31)

(重複 改築) 52号竪穴住居跡の西壁と本竪穴の東壁が重複し、本竪穴の方が新しい。

(規模 平面形 方向) 東西3.4m、南北2.65m、面積4.94㎡の、ほぼ正方形に近い平面形を呈する。南北方向軸はN-10°-Eである。

(堆積土) 大別三層になる。すなわち、堆積土断面図の10層としたシルト小粒子を含む黒褐色土、11層の径2cm~5cm大のシルトブロックを多量に含む黒色土とシルトの混合土のにおい褐色土、13層の黒色土とシルトの混合土にシルトブロックを含む暗褐色土とが主体となり、11層等では、シルトブロックの混在のあり方は攪拌状とも推察され、人為的な可能性もある。

(壁) 東壁に部分的にシルトを用いた貼り壁が認められた。全般に垂直に近い立ち上がりで検出面まで30cmの高さを計る。

(床) 全般に掘り方技法により、黒色土とシルトの混土を用いて構築し、床面の凹凸は認められないが西方へ若干低くなる。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 四壁沿いに認められ幅15cm深さ15cmほどである。

(その他の施設) 認められない。

出土遺物

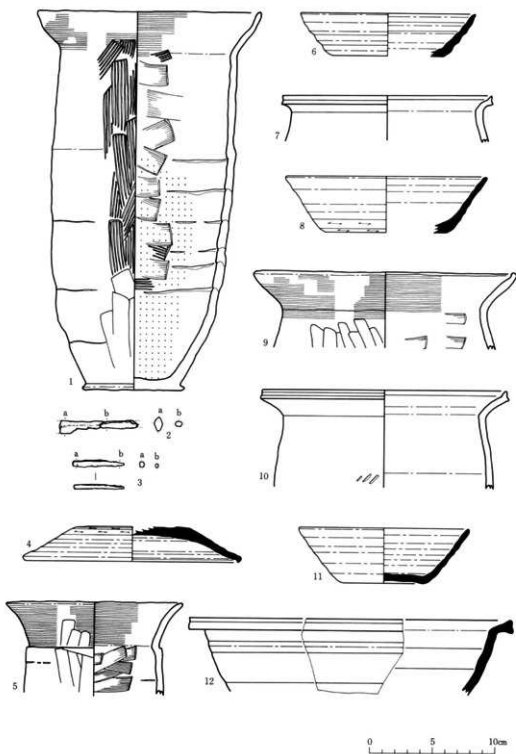
破片のみの出土であり、図示できる個体はない。外面に刷毛目を有す非ロクロ土師器片、叩目を有すロクロ成形土師器片等があるが何れも堆積土中からの出土である。非ロクロ土師片中には球胴形を呈すと思われるものもある。須恵器やその他の製品は皆無である。

(3) 未精査遺構出土遺物 (第79-1・2・3図 第54表)

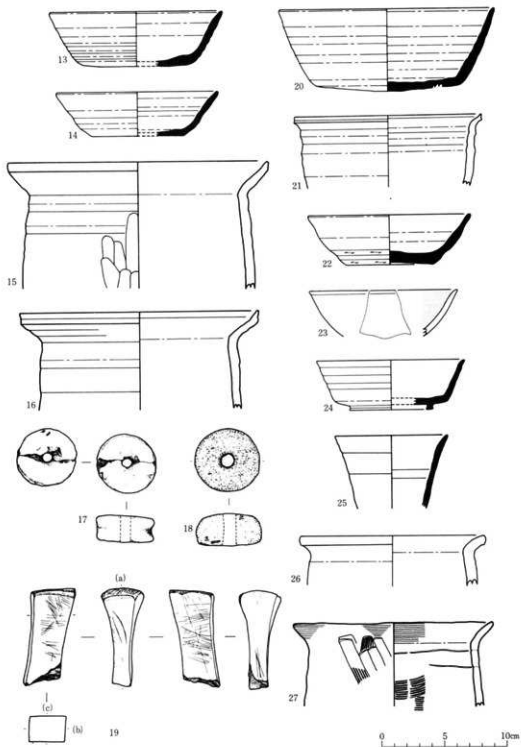
本遺跡内では、既述のように検出面まで表土を剥いだ段階で保存処理をした一部遺構がある。第79-1・2・3図はその対象になった遺構のうち、住居跡内の堆積土上で採集可能な遺物分についてのみ掲載したものであるが、本項では未精査遺構出土遺物として一括記載する。また、図版上では、遺跡内北側遺構からの出土遺物から南側のそれまでの遺物を順に示しているが、説明の多くは一覧表を以って替えることとし、各遺構内のセット関係等の詳細については特に触れない。

なお、記載の遺物を出土している遺構は下記に示した竪穴住居跡22棟である。

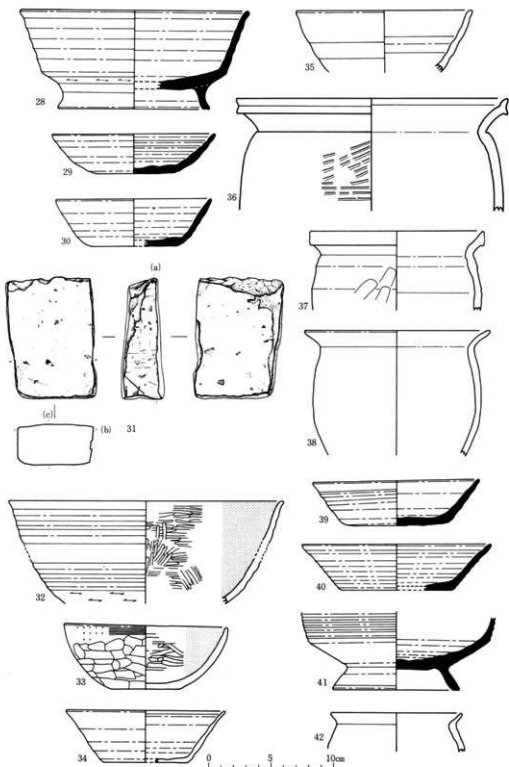
67号(Dc12)竪穴住居跡…第79-1 図No 1～3	68号(Df15)竪穴住居跡…第79-1 図No 4
70号(Dg12)竪穴住居跡…第79-1 図No 5	73号(Dg24-2)竪穴住居跡…第79-1 図No 6
72号(Dg24-1)竪穴住居跡…第79-1 図No 7	71号(Dh15)竪穴住居跡…第79-1 図No 8
76号(Di59)竪穴住居跡…第79-1 図No 9・10	94号(Ff50)竪穴住居跡…第79-1 図No 11・12
104号(Fi74)竪穴住居跡…第79-2 図No 13～15	110号(He77)竪穴住居跡…第79-2 図No 16
109号(Hf71)竪穴住居跡…第79-2 図No 17～19	120号(Hj09)竪穴住居跡…第79-2 図No 20
111号(Ia77)竪穴住居跡…第79-2 図No 21	113号(Ic65)竪穴住居跡…第79-2 図No 22～24
114号(Id71)竪穴住居跡…第79-2 図No 25～27	118号(Ie06)竪穴住居跡…第79-3 図No 28
147号(Jg06)竪穴住居跡…第79-3 図No 29～31	120号(Jh33)竪穴住居跡…第79-3 図No 32
144号(Ka15)竪穴住居跡…第79-3 図No 33	143号(Kb09)竪穴住居跡…第79-3 図No 34
142号(Kc06)竪穴住居跡…第79-3 図No 35～37	138号(Ki12)竪穴住居跡…第79-3 図No 38～41
152号(Jf65)竪穴住居跡…第79-3 図No 42	



第79—1圖 未精查竪穴住居跡出土遺物



第79—2圖 未精査竪穴住居跡出土遺物



第79—3圖 未精査竪穴住居跡出土遺物

第54-1表 環形土器 一覽

遺構名	実測図番号	写真番号	種別	切廻し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角(度)	備 考
							口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
73号(Dg24-2) 住	6	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.0)	(9.0)	3.4	1.6	4.1	54	
71号(DM5) 住	8	-	A 類	調整のため平堀	回転ヘリ形	体部下端→底部	(16.0)	(9.8)	4.5	1.6	3.6	55	外面に多量のカーボン付着。
94号(FE50) 住	11	-	A 類	回転糸切	無調整	/	(13.6)	6.4	4.4	2.1	3.1	50.5	
104号(F174) 住	13	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.6)	(8.6)	4.4	1.6	3.1	59	(増積土)
	14	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	(7.4)	3.6	1.9	3.8	52.5	(増積土)
113号(1e65) 住	22	-	A 類	回転糸切	回転ヘリ形	体部下端→底部	(13.0)	7.0	4.0	1.9	3.3	53.5	底部調整外面のみ。
	23	-	C 類	底部欠失	-	-	(11.8)	-	-	-	-	-	(増積土)
147号(Jg06) 住	29	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.0)	7.2	3.2	1.8	4.1	46	
	30	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.4)	(7.0)	3.8	1.9	3.5	54	
130号(Jh33) 住	32	-	C 類	底部欠失	回転ヘリ形	体部下端	(22.0)	-	-	-	-	-	(増積土)
144号(Ka15) 住	33	-	D 類	非口クロ	非ヘリ形	外 面	13.0)	5.6	5.3	2.3	2.5	54	外面調整。口縁はヨコナデの後へつ割りか？
143号(Kb09) 住	34	-	B 類	ヘラ切	無調整	/	(12.6)	(6.8)	4.2	1.9	3.0	55	色調10YR5/6浅黄褐色。増積土。
142号(Kc06) 住	35	-	B 類	底部欠失	-	-	(14.0)	-	-	-	-	-	軟質。(増積土)
138号(K112) 住	39	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.3	8.2	3.7	1.6	3.6	54	
	40	-	A 類	ヘラ切	無調整	/	(15.2)	(8.8)	3.7	1.7	4.1	49.5	

第54-2表 甕形土器 一覽

遺構名	実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
				口径	底径	器高	最大脚径	口縁部	体部	口縁部	体部	
67号(De12) 住	1	-	土師器	(17.8)	8.0	29.9	(14.8)	ヨコナデ	刷毛目+ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部無段。巻上げ。内面黒染。脚縁部に使用。1/2
70号(Dg12) 住	5	-	土師器	(15.0)	-	-	-	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部段状。小型。
72号(Dg24-1) 住	7	-	土師器	(16.9)	-	-	-	クロコナデ	クロコナデ	クロコナデ	クロコナデ	反転復元。
76号(Di09) 住	9	-	土師器	(21.1)	-	-	-	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部無段。内面黒染。胎土粗。
	10	-	土師器	(20.0)	-	-	-	クロコナデ	クロコナデ+印目	クロコナデ	クロコナデ	胎土粗。反転復元。
104号(F174) 住	15	-	土師器	(20.9)	-	-	-	クロコナデ	クロコナデ+ヘラケズリ	クロコナデ	クロコナデ	胎土粗。反転復元。
110号(Hc77) 住	16	-	土師器	(19.0)	-	-	-	クロコナデ	木口利用のヘラケズリ	クロコナデ	木口利用のナデ	胎土粗。反転復元。
111号(1a77) 住	21	-	土師器	(15.0)	-	-	-	クロコナデ	クロコナデ	クロコナデ	クロコナデ	凹凸目立つ。
114号(1d71) 住	26	-	土師器	(15.0)	-	-	-	クロコナデ	クロコナデ	クロコナデ	クロコナデ	小型甕。胎土精良。
	27	-	土師器	(16.0)	-	-	-	ヨコナデ	刷毛目+ヘラケズリ	ヨコナデ	刷毛目	反転復元。巻上げ。
142号(Kc06) 住	36	-	土師器	(21.9)	-	-	-	クロコナデ	横位印目	クロコナデ	ヘラナデ?	黒染部あり。
	37	-	土師器	(14.0)	-	-	-	クロコナデ	印目+ヘラケズリ	クロコナデ	一部が木目	巻上げ。小型。
138号(K112) 住	38	227	土師器	(15.0)	-	-	(13.3)	クロコナデ	ヘラケズリ	不 明	不 明	反転復元。剝離・磨滅。

甕形土器については以上13点である。出土状況については、No 1を除き既述の通りである。No 1については若干の補則を加える。この遺物は67号(Dc12) 竪穴住居跡出土で、南壁東側寄りカマドに付属する煙道部内からの出土である。煙出し部分の起上がり部分に転用されていたもので、内面には多量の煤が付着している。また、遺物そのものも縦に割った形の残存状態であり、意図的に判割したものと推される。

須恵器蓋は、68号(Df15) 竪穴住居跡出土のNo 4がある。ツマミ部分を含めて1/2弱の欠損。反転復元に依る推定口径は17.5cm位。台付環はNo20・23・28・41の4点。小型・大型の2タイプがある。また、No12は須恵器の鉢形土器である。破片からの復元であるが、硬質・精良の胎土。

鉄製品は、67号(Dc12) 竪穴住居跡内からの3点のみであるが、図示したのはNo 2・3の2点である。No 2は、鋏身端部が欠失した鉄鋏と推される。No 3は角釘のようでもあるが、不明製品である。

石製品は、109号(Hf71) 住より2点、147号(Jg06) 住より1点、合計3点の実測。No18は輝石安山岩を素材とする紡錘車。No19、31の2点は、斜長石流紋岩を素材とする砥石である。

土製品は、109号(Hf71) 住出土No17の1点。4.6cm径の紡錘車である。

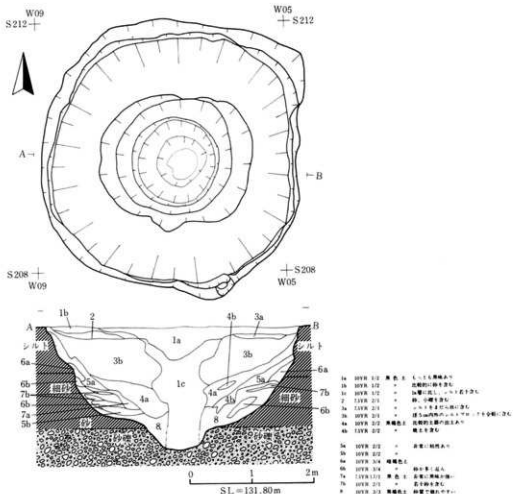
3 井戸

1号(Sj09) 井戸 (第80図 第55表 写真図版36)

(重複) 他遺構との重複は認められない。

(規模 形態) 井戸掘り方の開口部は、東西4.30m、南北4.10m、底部は東西、南北ともに0.5mを計り、開口部、底部とも平面形は円形を呈し、検出面からの深さは2.0mで底部は砂礫層まで達している。掘り方は壁が比較的急傾斜を示し擋鉢状を呈するが、検出面から1.40m～1.50mで壁の緩傾斜部分があり、二段掘りの形跡が認められる。

(堆積土) 井戸埋没後の凹みに堆積したとみられるのが1a層と1b層の黒色土であり、井筒内の堆積土が1c層の黒色土であって、ほぼ円筒状を呈するが壁の崩壊のためか出入りがある。1c層の下層は湧水のため観察不可能であった。砂と小礫を含む2層、シルトを含む3層の黒色土があり、特に3b層は大きなシルトブロックが全般に入る。4層は比較的土器片を含む黒褐色土で、5層は粘性の強い黒褐色土となり、6層から8層までの暗褐色土、黒色土、黒褐色土はほぼ一括される堆積で、7層を除き砂が多く混入する。なお、4層～8層は、中心へ流れこむ。



第80-1図 1号(S109)井戸

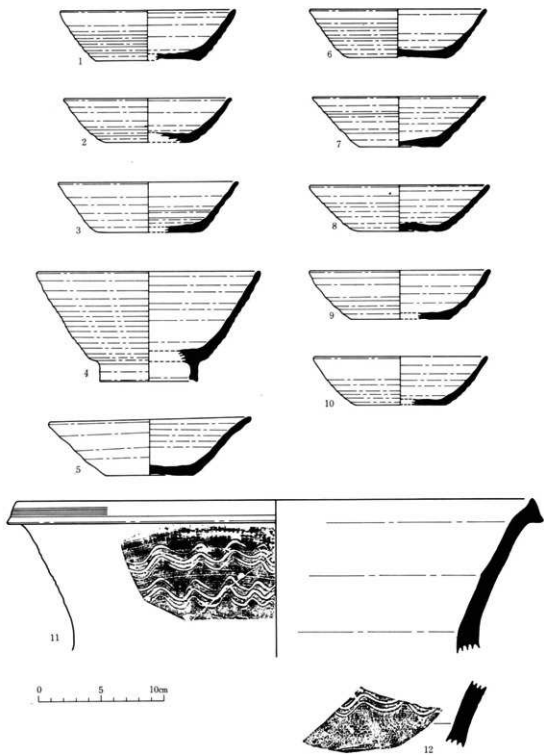
以上の堆積土は、1a層・1b層・1c層は自然営力による堆積で、3層～8層は、井筒を固定するための人為的埋土層と想定される。

(井筒と付属施設) いずれも認められない。堆積土1c層の状況から井筒の使用が想定される。

出土遺物 (第80-2図・第55表)

環形土器10点(台付環1)、須恵器甕影図2点を図示している。何れも還元焼成に依る須恵器である。このうちNo11は埋土上部、No12は底面近くからの出土であるが、同一個体と思われる。環形土器の出土は埋土中からのもので占められるが、壁際に寄っている場合や遺構中央部の下層に存在する場合等がある。

No11は推定口径43cm大の口縁部破片である。頸部に三条の波状紋が二段に繞る。頸部と体部の接点近くの器内は1.7cm前後の厚さとなる。他に須恵器大甕の体部片が大量に出土している。井戸内に投棄された遺物と思われる。



第80—2图 1号(Sj09)井戸出土遺物

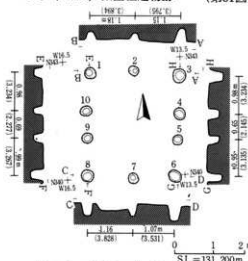
第55表 环 形 土 器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	切廻し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)				外傾角(度)	備 考		
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)	a/b			a/d	
1	—	A 類	へら切	無調整	/	(14.0)	(8.2)	4.0	1.7	3.5	54.5	(埋土)	
2	—	A 類	へら切	底部残存小	—	(13.4)	(6.8)	3.5	2.0	3.8	47	(壁面付近)	
3	—	A 類	へら切	無調整	/	(14.2)	(8.4)	4.0	1.7	3.6	53.5	(壁面)	
4	—	台付	不明	/	/	(17.6)	$\begin{pmatrix} 8.8 \\ 7.8 \end{pmatrix}$ (脚径)	$\begin{pmatrix} 8.8 \\ 1.6 \end{pmatrix}$ (脚高)	/	/	/	/	(埋土)
5	—	A 類	へら切	無調整	/	16.0	7.0	4.6	2.3	3.5	45	全軟質。(埋土)	
6	—	A 類	へら切	無調整	/	(14.0)	7.8	3.9	1.8	3.6	51	(壁面)	
7	—	A 類	へら切	無調整	/	(13.8)	6.4	4.0	2.2	3.5	47	(埋土)	
8	—	A 類	へら切	無調整	/	(14.2)	7.6	3.7	1.9	3.8	46.5	(埋土)	
9	—	A 類	へら切	無調整	/	(14.4)	(7.8)	3.9	1.8	3.7	50	磨滅気味。(埋土)	
10	—	A 類	へら切	無調整	/	(13.8)	(7.2)	3.9	1.9	3.5	49.5	(埋土)	

4 掘立柱建物跡

推定される建物を含めて16棟である。北側のA～Bブロックに7棟が集中し、他はI～Pブロックに点在する。以下はいずれも地山面に検出されるものである。なお遺物は本項の最後に一括する。

1号 (Af18) 掘立柱建物跡 (第81図)



第81図 1号 (Af18) 掘立柱建物跡

東西2.32m (7.640尺) 2間、南北2.48m (8.185尺) 3間のもっとも小規模な建物である。建物方向はN-4.0°-Eを計る南北棟である。柱配置は東面に僅かに広がるが、整然とした配列を示す矩形の建物である。

第56表 写真図版37)

東西2.32m (7.640尺) 2間、南北2.48m (8.185尺) 3間のもっとも小規模な建物である。建物方向はN-4.0°-Eを計る南北棟である。柱配置は東面に僅かに広がるが、整然とした配列を示す矩形の建物である。

柱間は東西方向が1.07 (3.351尺)～1.18m (3.894尺)の等間である。南北方向では南北端各1間が0.95 (3.135)～0.99m (3.267尺)の等間となるが、中央1間が0.67m (4.422尺)でやや狭い。

掘り方は径0.25～0.35mの円形をなし、深さは

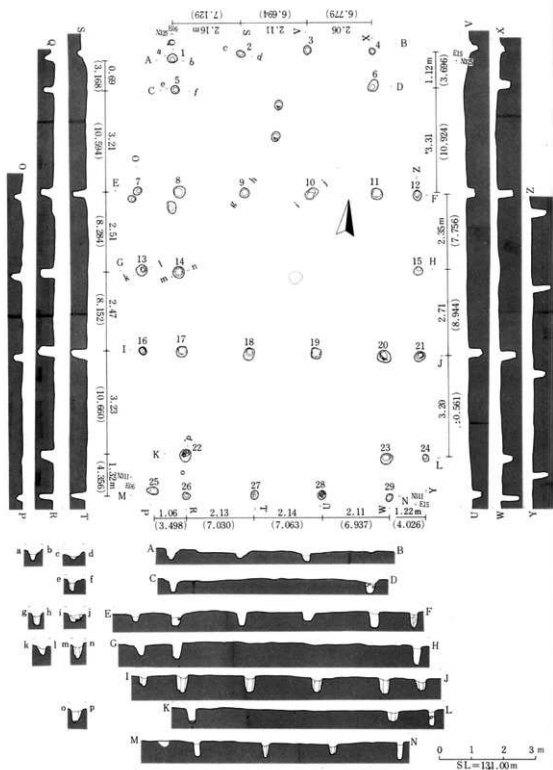
0.16～0.40mを計り、4隅に大きく深い。柱痕は2柱穴に判明し、径0.10～0.15mの円形である。柱穴の埋土は記載がなく、不明である。

第56表 1号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出面の寸法	深さ	検出面の高さ	基準の高さ	柱間隔	備考	柱穴番号	検出面の寸法	深さ	検出面の高さ	基準の高さ	柱間隔	備考
1	28×29cm	24	131.02m	130.78m	cm		8	32×30cm	40m	131.06m	130.66m	cm	
2	26×24	16	131.00	130.84			7	25×27	32	131.08	130.76		
3	34×35	39	131.05	130.66	15		8	30×30	34	131.10	130.76		
4	30×30	29	131.06	130.77			9	28×28	27	131.10	130.83		
5	25×25	28	131.04	130.76	10		10	30×25	25	131.07	130.82		

2号 (Bb53) 掘立柱建物跡 (第82図 第57表 写真図版37)

東西8.74m (28.845尺) 5間、南北13.89m (45.825尺) 6間のもっとも規模の大きい建物である。建物方向はN-7.4°-Wの南北棟である。柱配置は全体に矩形をなすが、建物東・西面の北、または南北端に側柱が認められず、北2間は東西方向3間となって張り出す。内部は南北方向を3分して配列される。また、北2間の張り出しには東西を2分する柱穴があるが、伴う柱穴が明確でない。東西方向では側柱に沿って入側柱列がほぼ対応し、狭い柱間となる。これを庇とみるならば身舎の東西方向は6.27m (20.693尺) 3間、同様に南北両端を除く南北方向は



第82图 2号 (Bb53) 掘立柱建物跡

11.59m (38.251尺) 4間となる。

東西方向の柱間は東・西両端の各1間が1.06 (3.498)～1.26m (4.158尺)、他は2.06 (6.799)～2.16m (7.129尺)である。内部3間の総長では6.26 (20.660)～6.38m (21.056尺)でそれぞれ等間となる。

南北方向では南・北端各1間が0.96 (3.168)～1.32m (4.356尺)でもっとも狭く、東・西端1間に一致する。中央2間は2.47 (8.152)～2.71m (8.944尺)、他の2間は3.20 (10.561)～3.31m (10.924尺)のそれぞれ等間である。そのほか、間柱の認められない2間相当の柱間では4.37 (14.422)～4.58m (15.116尺)と4.94 (16.304)～5.12m (16.898尺)で対応する柱間である。

掘り方は径0.17～0.45mの円形、または不整な楕円状を呈し、深さは0.16～0.59mを計る。比較的側柱柱穴に小さく、特に北面に浅い。P30～33は深さ0.12～0.14mでもっとも浅く、建物に伴う柱穴か疑問が残る。柱痕は径0.10～0.21mで極めて不揃いである。埋土や遺物については明らかでない。

建物敷地内に検出される遺構には22号焼土遺構がある。建物中央部に位置するが、共伴する遺構が明らかでない。

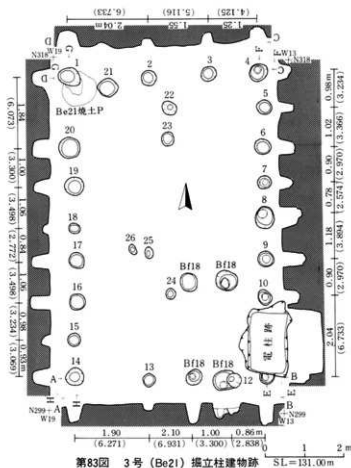
第57表 2号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	柱断面の寸法	深さ	柱断面の長さ	柱断面の幅	柱痕径	備考	柱穴番号	柱断面の寸法	深さ	柱断面の長さ	柱断面の幅	柱痕径	備考
1	33×38cm	36m	130.81m	130.45m	cm		18	34×36cm	48cm	130.81m	130.33m	19cm	
2	29×22	16	130.68	130.52			19	31×32	43	130.74	130.31	19	
3	22×29	26	130.67	130.41			20	42×39	48	130.74	130.26	19	
4	20×19	14	130.70	130.56			21	34×32	38	130.70	130.32	18	
5	30×25	37	130.80	130.43	10		22	35×37	46	130.81	130.55	21	
6	31×27	41	130.80	130.39			23	39×34	34	130.69	130.35	19	
7	25×30	23	130.77	130.54			24	17×25	48	130.72	130.24		
8	35×36	36	130.75	130.39			25	38×22	19	130.76	130.57		
9	29×29	42	130.78	130.36	20		26	24×21	46	130.72	130.26		
10	25×45	27	130.78	130.51			27	22×26	50	130.76	130.26	15	
11	32×33	49	130.81	130.32			28	25×30	35	130.65	130.30	13	
12	25×30	51	130.78	130.27	15		29	20×22	59	130.73	130.14		
13	33×33	35	130.76	130.41			30	24×20	14	130.71	130.57		
14	33×35	49	130.83	130.34	18		31	25×40	14	130.78	130.64		
15	29×26	59	130.73	130.14			32	27×29	12	130.80	130.68		
16	24×25	36	130.78	130.42	15		33	25×30	12	130.80	130.68	17?	
17	30×33	51	130.77	130.26	17								

3号(第Be21)掘立柱建物跡 (第83図 第58表 写真図版37)

東西4.85m (16.018尺) 3間、南北7.75m (25.578尺) 7間の南北棟である。建物方向はN-2.1°-Wを計る。柱配置は電柱敷設によって一部明確でないが、側柱が殆ど対称をなし、全体に矩形を呈する。内部柱穴は東西方向に2分する3柱穴とこれより西寄りに1柱穴が認められる。

柱間は東西方向3間のうち西2間が1.55 (5.116)～2.10m (6.931尺)、東1間が0.86 (2.838)～1.25m (4.125尺)で不揃いとなるが、総長では4.80 (15.842)～4.93m (16.271尺)で殆ど差異がない。また、内部柱穴の柱間ではP22-5、P20-23、P23-6、P16-24、P24-10の5



第83図 3号 (Be21) 掘立柱建物跡

間が2.39 (7.888)～2.51 m (8.284尺)の等間をなす。そのほか、P17～25—9は1.82 (6.007) — 3.04m (10.033尺)である。P25に近接するP26は0.42m (1.386尺)の柱間を計るが、不揃いで伴うもの明らかでない。

南北方向の7間は東面の北6間が0.78 (2.574)～1.18m (3.894尺)、南端1間が2.04m (6.733尺)であり、西面では南6間が0.84 (2.772)～1.06m (3.498尺)、北端1間が1.84m (6.073尺)である。狭い柱間12間の平均では0.97m (8.196尺)、これ

より広い南・北端2間では1.94m (6.403尺)となる。

柱穴の掘り方は径0.28～0.56mの円形、または楕円形を呈する。深さは0.17～0.54mを計り、東面を除く3面のP2、12、13、15、18では著しく浅い。柱痕は東面の柱穴によって径0.12～0.18m前後と推定される。

重複する建物には4号掘立柱建物があり、南面のP12を切って3号掘立柱建物より新しい。

第58表 3号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	掘出面の長さ	深さ	掘出面の高さ	東西の長さ	柱間隔	備考	柱穴番号	掘出面の長さ	深さ	掘出面の高さ	東西の長さ	柱間隔	備考
1	55×45cm	44m	131.25m	130.81m	cm	Be21機土Pはより新しい	14	45×45cm	46m	131.13m	130.67m	cm	
2	37×40	21	131.28	131.07			15	32×34	22	131.16	130.94		
3	40×37	25	131.24	130.99			16	40×40	54	131.18	130.64		
4	45×45	29	131.17	130.88			17	38×40	46	131.16	130.70		
5	38×36	42	131.24	130.82			18	28×23	17	131.18	131.01		
6	42×39	39	131.22	130.83			19	50×47	41	131.21	130.80		
7	35×33	31	131.24	130.93			20	53×54	50	131.25	130.75		
8	45×56	56	131.27	130.71			21	55×50	16	131.28	131.12		
9	39×37	58	131.20	130.62			22	38×36	35	131.29	130.94		
10	35×40	37	131.16	130.79			23	33×34	33	131.29	130.96		
11	37	54	131.21	130.67		北半は破壊	24	25×27	11	131.19	131.08		
12	35×37	23	131.16	130.93		4号建物柱穴No.13より新しい	25	70×29	15	131.20	131.05		
13	32×34	19	131.14	130.95			26	20×25	14	131.20	131.06		